

京都社寺調査報告 Ⅱ

序

昭和五十四年度からはじめた京都社寺文化財の調査は、この三月で二年目を終えようとしている。この間当館は、京都文化を中心とする文化財に関する資料の収集に本格的に取り組むための準備を進め、新年度に京都文化資料研究センター設置の運びとなった。内外の要請に応じて、明治以来の伝統をもつ博物館に新しい性格が加わることとなったのである。陳列と保存の他に、積極的な調査研究と情報資料の収集提供とが、今後の重要な課題であろう。

さて、昨年度に引き続いて、本年も京都南部地域を対象とした調査を行ったが、今年度からは、特定の社寺および遺跡についての調査を新たに加えた。すなわち、山科・上安祥寺跡、および宇治・興聖寺をとりあげることとしたのである。前者は平安時代前期に入唐僧惠運の建てた山寺として、彫刻史研究者の関心を集めている寺跡であり、後者は近世に復興された禅宗寺院の文化財を総合的に精査しようとするものである。

今後、これらの調査は当館の京都文化資料研究センターの重要な事業として位置づけられ、長期的な展望に立ち地道な努力を続けてゆきたいと考えている。

最後に、調査に際して多大のご協力をたまわった関係各社寺に心から謝意を表したい。

昭和五十六年三月

京都国立博物館長 林屋辰三郎

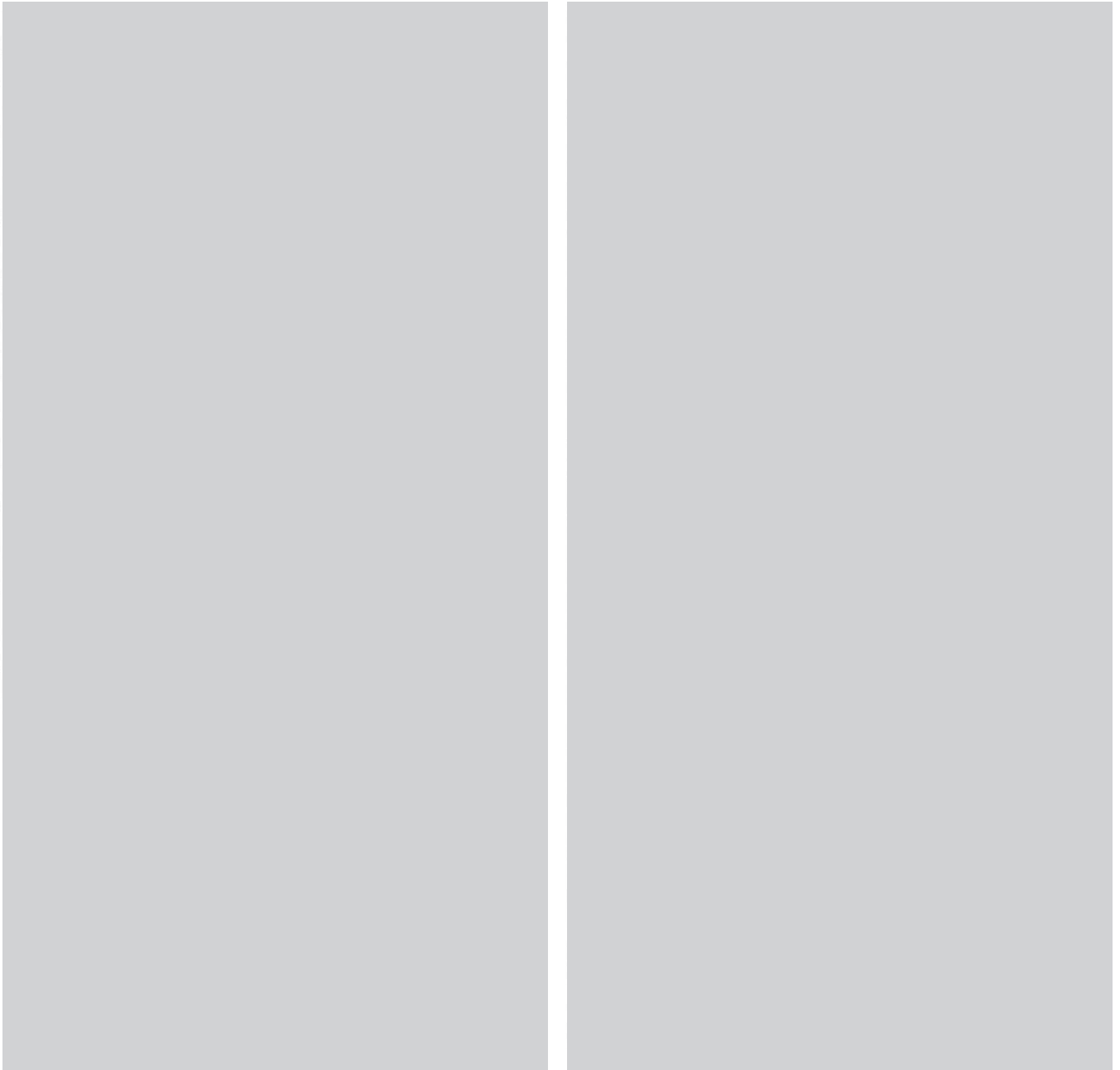
目次

序	
目次	
凡例	
図版	1
図版一覧	29
社寺一覧	30
本文 地域社寺調査	31
特定社寺および遺跡調査	45
調査社寺索引	67

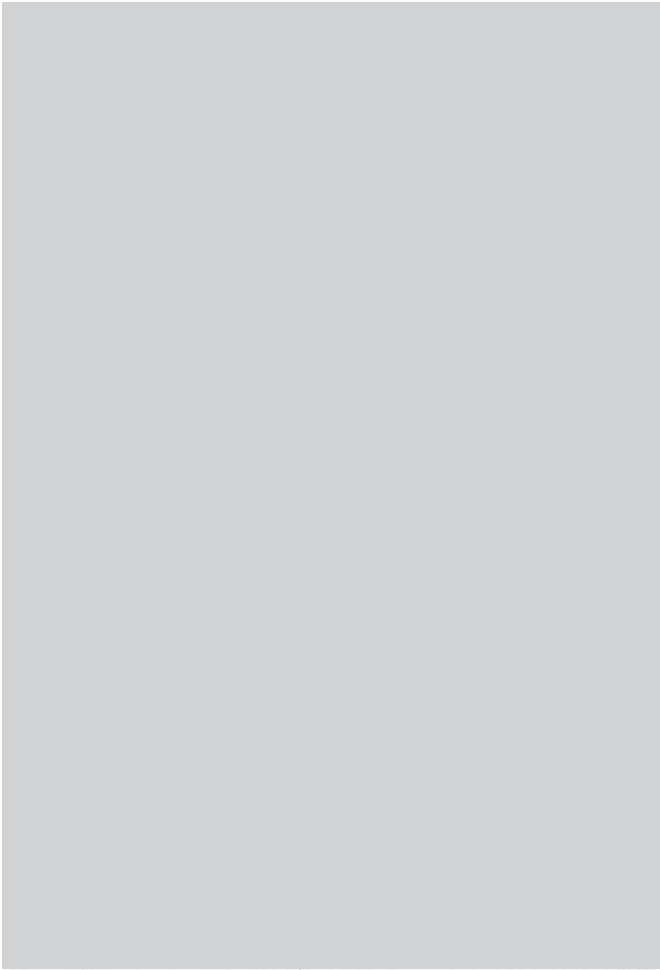
凡例

- 一、本冊は当館が昭和五十四年度から実施している京都社寺調査の、昭和五十五年年度の報告書である。
 - 一、本調査は毎年地域を定めて行うものと、特定の社寺および関係遺跡を対象とするものからなる。
 - 一、調査方法は、『寺院什器簿』（当館蔵本、明治三十年頃筆録か）をもとに、可能な範囲で現状を確認し、注目すべき作品については、詳細な調査と写真撮影を行うものである。時代が書き入れているものは、調査時に所在が確認されたものである。
 - 一、本文は、寺名、宗派、現所在地名、および（ ）の中に明治期の旧地名を記したあと、『寺院什器簿』の記載をそのまま上段に収め、下段に時代と備考の欄を設けた。『寺院什器簿』に記録されず、調査時に新たに確認された資料は、『寺院什器簿』の記事のあと、【記録外】として書き出した。
 - 一、備考欄の①②…の番号は各項末尾の註に対応し、特定社寺のところで番号の上に絵、彫、陶…とあるのは該当各部の註記参照を意味する。※印は写真原版が当館に蔵されることをあらわす。
 - 一、法量の単位は釐（cm）である。
 - 一、主な参考文献は次のとおりである。
 - 『城南』・城南文化研究会編 城南宮 昭和四十二年（社寺関係の執筆は毛利久・近藤豊両氏）
 - 『京都府寺院重宝調査白帳』・京都府教育委員会編 昭和十六年—二十年（頁数は当館複製本のそれを示す）
 - 一、地域社寺調査は伊東史朗が行い、特定社寺および遺跡調査の分担者は次のとおりである。（五十音順）
 - 伊東史朗（美術室員） 稲田和彦（主任研究官） 井上 正（学芸課長）
 - 金沢 弘（普及室長） 狩野博幸（美術室員） 河原正彦（工芸室長）
 - 木下政雄（資料室長） 切畑 健（主任研究官） 難波田徹（主任研究官）
 - 西上 実（美術室員） 灰野昭郎（工芸室員） 八賀 晋（考古室長）
- なお写真撮影は金井杜男が行い、報告書作成は伊東史朗が担当した。

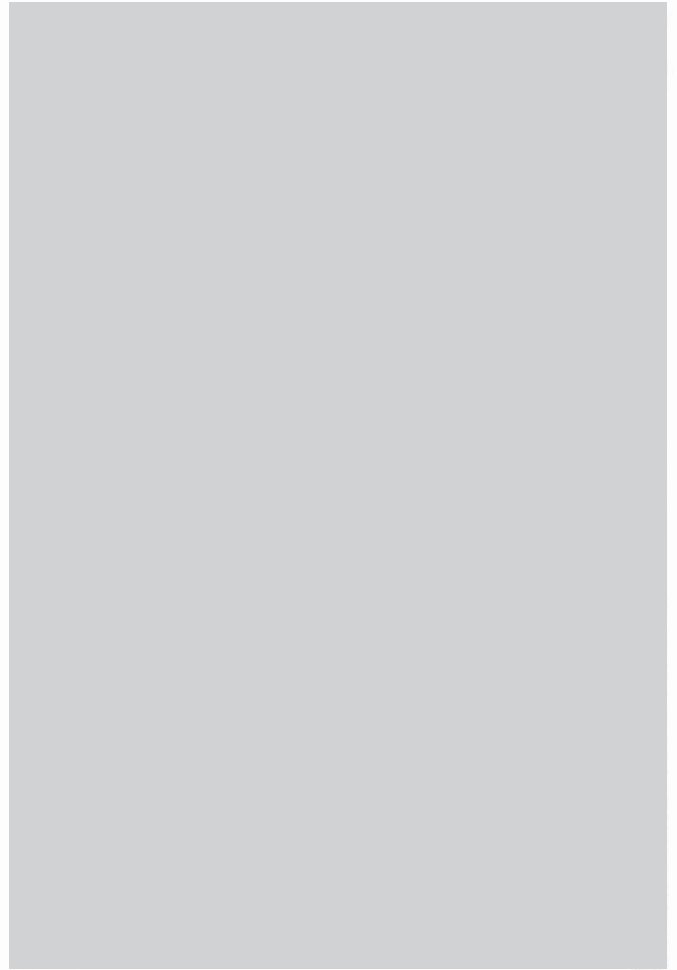
圖
版



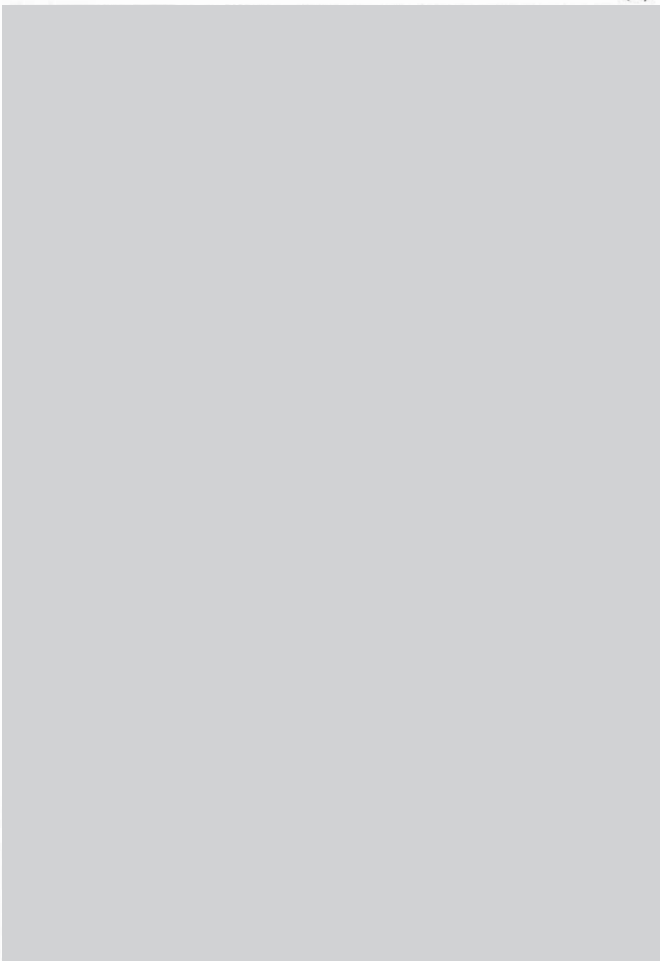
1 阿弥陀如来立像 行住院



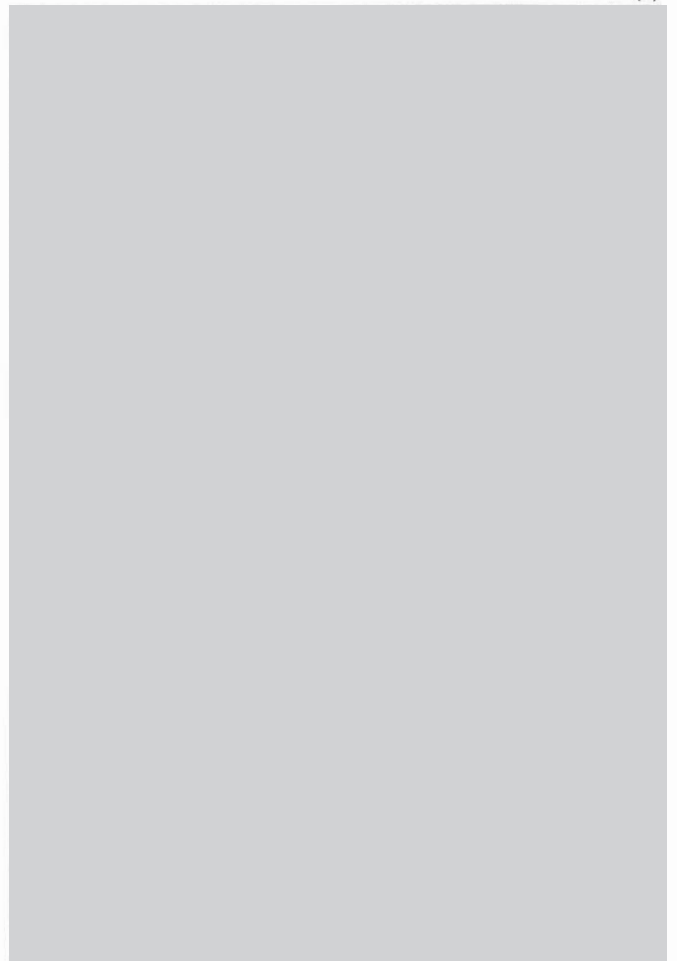
(b)



(a)

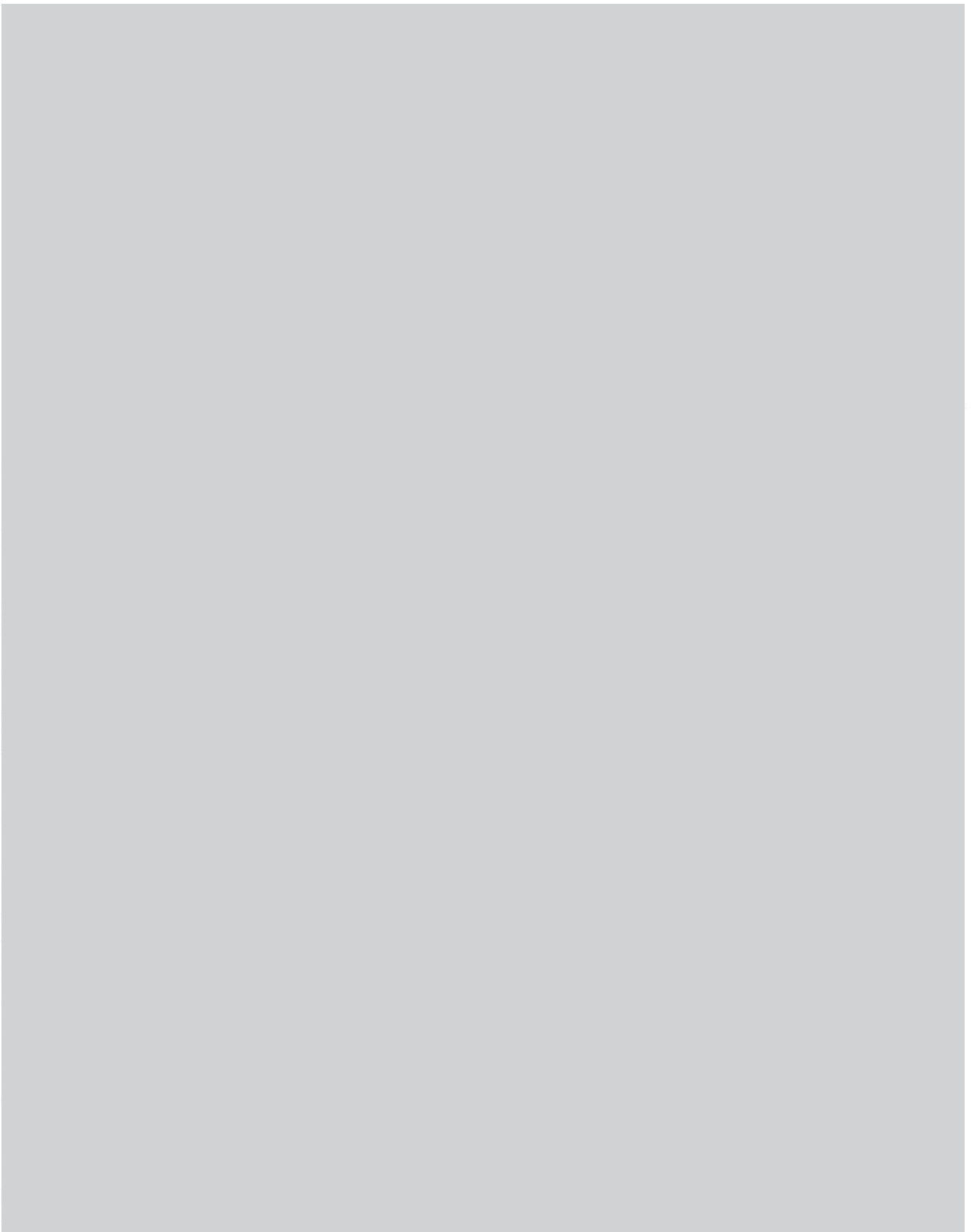


(d)

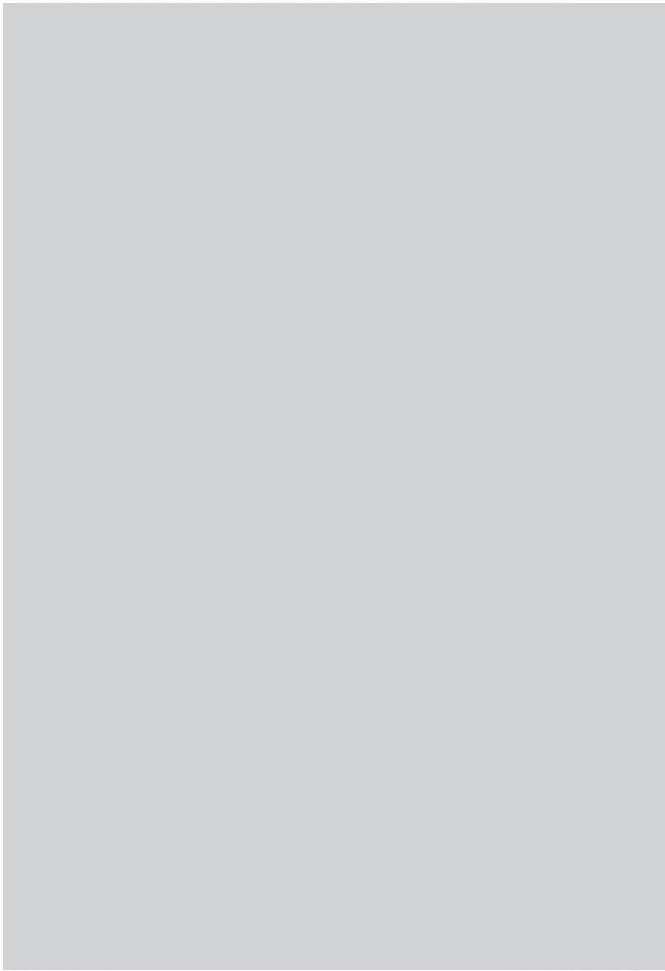


(c)

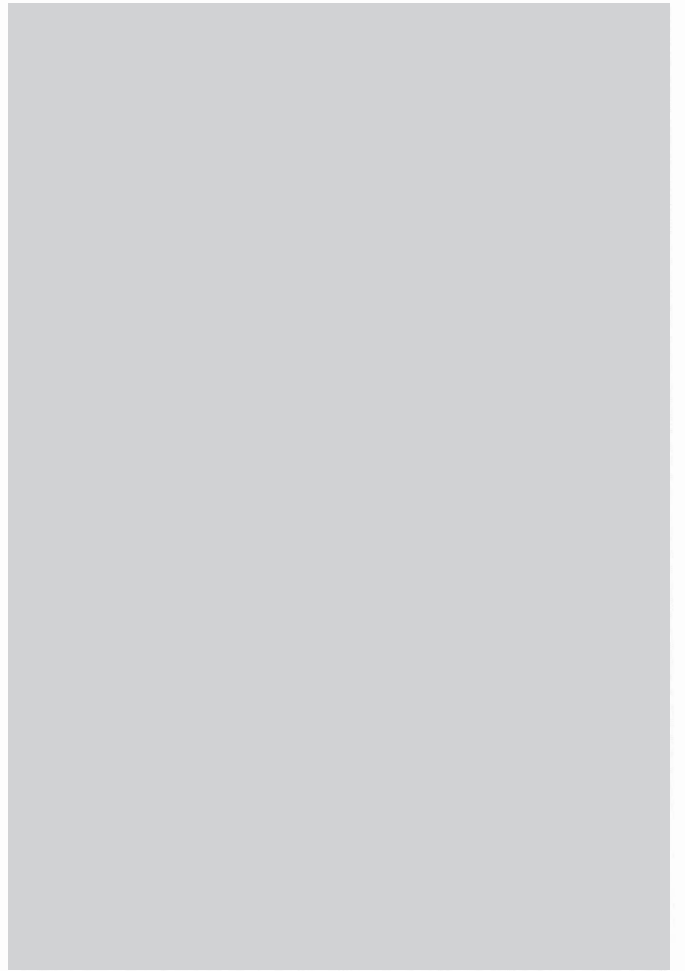
2 薬師如来坐像(a~d) 行住院



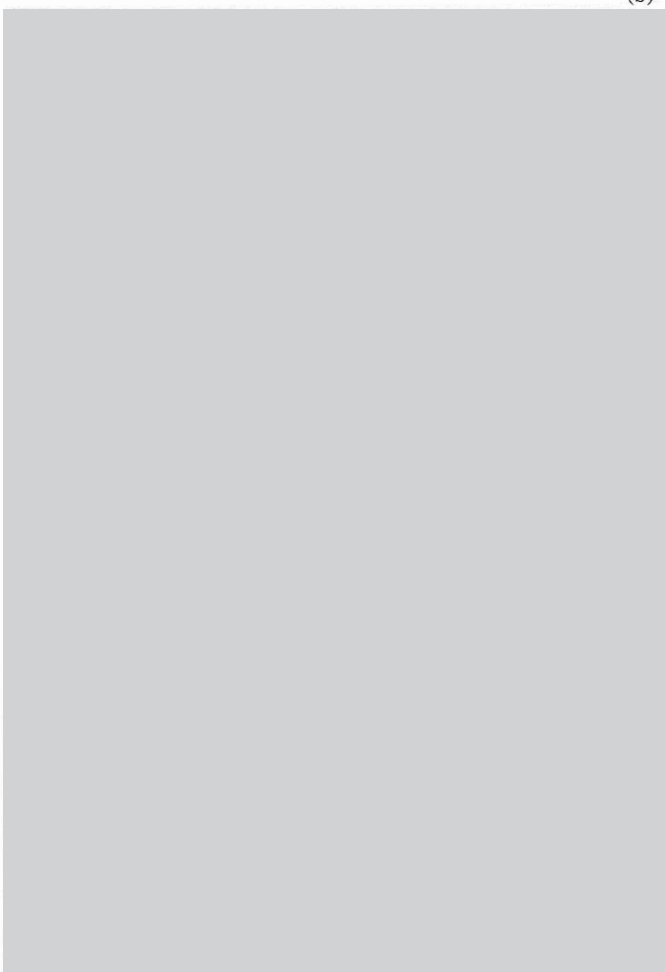
3 大日如来坐像 行住院



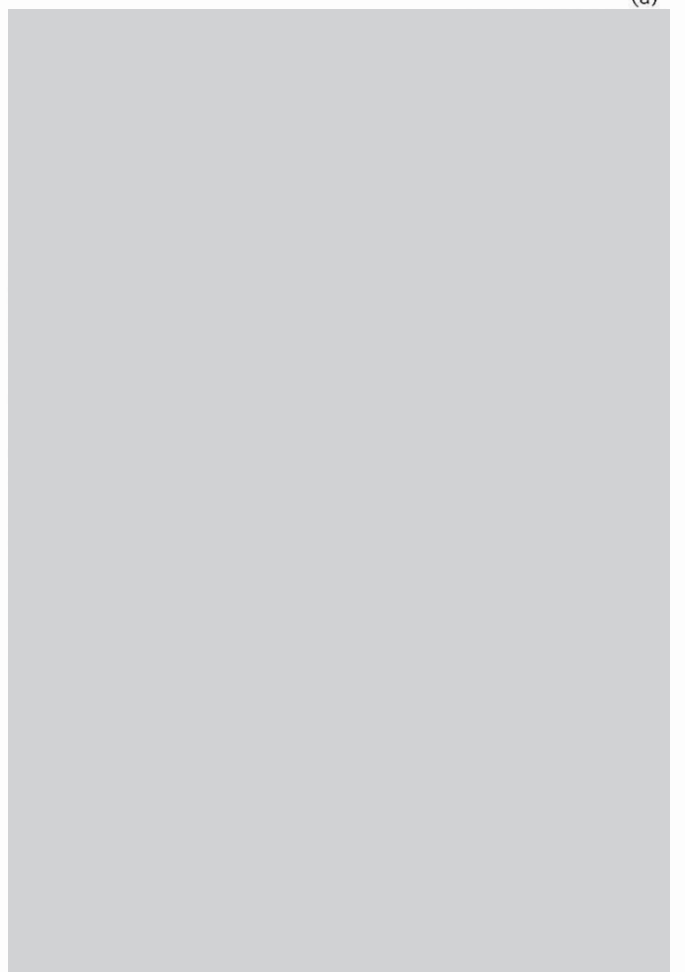
(b)



(a)

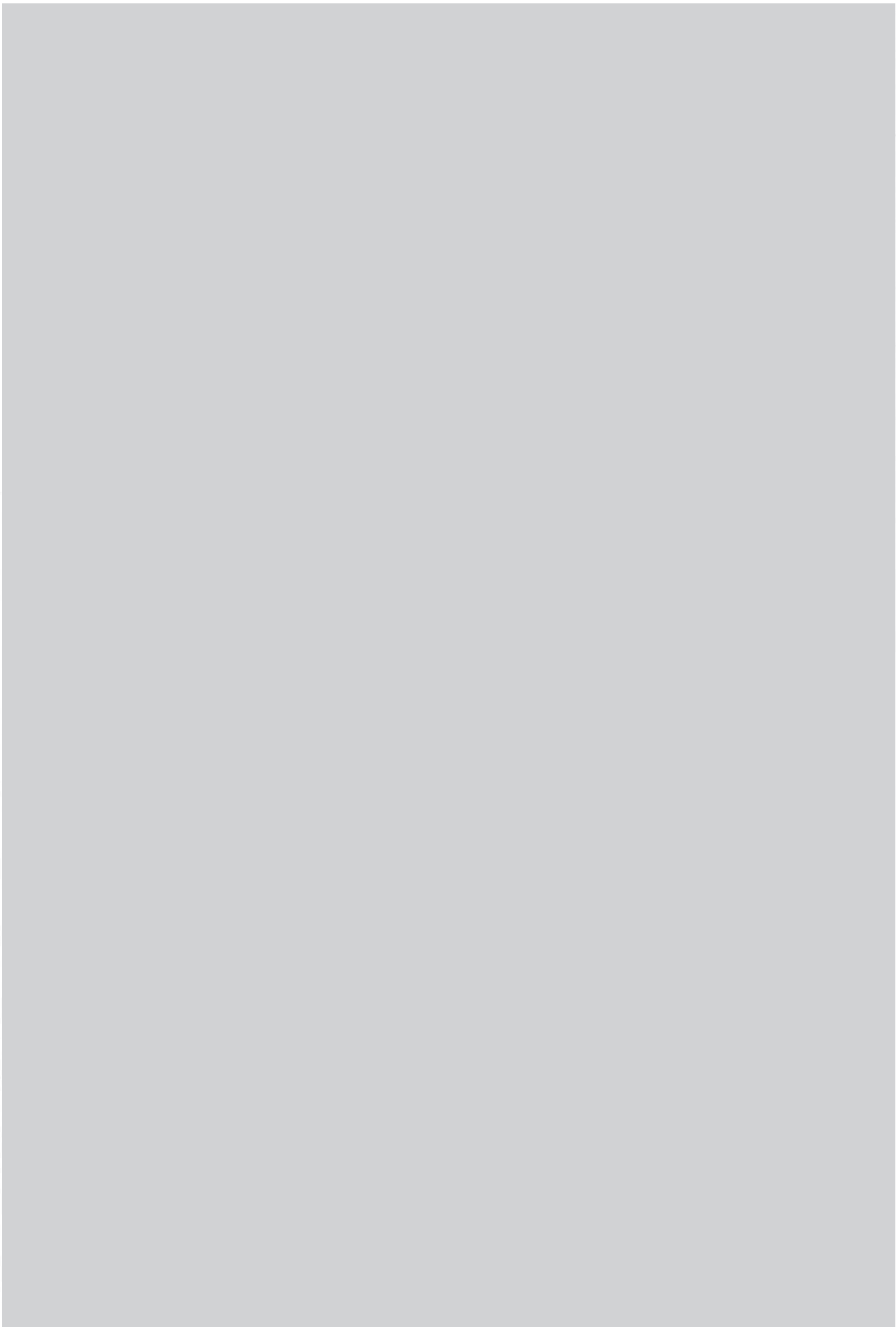


(d)

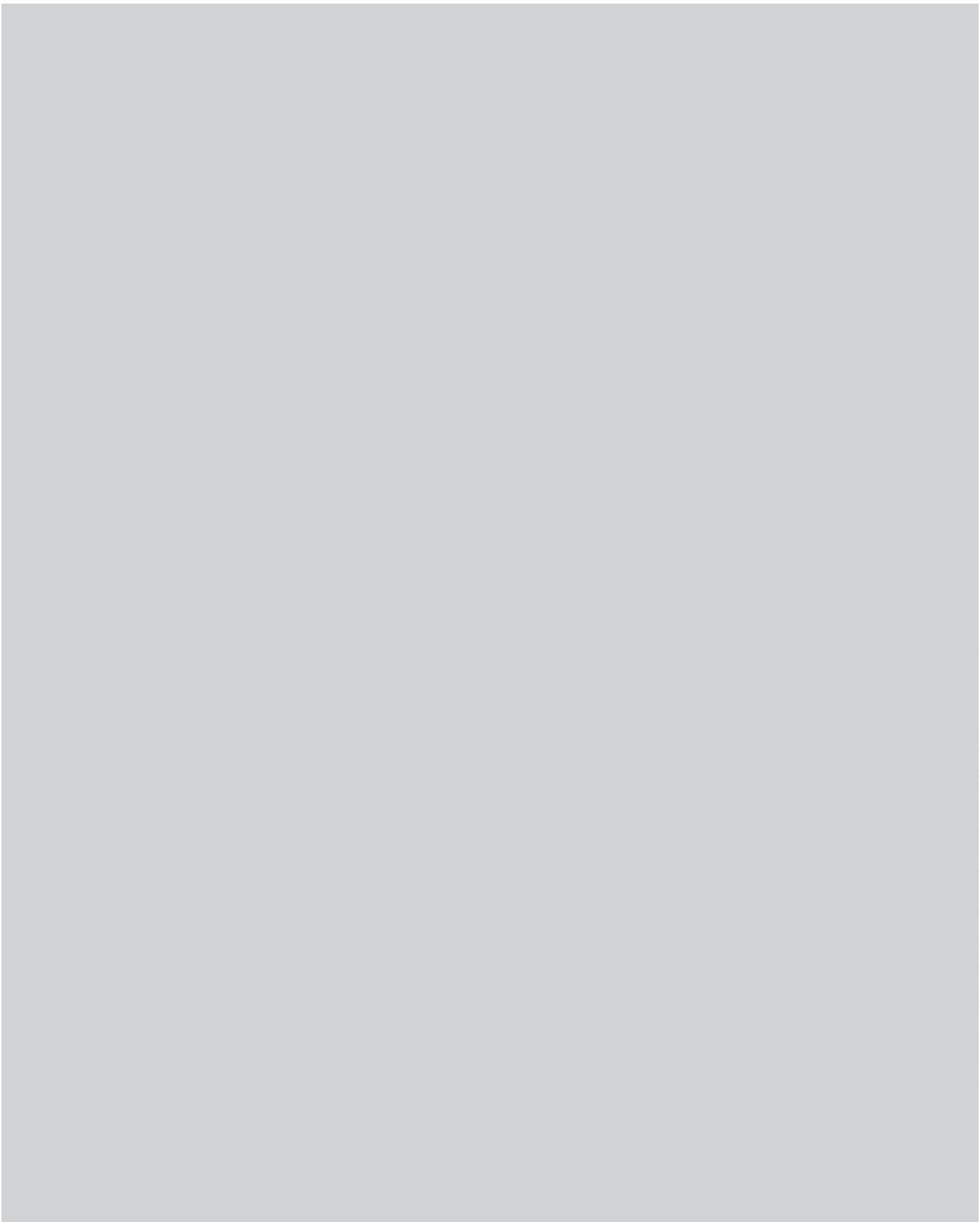


(c)

4 菩薩形坐像(a~e) 行住院

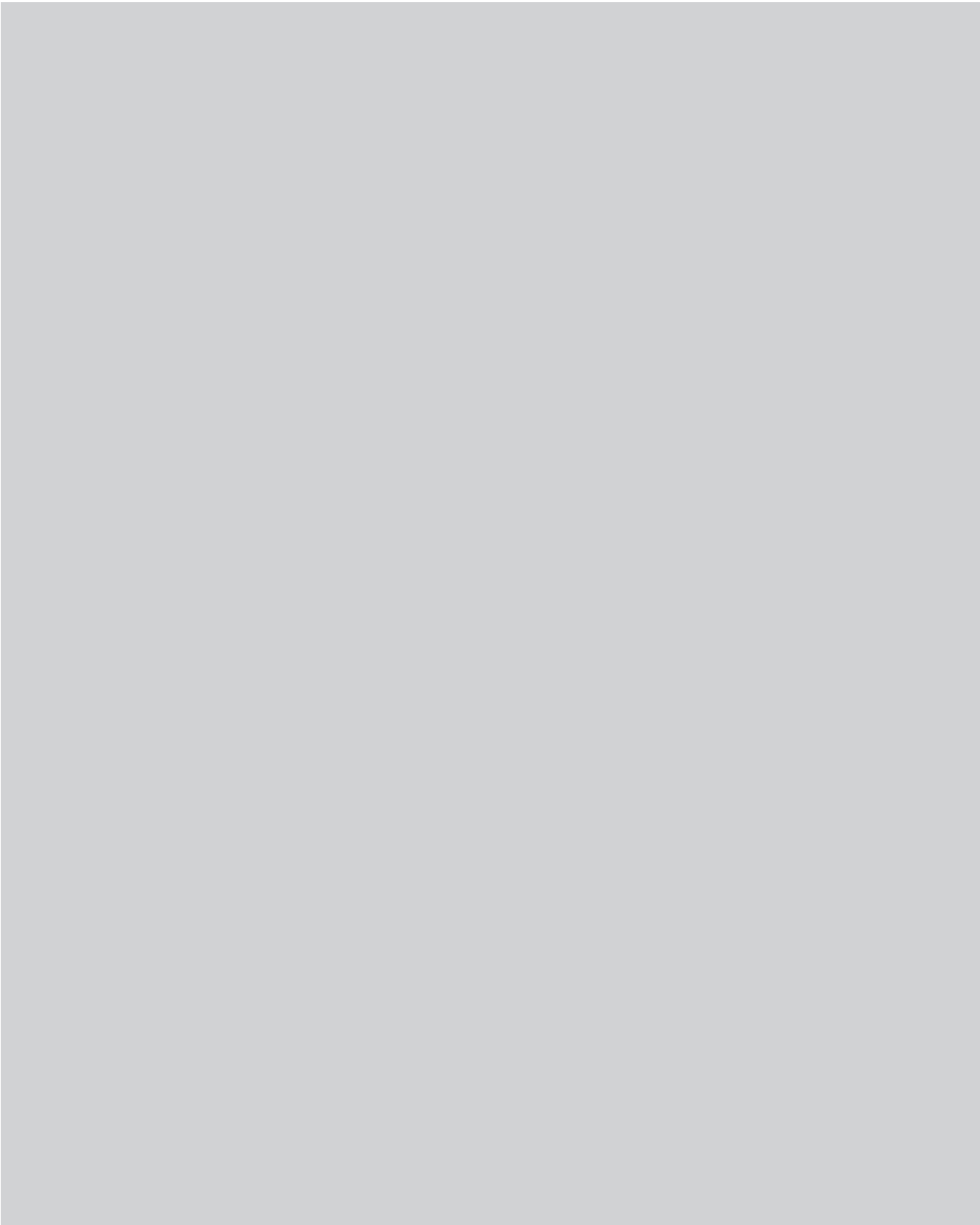


(e)

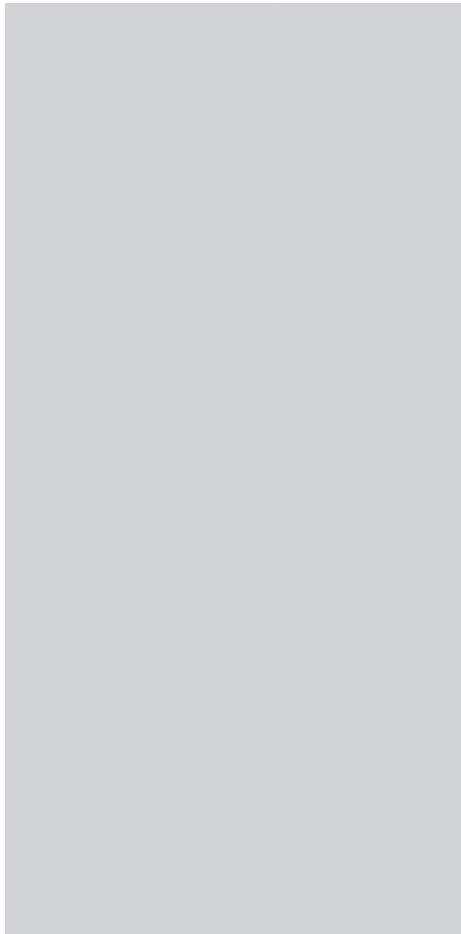


5 阿弥陀如来坐像(a、b) 一念寺

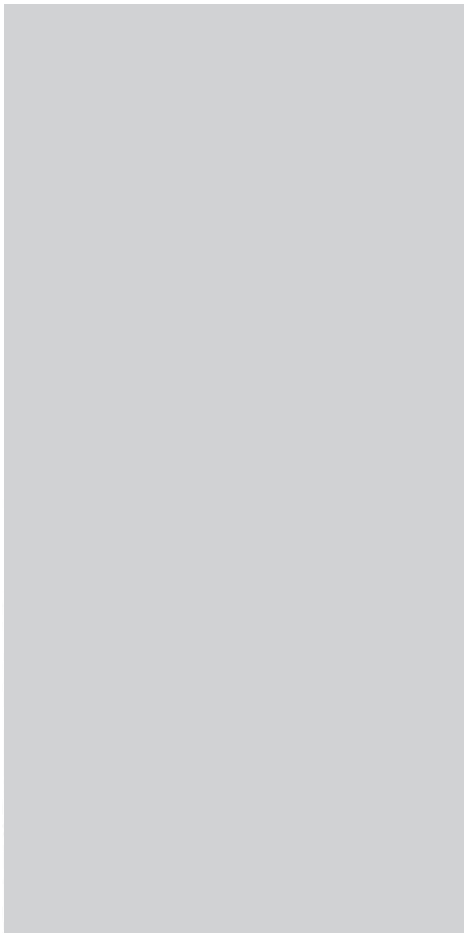
(a)



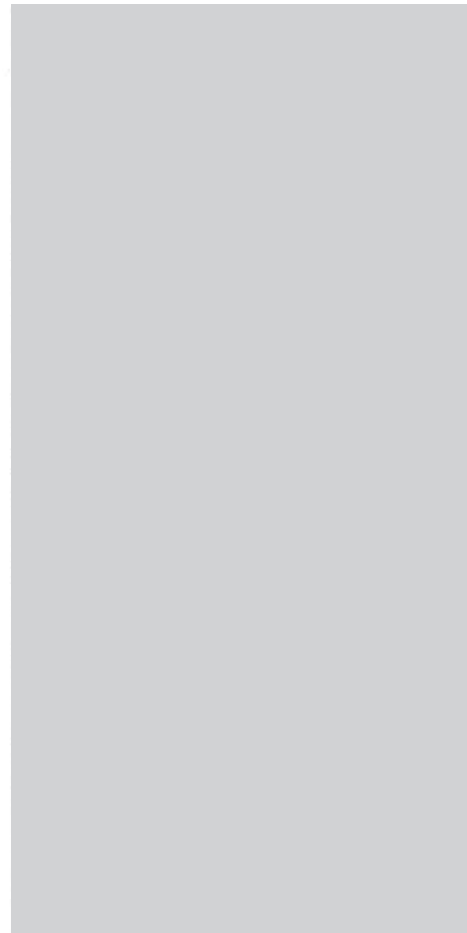
(b)



阿弥陀如来像

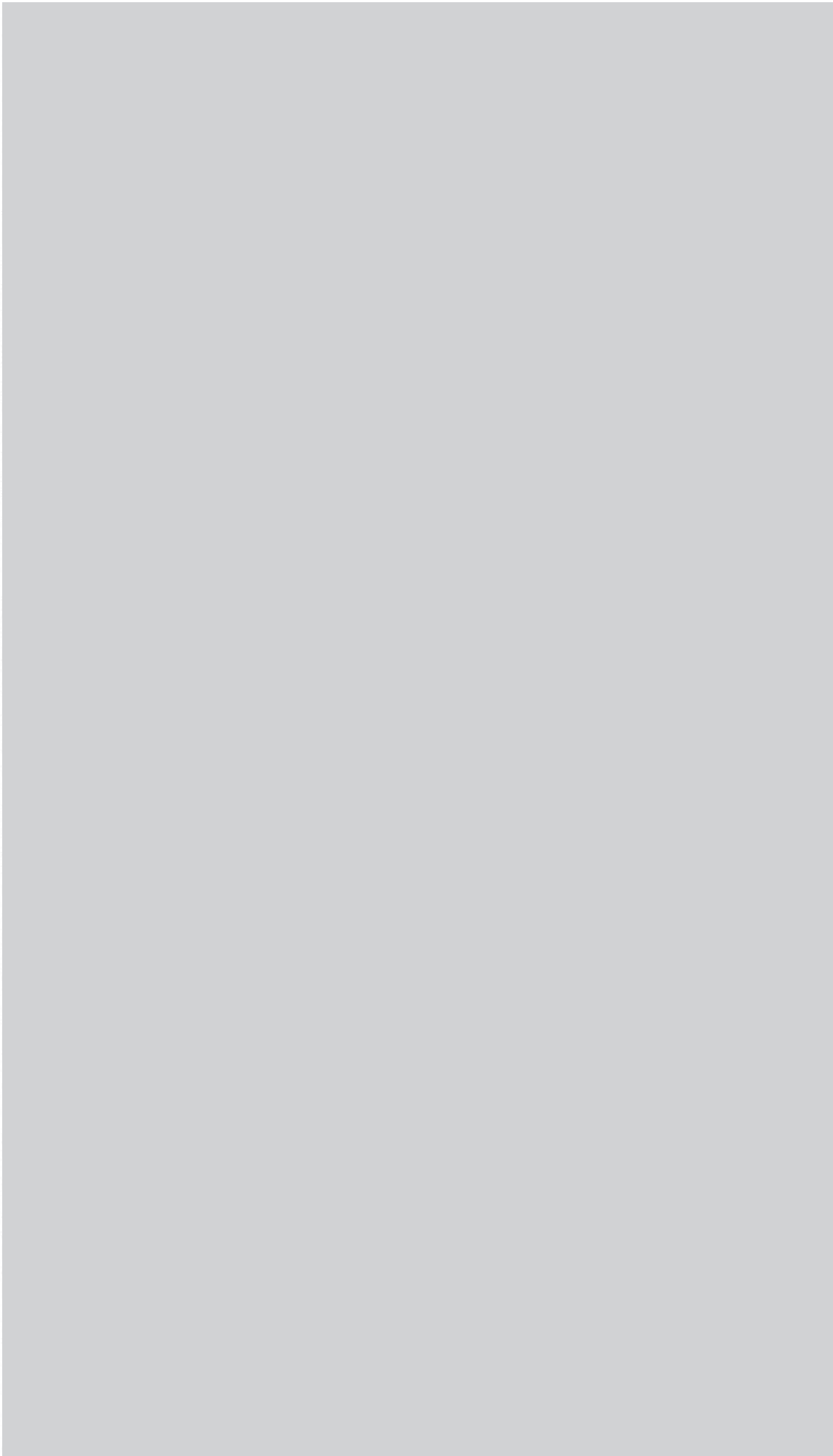


勢至像

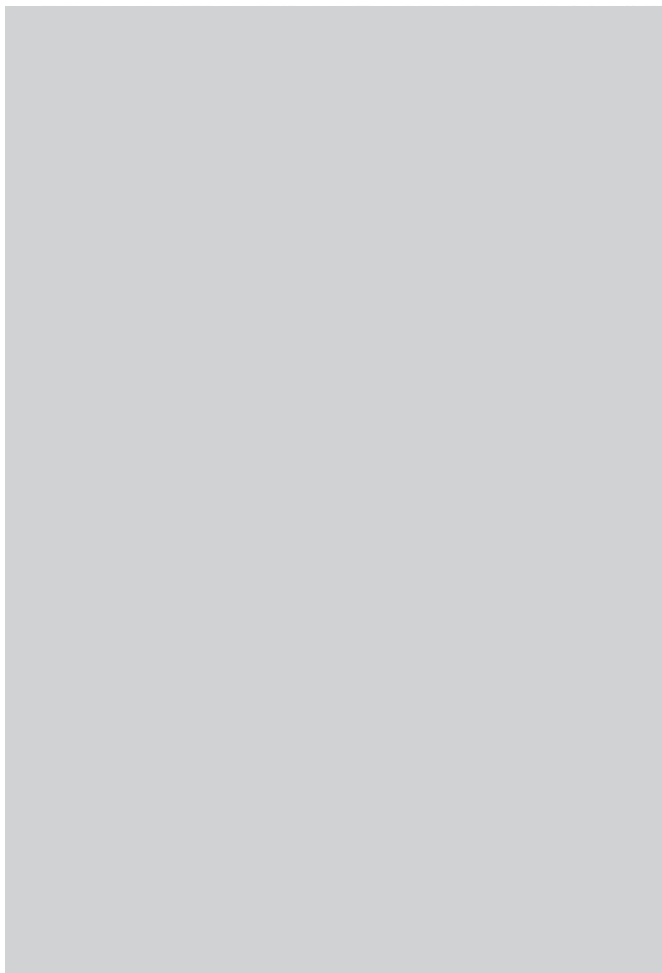


観音像

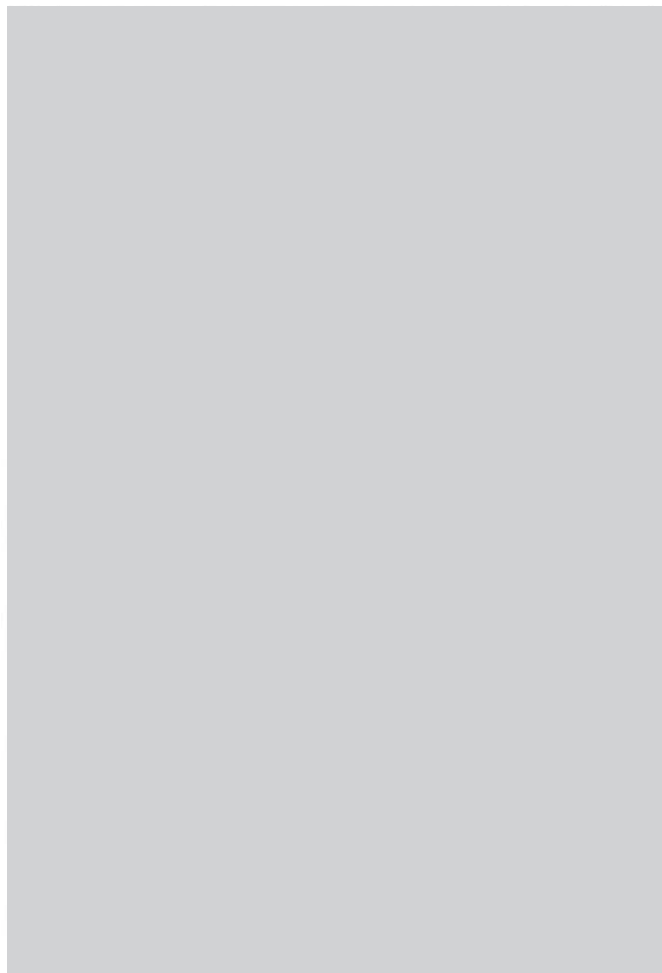
6 阿弥陀如来および両脇侍像 恵光院



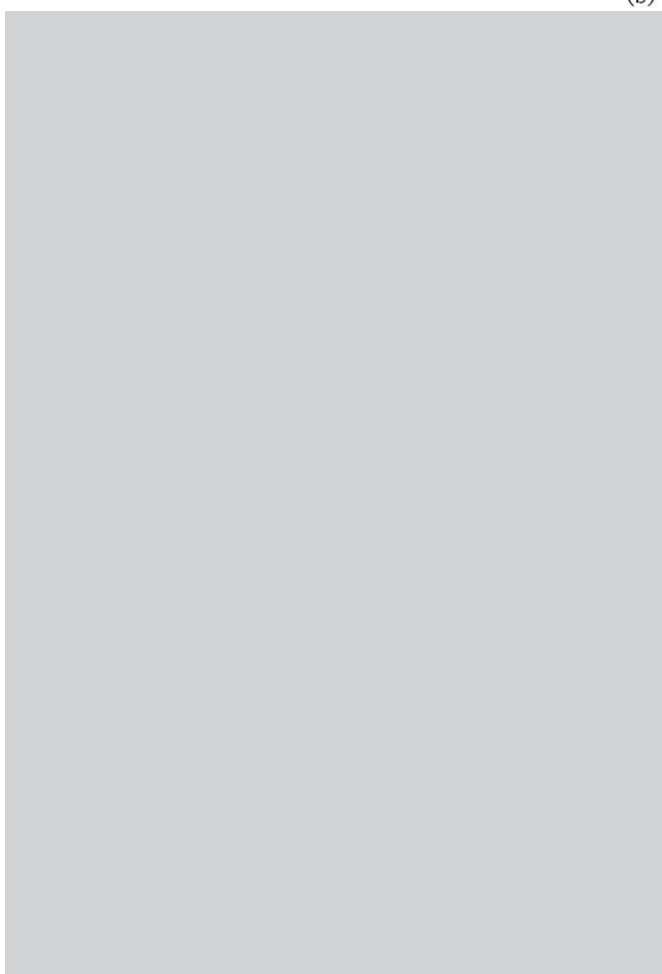
7 地藏菩薩立像 世音寺



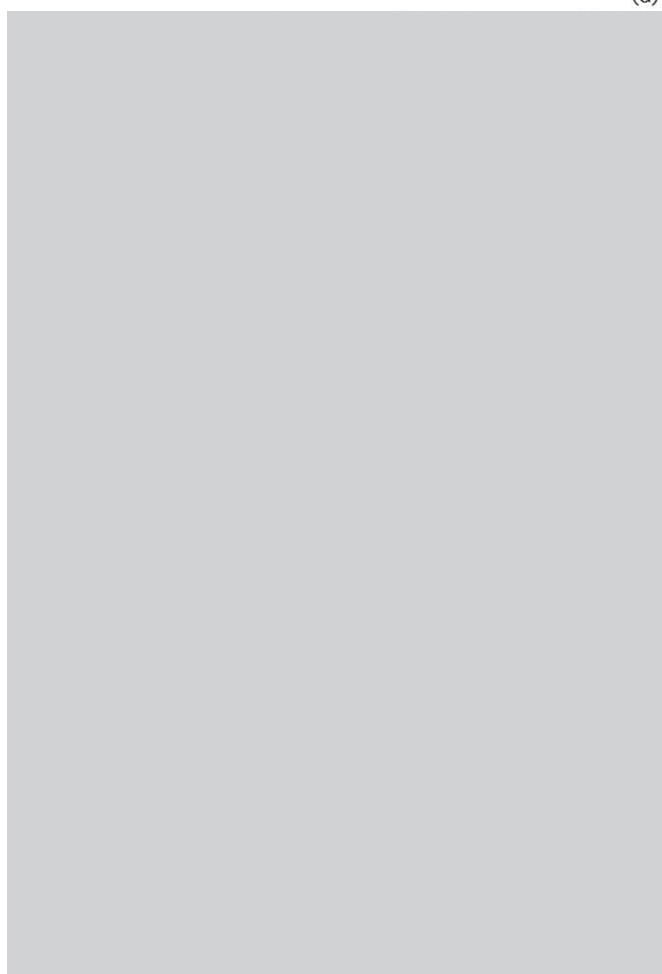
(b)



(a)

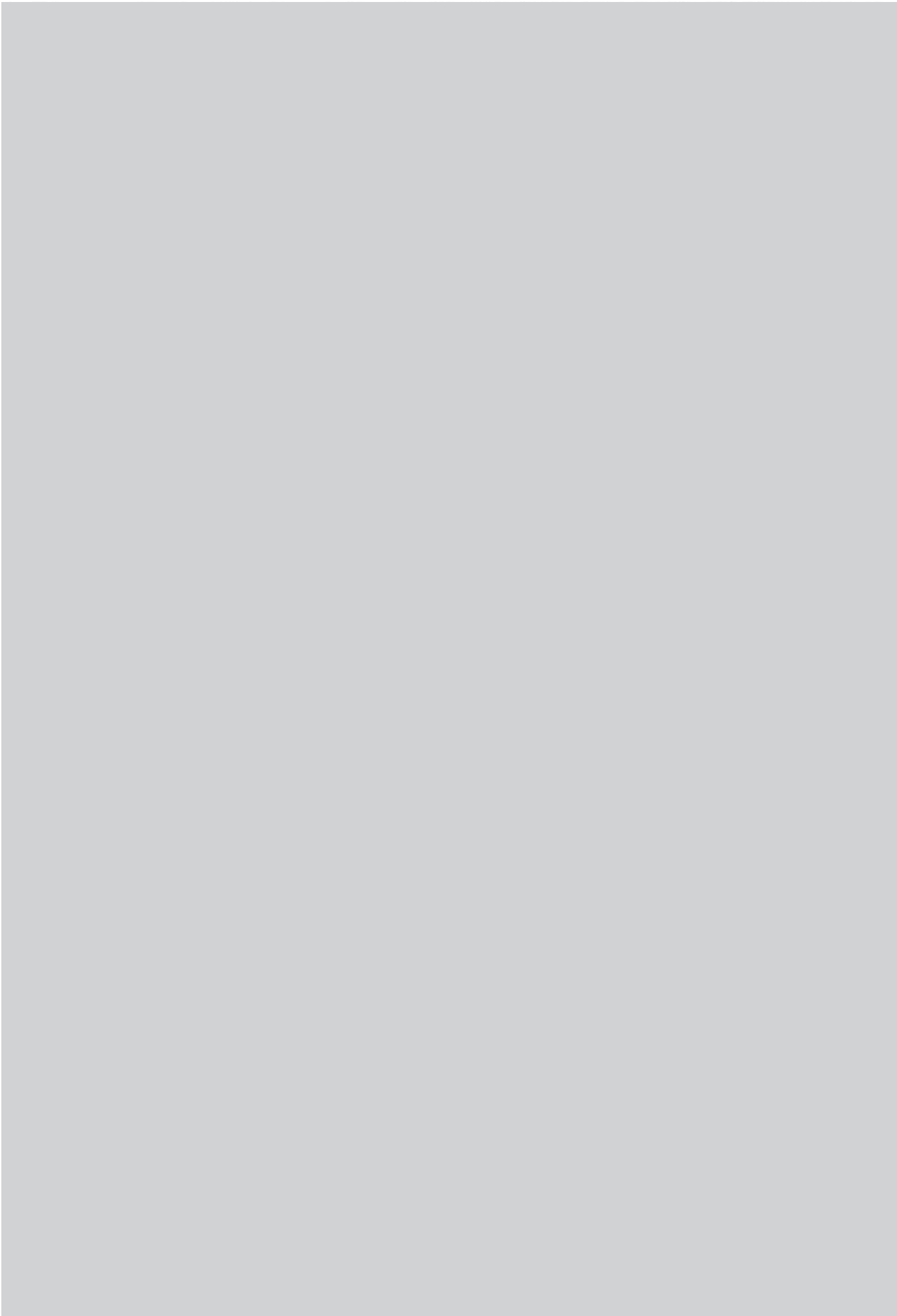


(d)

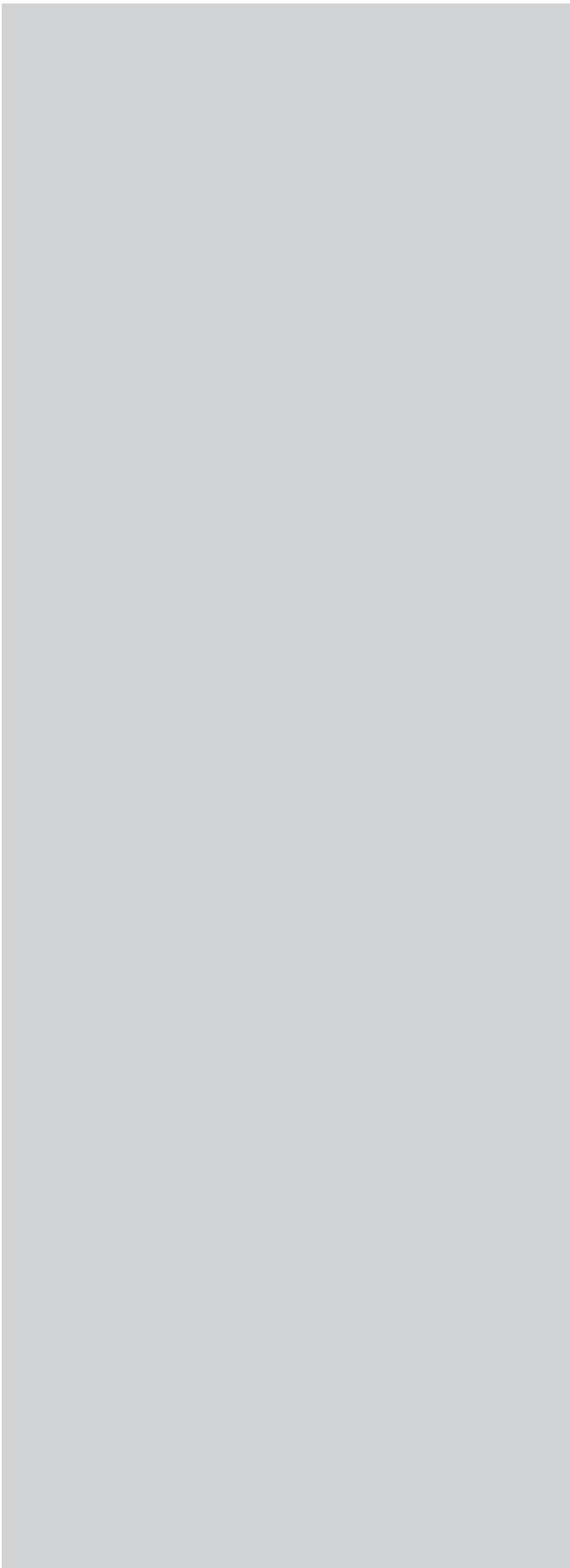


(c)

8 菩薩形坐像(a~e) 宝寿寺

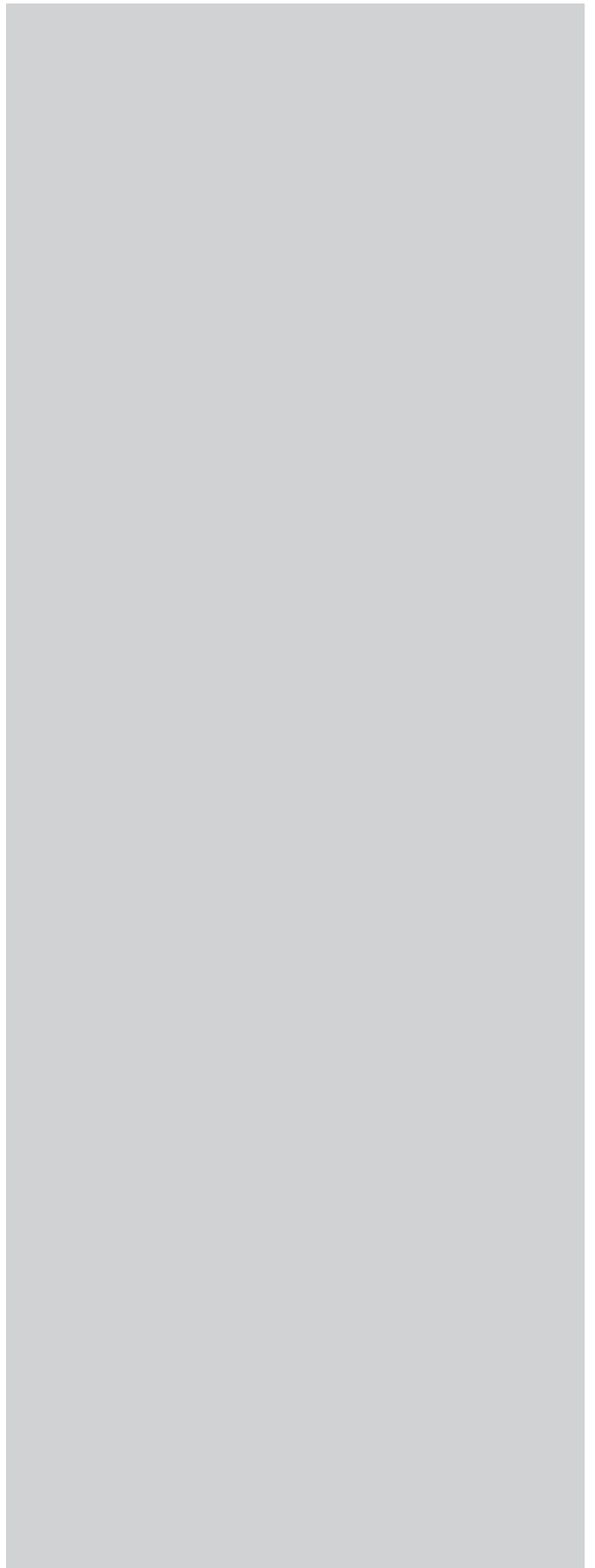


(e)

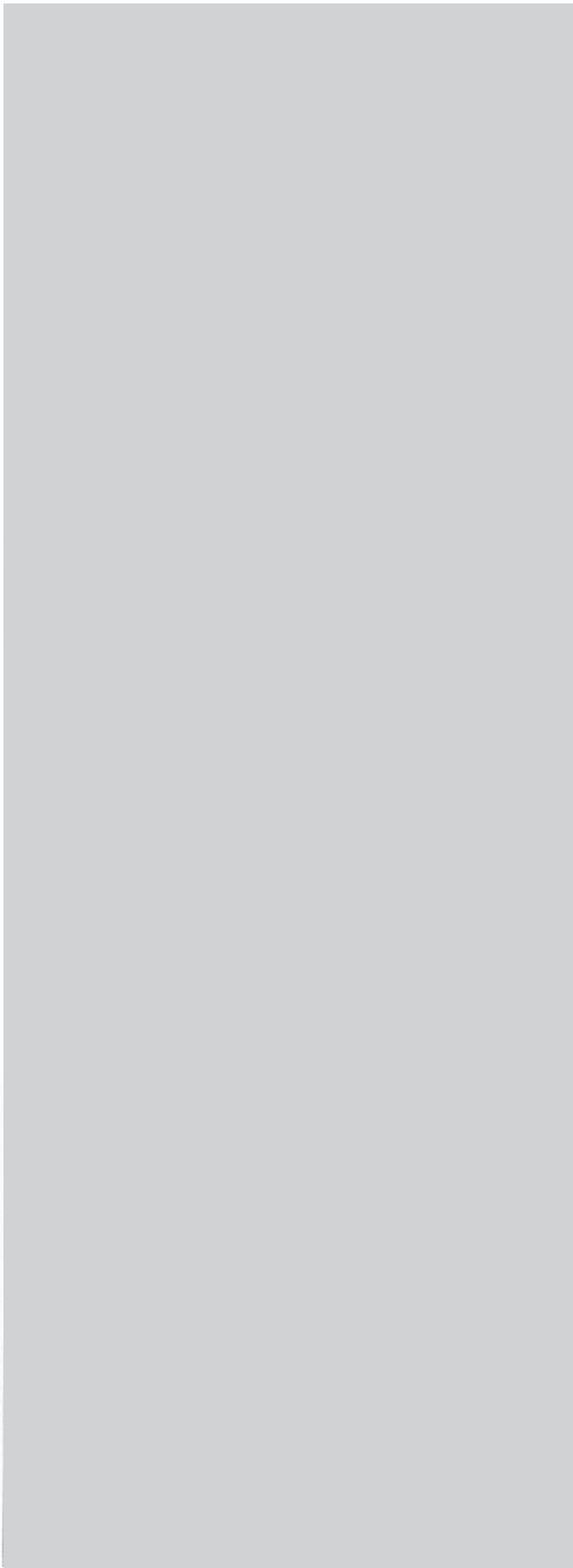


9 菩薩形立像(a~d) 三縁寺

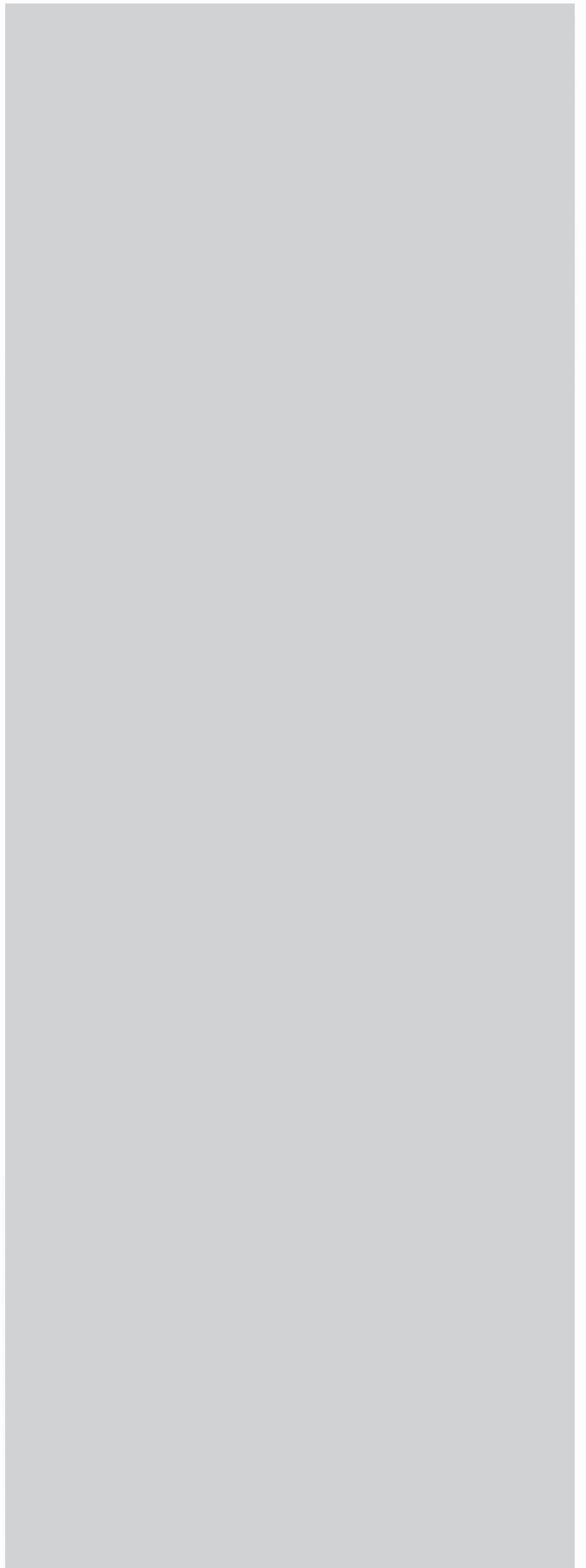
(b)



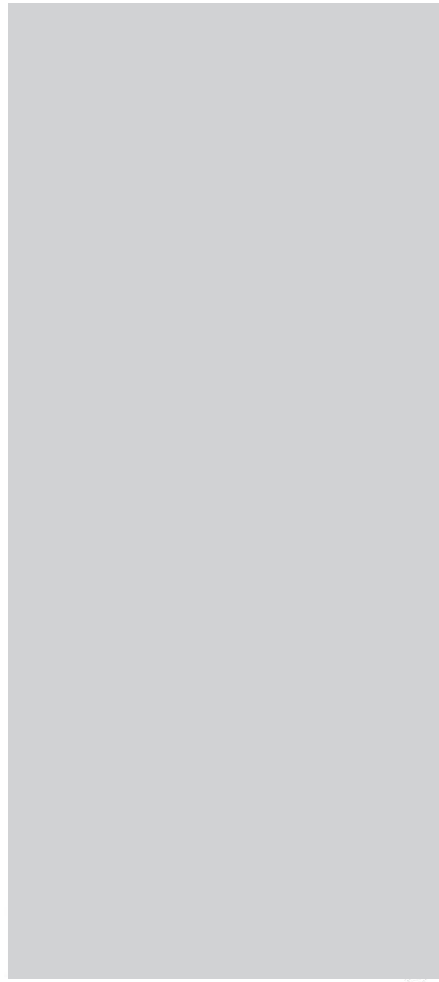
(a)



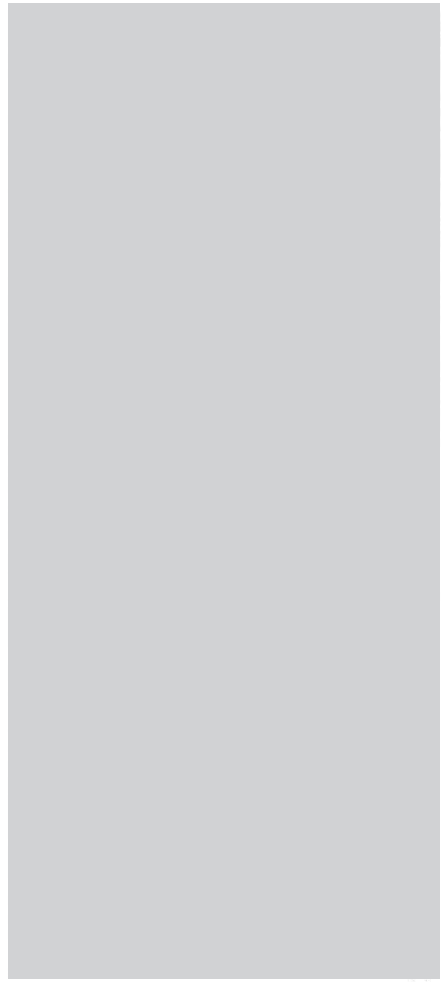
(d)



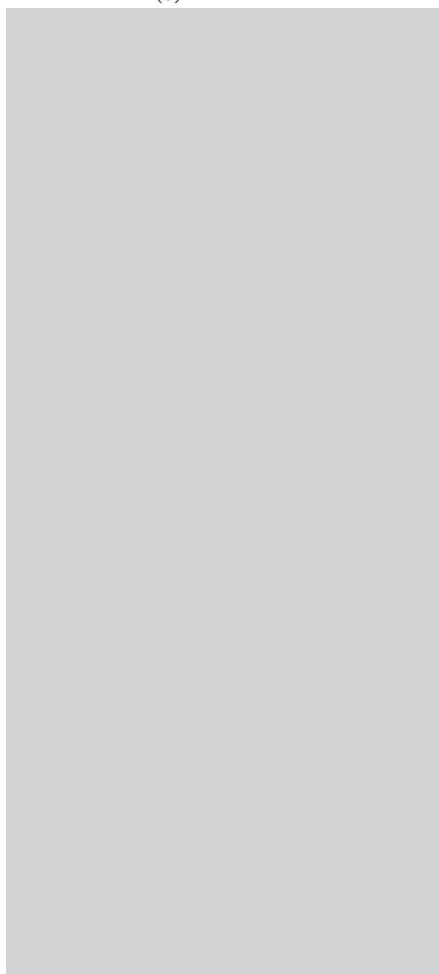
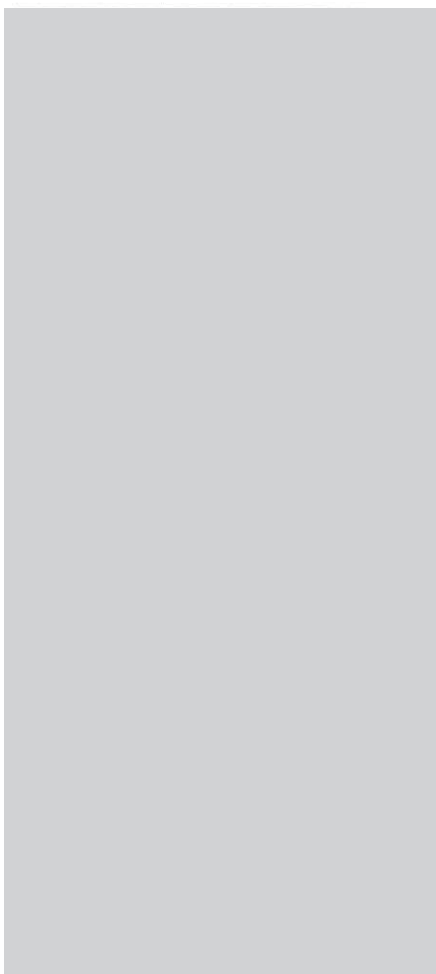
(c)



(b)

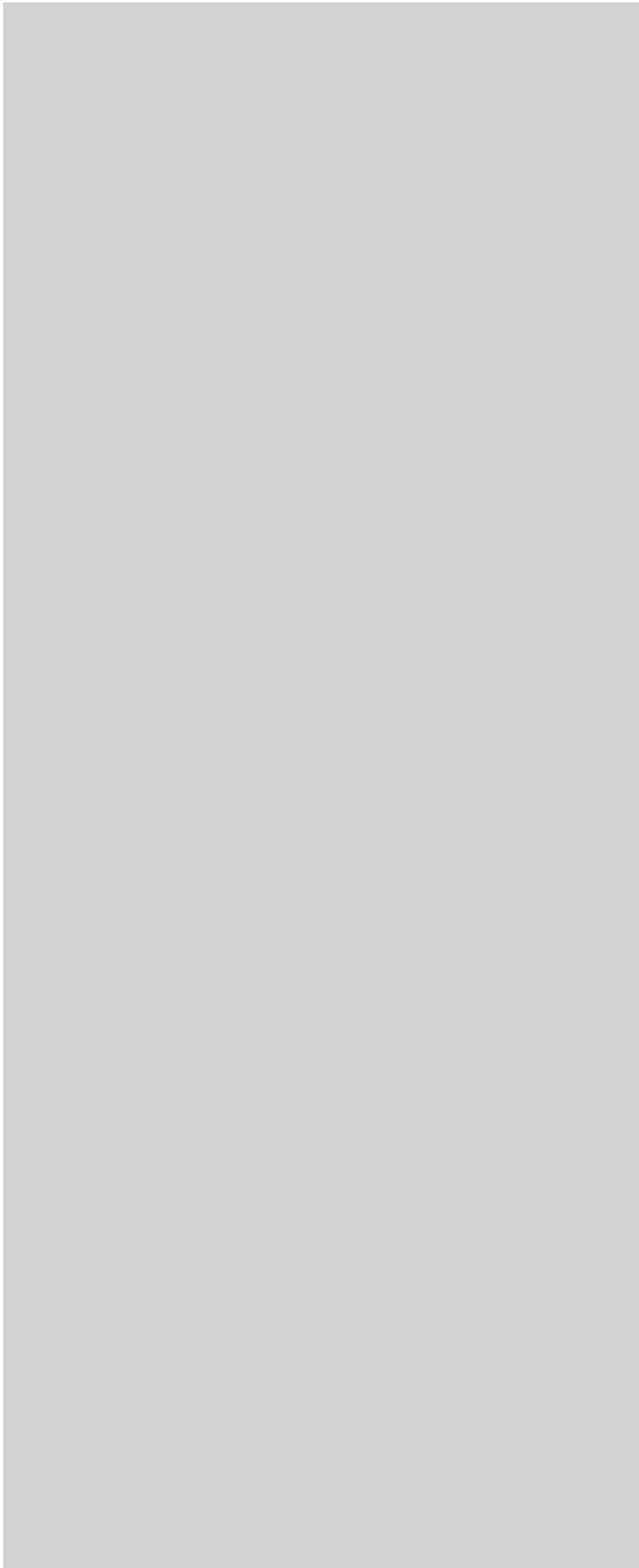


(a)

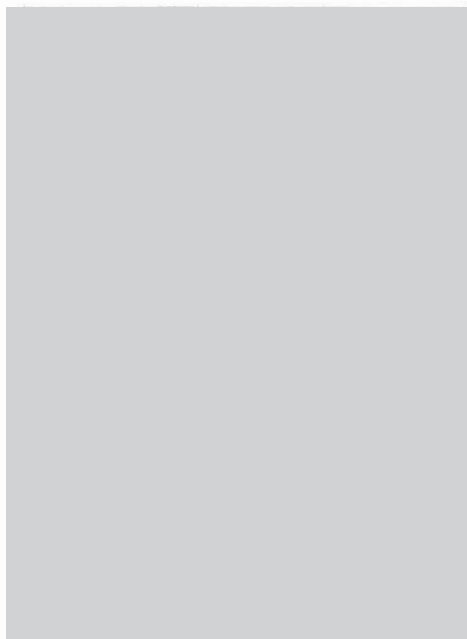


10 十一面観音立像(a~e) 西念寺 (d)

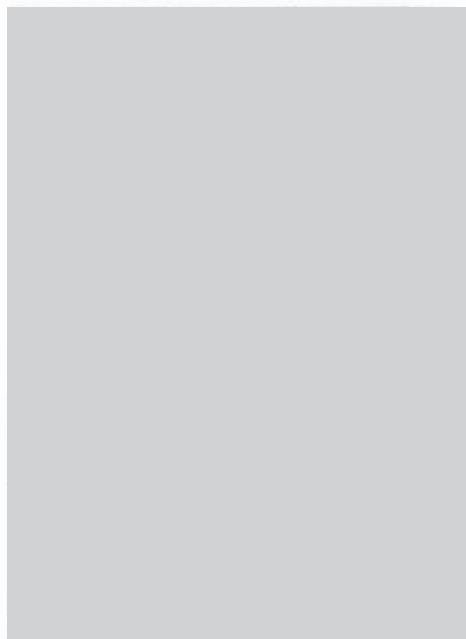
(c)



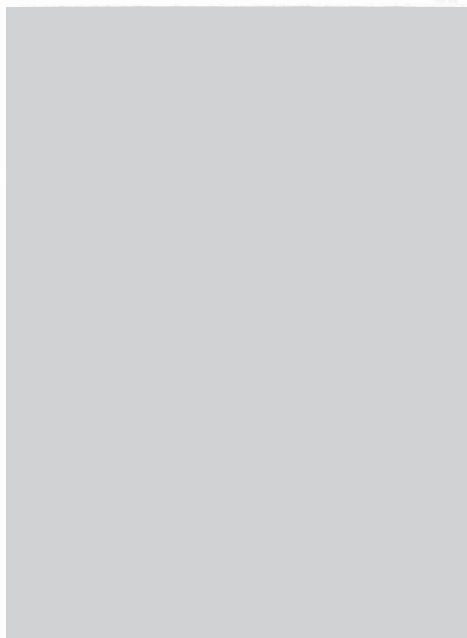
(e)



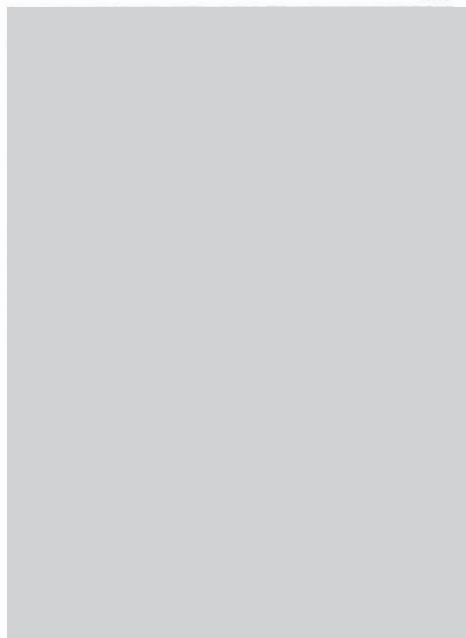
(b)



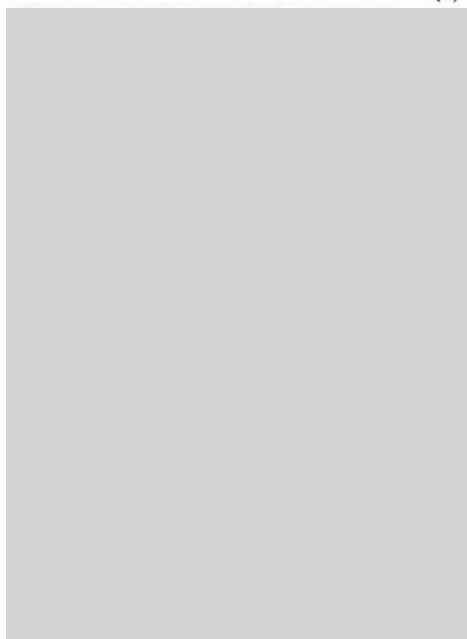
(a)



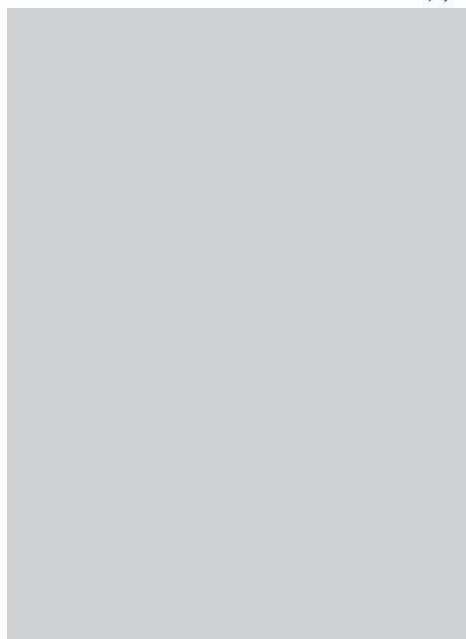
(d)



(c)

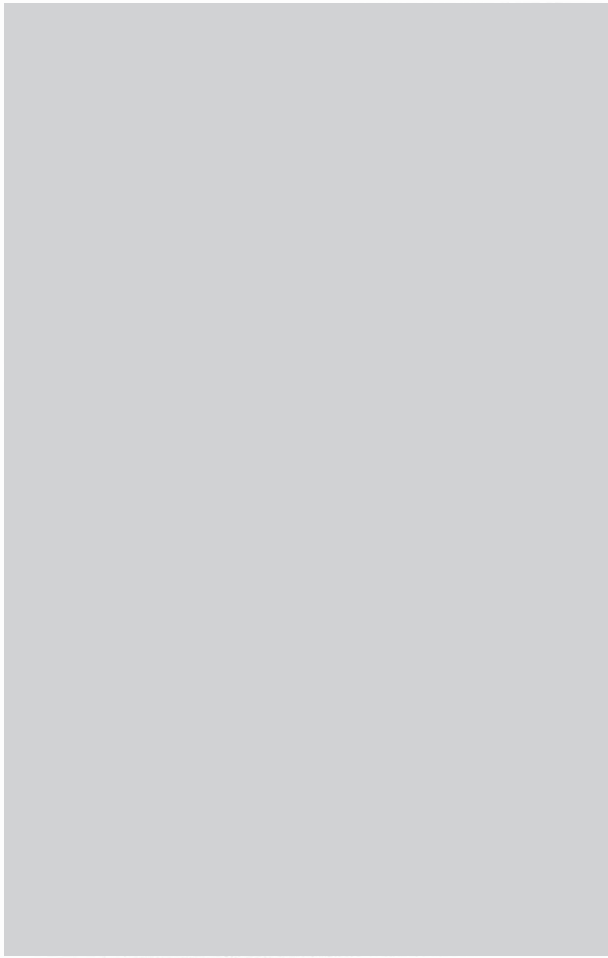


(f)

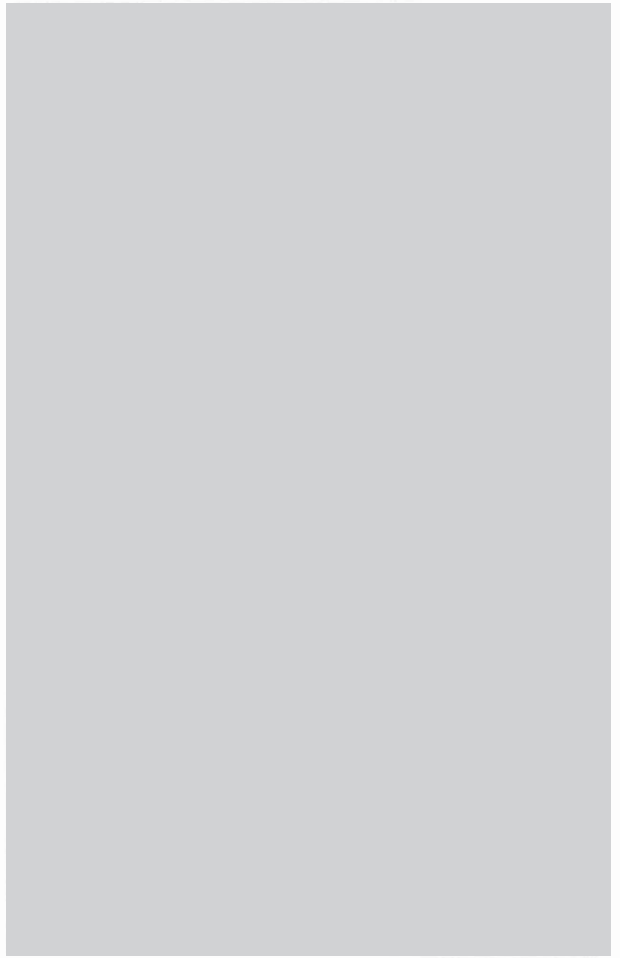


(e)

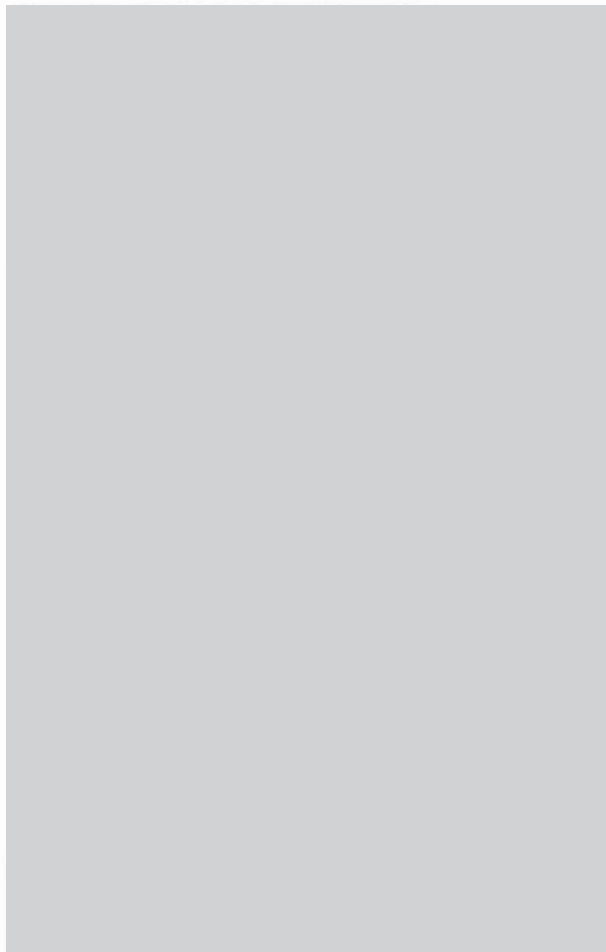
11 十一面観音台座蓮弁墨書戯画(a~f) 西念寺



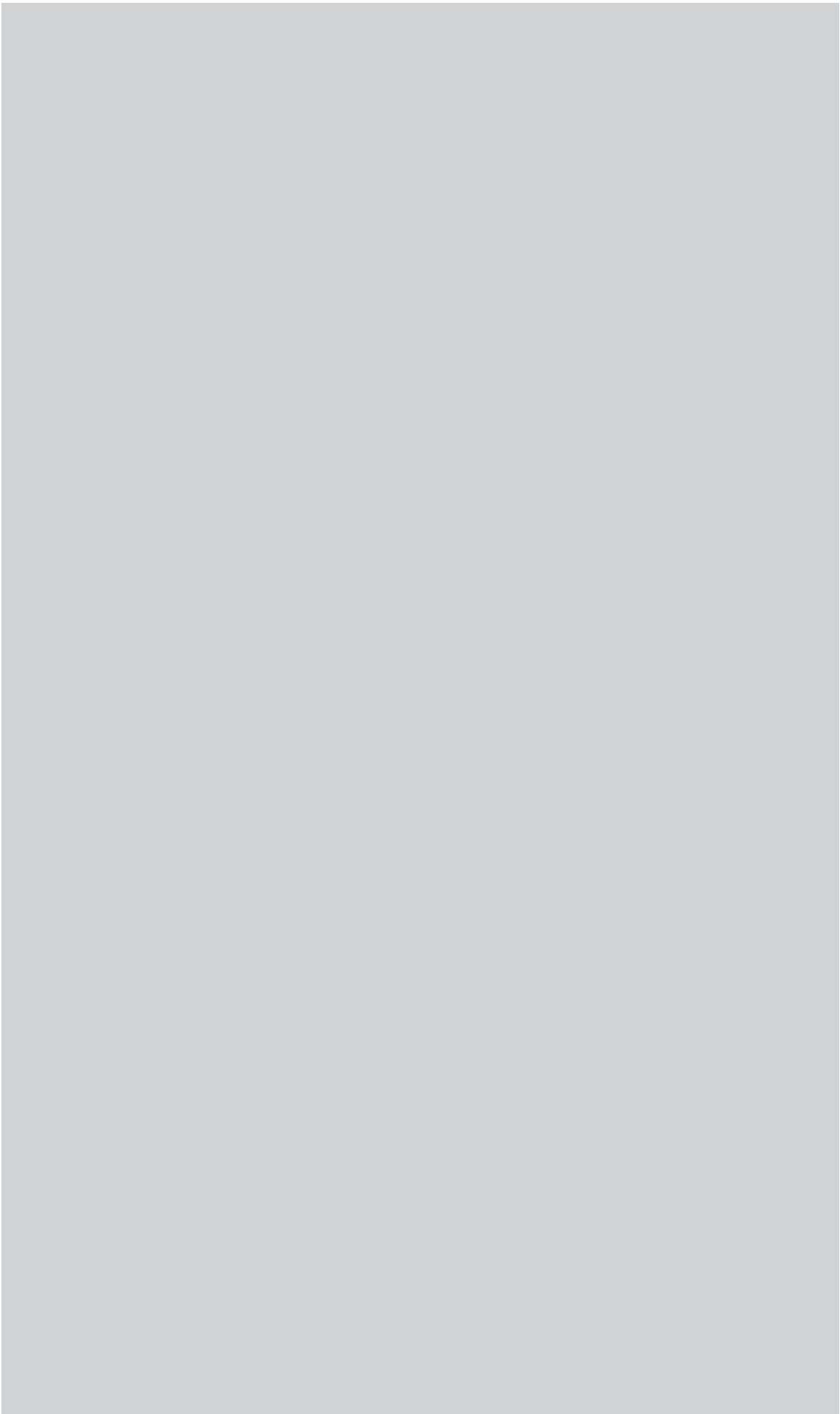
13 毘沙門天立像 西念寺



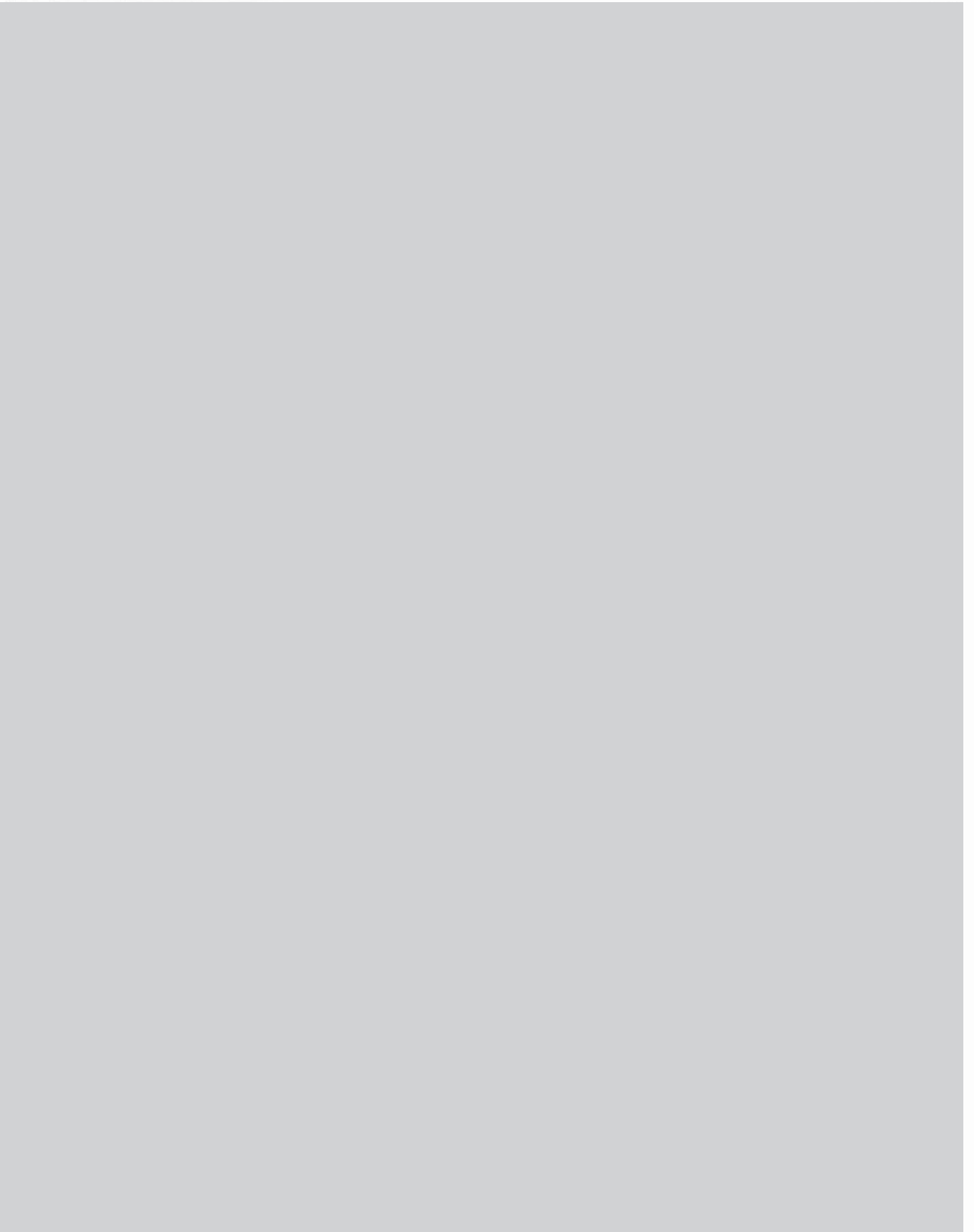
12 地藏菩薩立像 西念寺



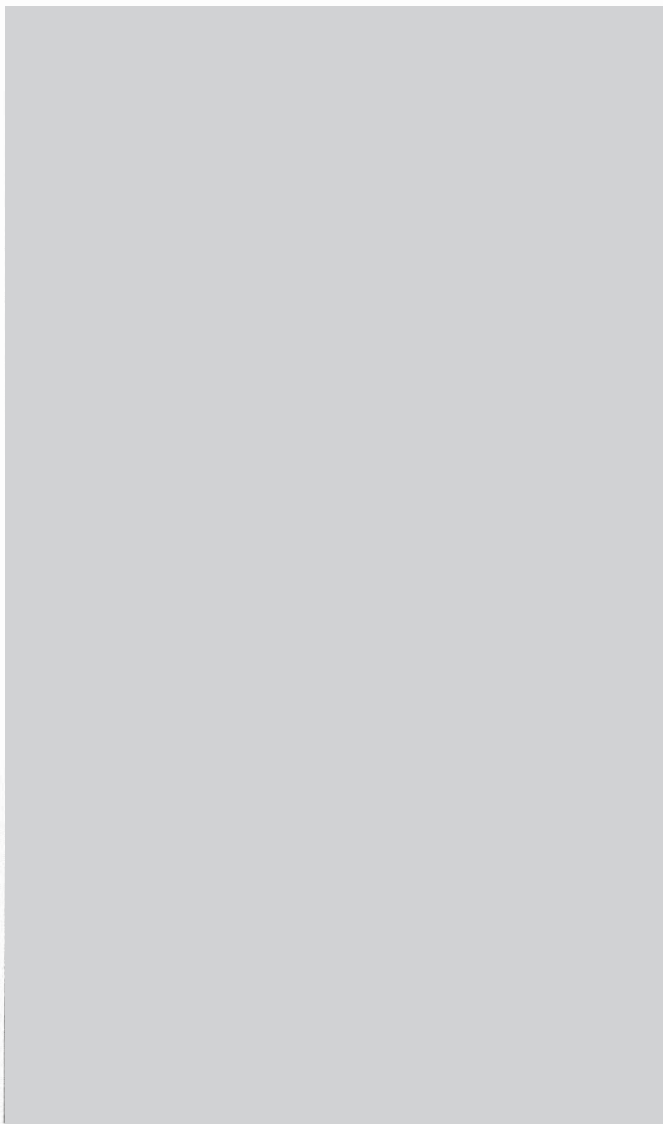
14 毘沙門天立像 大蓮寺



15 釈迦三尊十六羅漢像 興聖寺

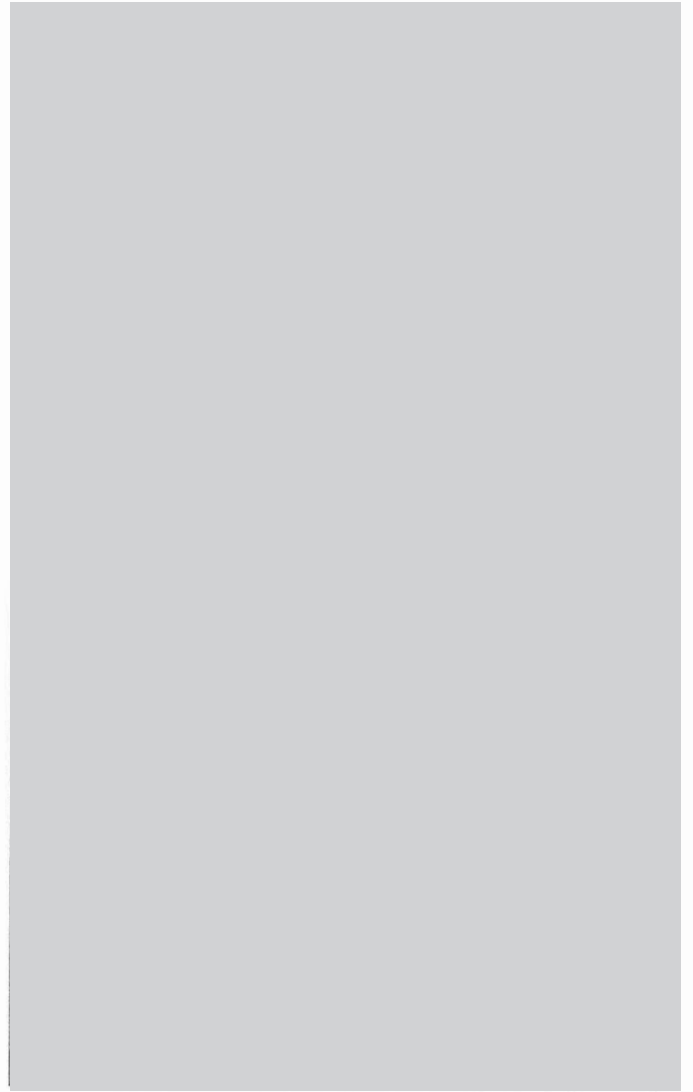


(部分)

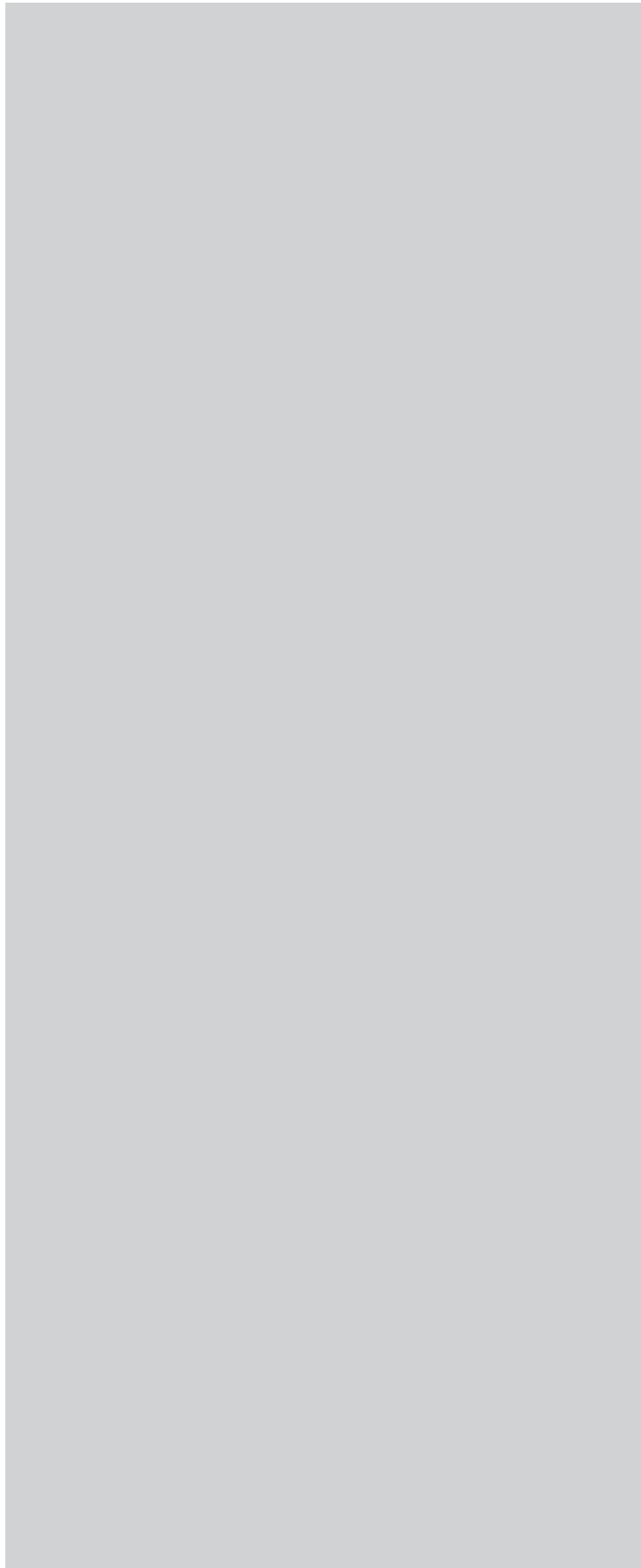


16 十六羅漢圖(a、b) 興聖寺

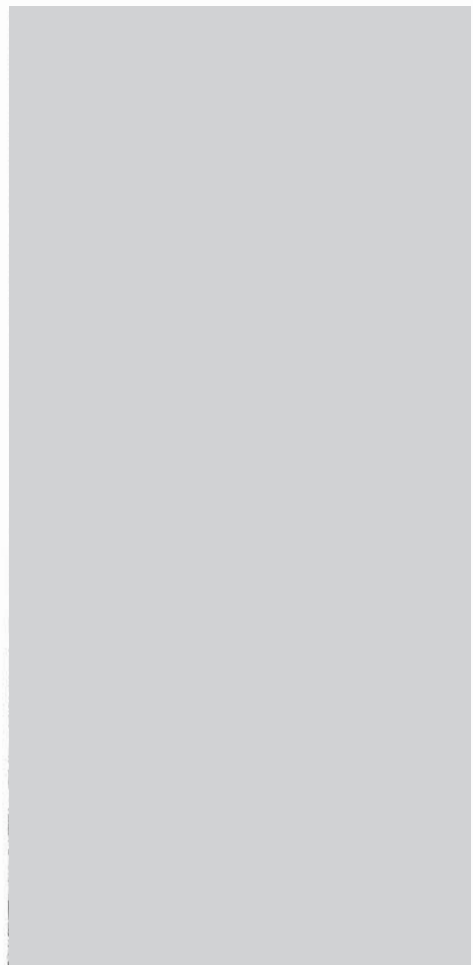
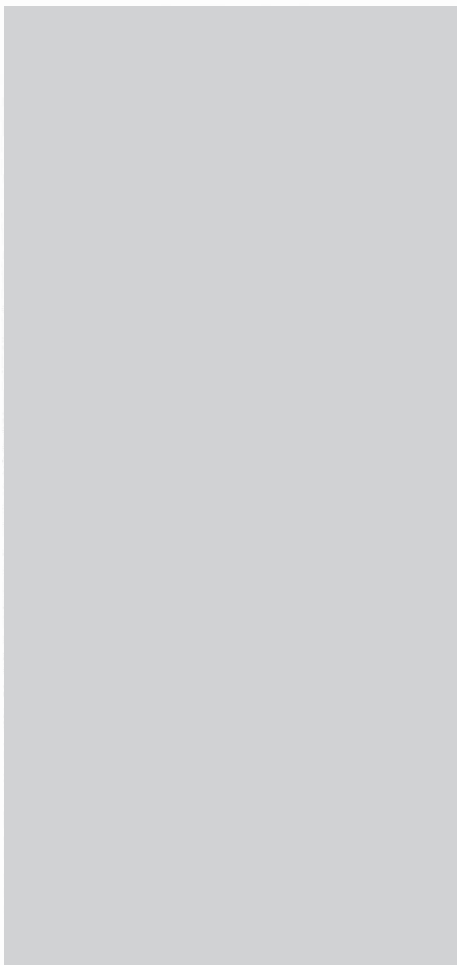
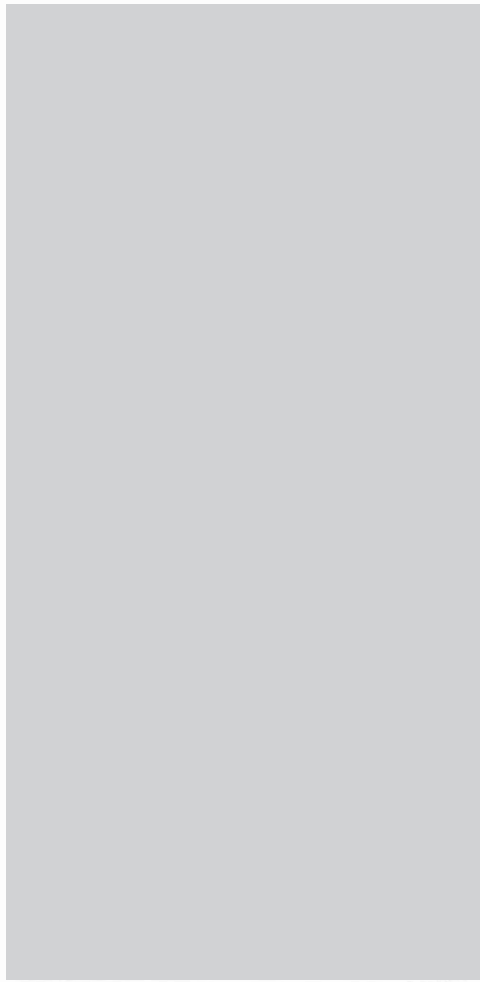
(b)



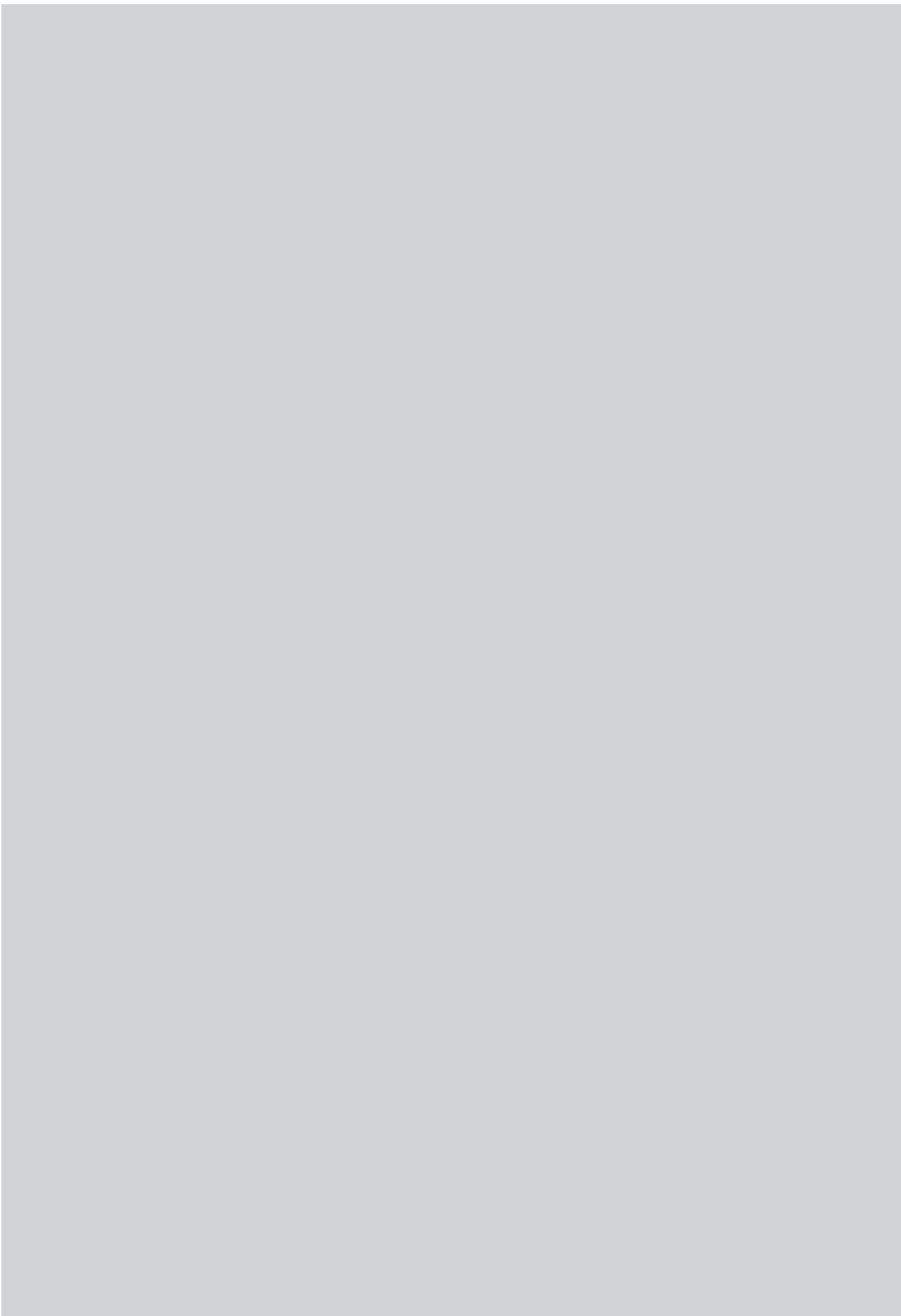
(a)



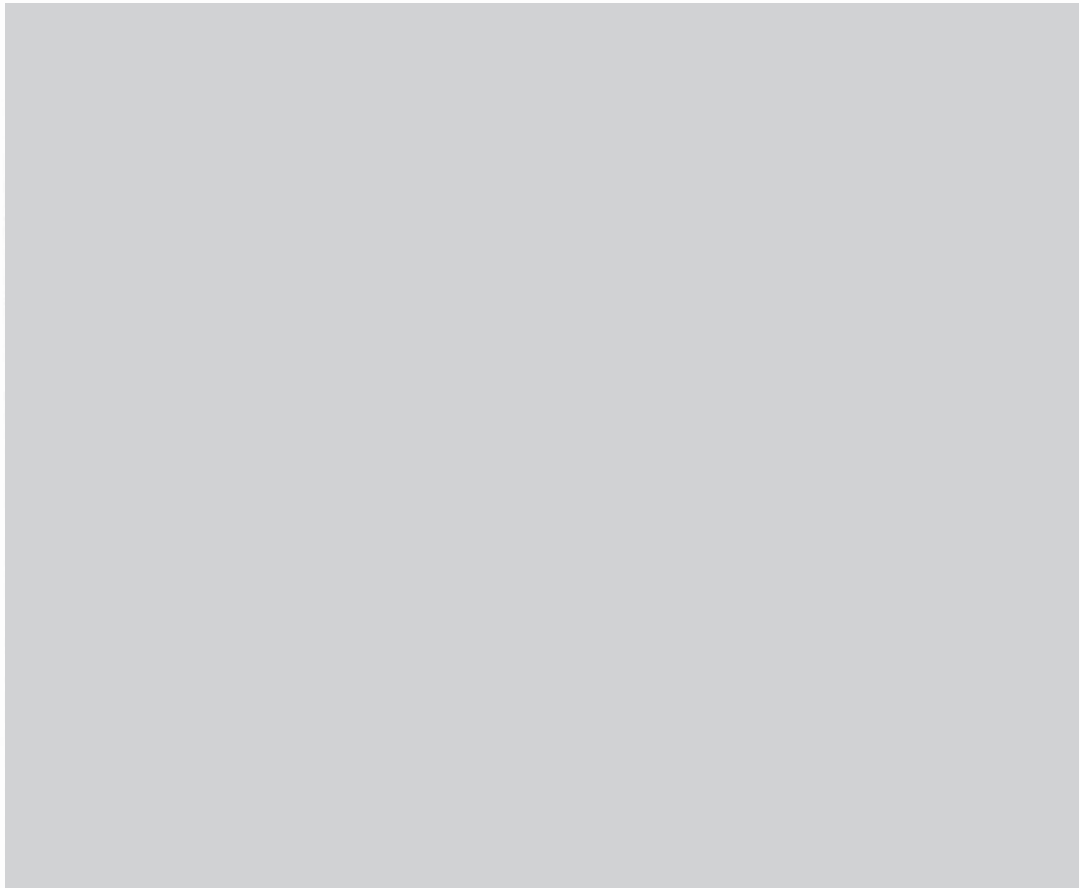
17 文殊菩薩像 狩野探幽筆 興聖寺



18 中観音左右花鳥図 狩野探幽筆 興聖寺

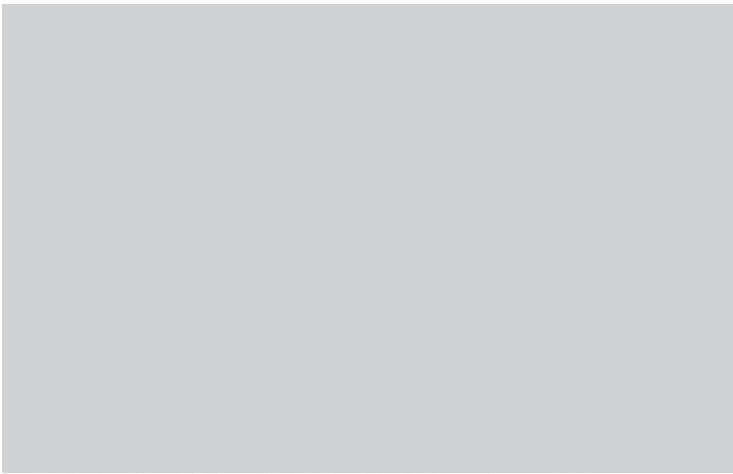


19 道元禪師倚像 興聖寺

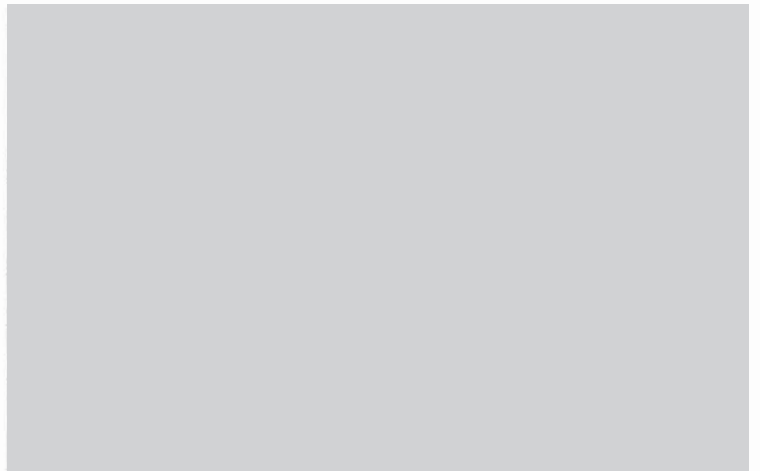


20 青磁觀音坐像 興聖寺

21 交趾釉子安觀音坐像 興聖寺

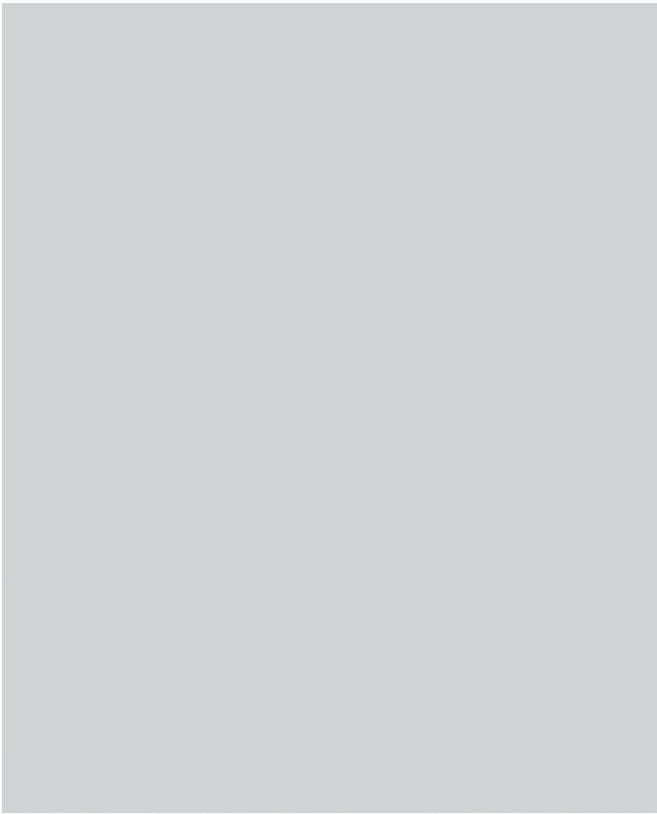


(a)

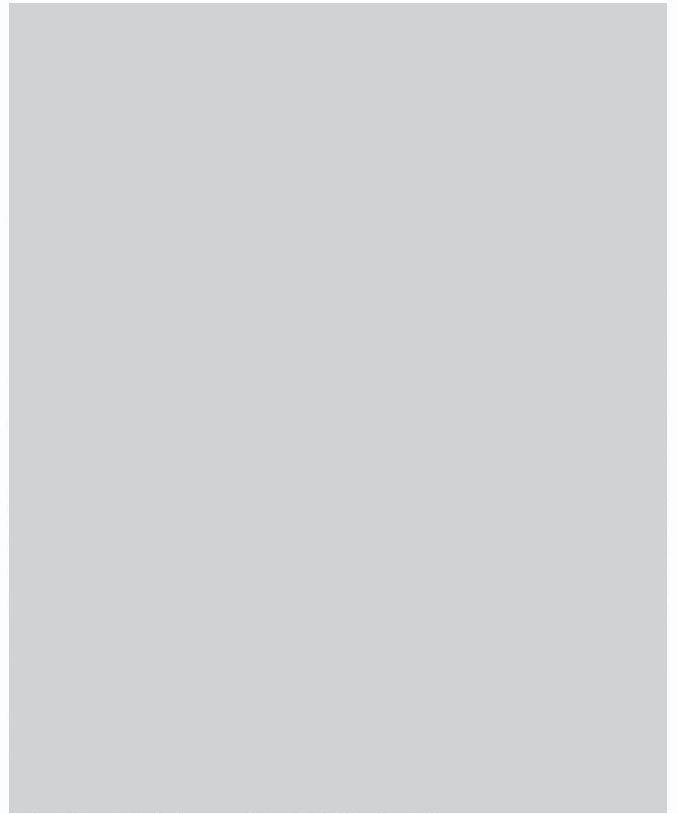


(b)

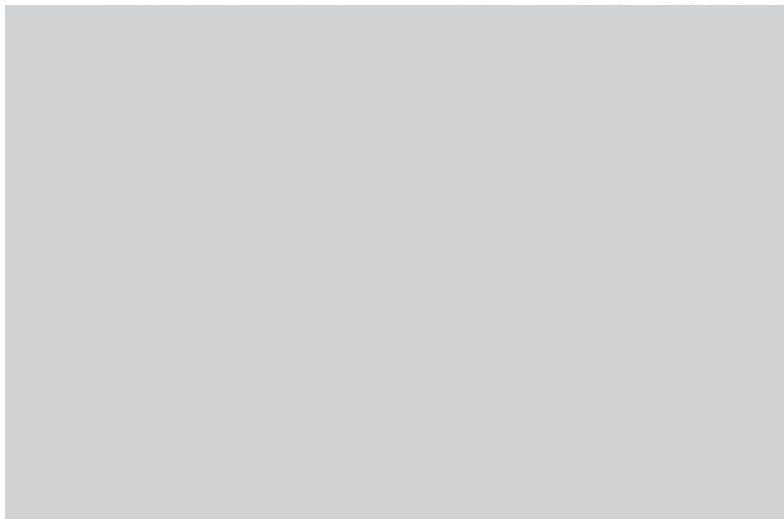
22 禾目天目茶碗(a、b) 興聖寺



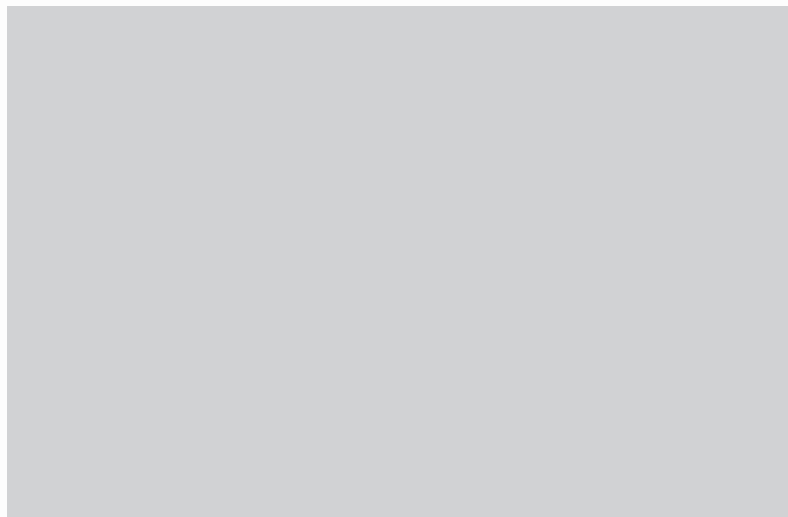
24 朝日銹釉切株形水指 興聖寺



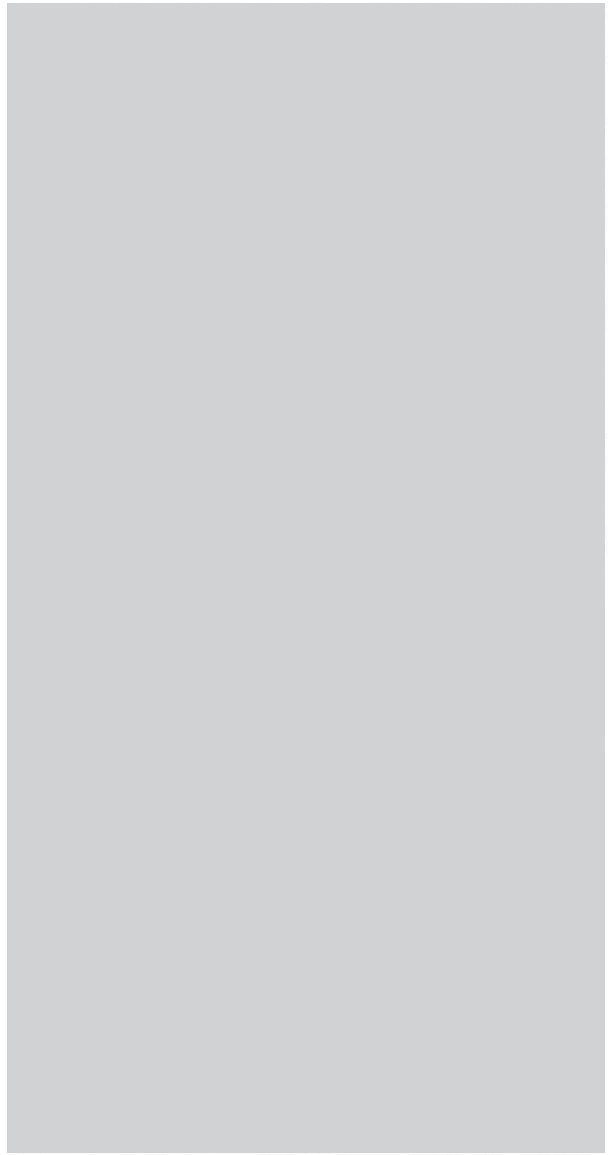
23 高麗象嵌青磁靈芝雲鶴丸紋水指 興聖寺



25 古瀬戸大海茶入 興聖寺



26 上野流釉大海茶入 興聖寺



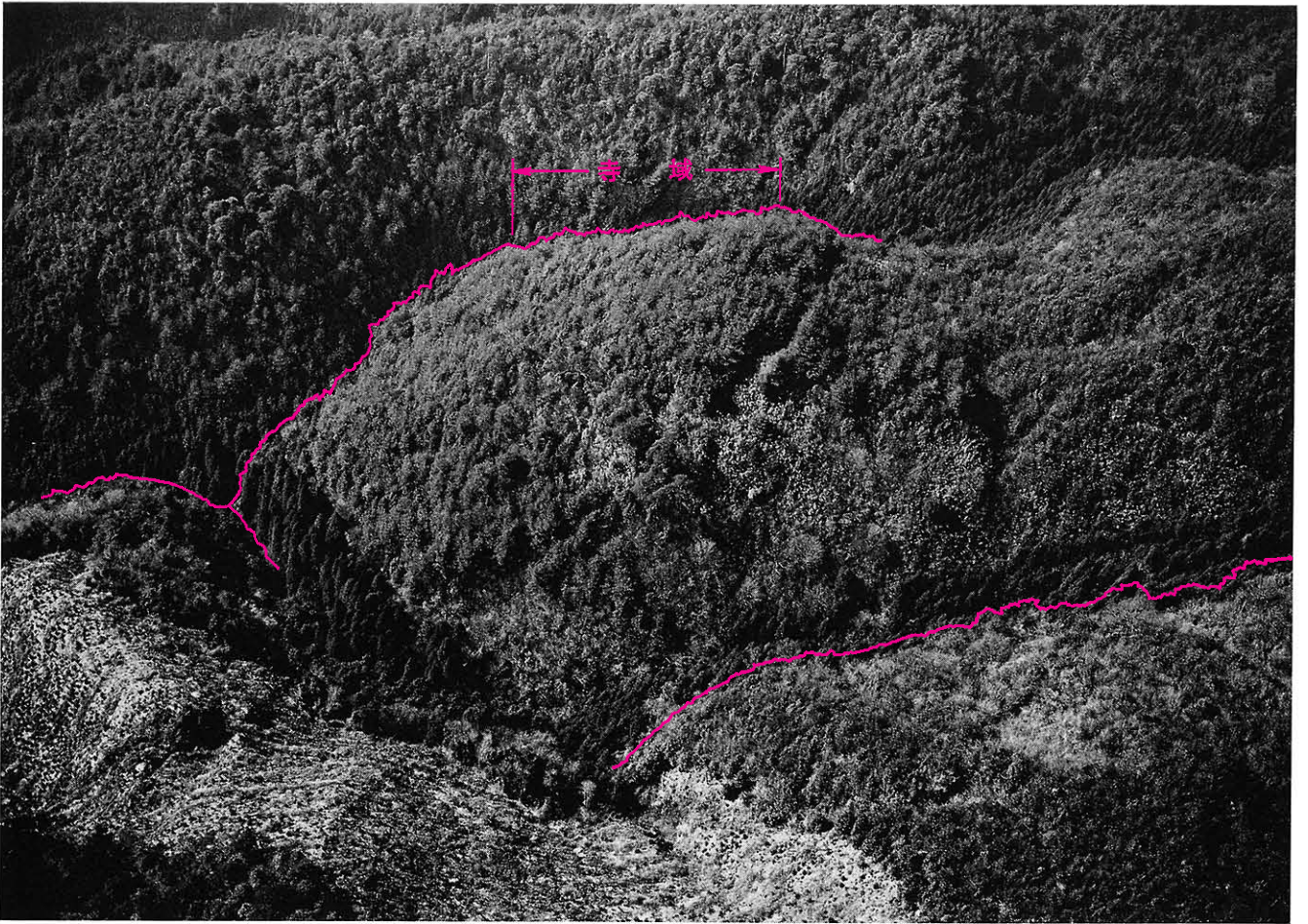
27 鉄蛸足香炉 興聖寺



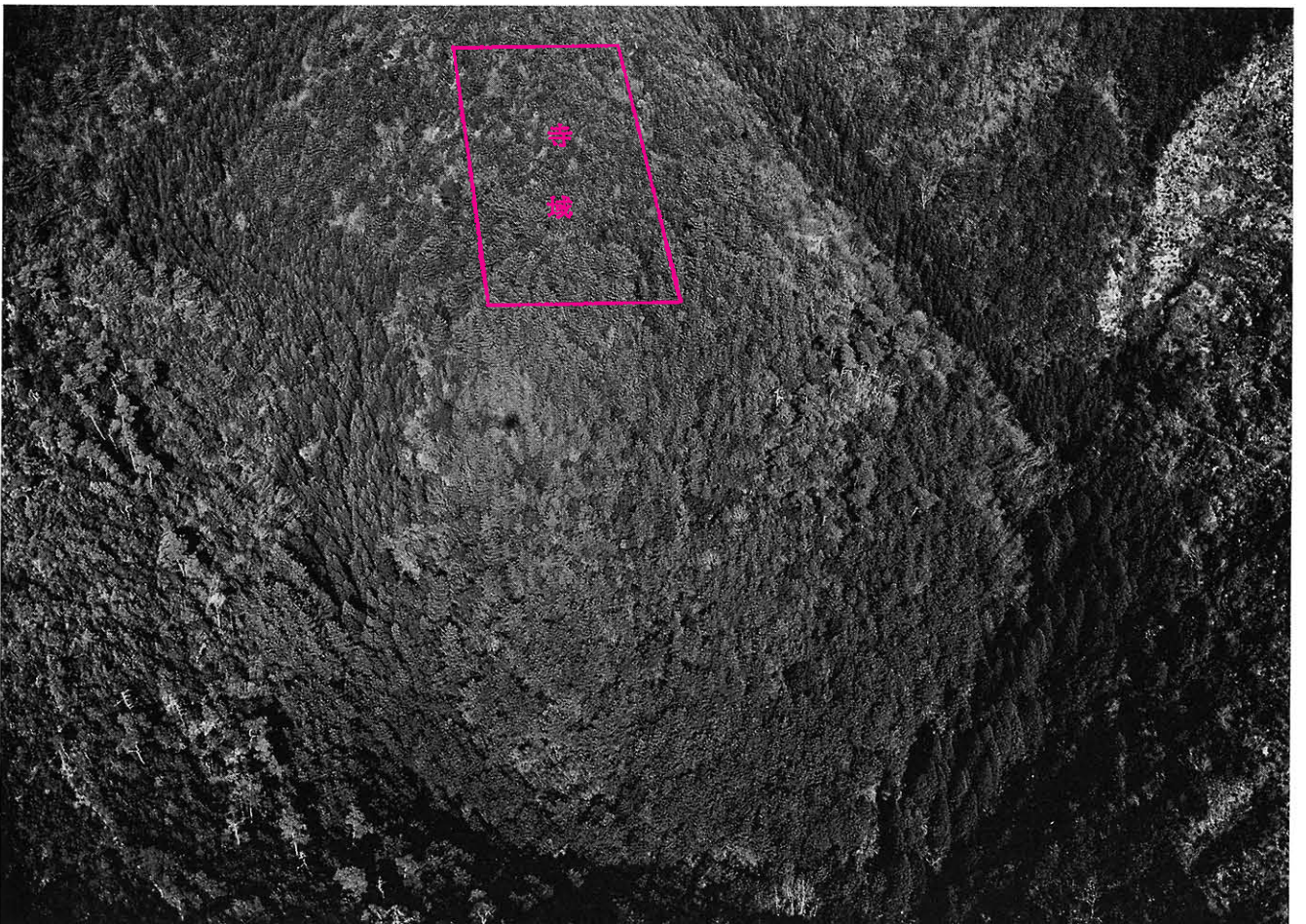
28 羽織 蒨葱地変り斜格子文様縞珍 興聖寺



29 安祥寺周辺航空写真



30 安祥寺上寺跡 (東より)



31 安祥寺上寺跡 (南より)

図版一覽

- 1 阿弥陀如来立像 行住院
- 2 薬師如来坐像 行住院
- 3 大日如来坐像 行住院
- 4 菩薩形坐像 行住院
- 5 阿弥陀如来坐像 一念寺
- 6 阿弥陀如来および両脇侍像 惠光院
- 7 地藏菩薩立像 世音寺
- 8 菩薩形坐像 宝寿寺
- 9 菩薩形立像 三縁寺
- 10 十一面観音立像 西念寺
- 11 十一面観音立像台座蓮弁墨書戯画 西念寺
- 12 地藏菩薩立像 西念寺
- 13 毘沙門天立像 西念寺
- 14 毘沙門天立像 大蓮寺
- 15 釈迦三尊十六羅漢像 興聖寺
- 16 十六羅漢図 興聖寺
- 17 文殊菩薩像 狩野探幽筆 興聖寺
- 18 中観音左右花鳥図 狩野探幽筆 興聖寺
- 19 道元禪師倚像 興聖寺
- 20 青磁観音坐像 興聖寺
- 21 交趾釉子安観音坐像 興聖寺
- 22 禾目天目茶碗 興聖寺
- 23 高麗象嵌青磁靈芝雲鶴丸紋水指 興聖寺
- 24 朝日鏤釉切柈形水指 興聖寺
- 25 古瀬戸大海茶入 興聖寺
- 26 上野流釉大海茶入 興聖寺
- 27 鉄蛸足香炉 興聖寺
- 28 羽織 萌葱地変り斜格子文様縮珍 興聖寺
- 29 安祥寺周辺航空写真
- 30 安祥寺上寺跡(東より)
- 31 安祥寺上寺跡(南より)

社寺一覽

地域社寺調査

行住院	京都市南区上鳥羽八王神町一	33
一念寺	京都市伏見区下鳥羽三町一〇八	34
恵光院	京都市伏見区下鳥羽城の越町一一五	35
世音寺	八幡市八幡町字神原一五	36
宝寿寺	宇治市木幡御藏山二九の三	37
三縁寺	城陽市寺田字中大小一四〇	38
西念寺	綴喜郡田辺町宮津字白山五	41
(補遺)		
大蓮寺	京都市左京区新高倉通仁王門上ル正往寺町四五七の一	43
特定社寺および遺跡調査		
興聖寺	宇治市木幡山田二七の一	47
安祥寺上寺跡	京都市山科区安祥寺	60

地域社寺調査

行住寺(院)

浄土宗 京都市南区上鳥羽八王神町

(伊紀郡上鳥羽村上鳥羽)

宝物并仏像之部

一、本尊阿弥陀如来	丈三尺八寸	壹軀
木立像蓮台後光トモ	慧心作	
一、脇立觀世音菩薩	丈二尺五寸	同
一、同 勢至菩薩	同二尺五寸	同
一、脇壇阿弥陀如来	丈三尺	木立像
一、觀世音厨子入	丈七寸	木座像厨子共
一、釈尊誕生之像	丈五寸	銅立像 目方八十目
一、善導大師	丈二尺五寸	木立像蓮台合
一、円光大師	同	同
寄附物之部		
一、当麻曼荼羅	丈六尺八寸	横四尺壹寸
金襴表具		壹幅
一、涅槃像	同六尺五寸	同三尺九寸
紙表具		同
一、来迎三尊仏	同四尺四寸	同二尺二寸
細地金襴表具		同
一、釈迦誕生之図	同三尺六寸	同二尺二寸
紙表具		同
一、地獄之図	同五尺三寸	同二尺一寸
絹表具		式幅
一、銅台燈籠	八貫四百目	高二尺六寸
		壹対

室町時代

江戸時代

江戸時代

室町時代

来迎形
①*

差渡一尺

一、同 花立	高壹尺	二対
一、同 蠟燭立	一ノ三百六十目 高一尺三寸	壹対
一、同	五百目 縦八寸 横八寸	同
一、真鍮三ツ具足箱入	一ノ二百八十目	壹組
一、花立	高八寸	
一、香炉	同五寸	
一、蠟燭立	高一尺	
什物之部		
一、真鍮花立	式百五十目 高八寸	壹足
一、同 蠟燭立	百七十目 同一尺	同
【記録外】		
薬師堂		
一、薬師如来坐像		一軀
大日堂		
一、大日如来坐像		一軀
一、菩薩形坐像		一軀

室町時代

平安時代
(十二世紀か)

平安時代
(九世紀か)

②*

③*

④*

① 阿弥陀如来立像 一軀

形状 螺髮、白毫をあらわす。大衣と偏衫を着し、両手先は各第一・二指を捻する(来迎印)。右足を前へ出し、足先を少し上げ、前方へ進みつつある様をあらわす。(図1)

品質 木造(ヒノキ)。寄木造。漆箔。玉眼嵌入。

法量 像高 六五・〇 髮際高 五八・七

② 薬師如来坐像 一軀

形状 螺髮(彫出)、白毫(木製)をあらわす。大衣と偏衫を着し、右手は掌を前へ向け、

品質 木造。彩色。彫眼。

左手は薬壺を持ち、右足を前に結跏趺坐する。(図2)
頭体は両上臑部を含み一材からなり、衣端など各所に小材を矧ぐ。両手先を矧ぎ、背面は背中の中ほどから地付に至るまで内割りを施し、背板を貼る。両足部は横三材を前後に矧ぐ。

保存 〔後補〕両手先、右袖口、背板、光背、台座。

法量 像高 九六・八 髮際高 八四・〇

頂―額 二七・三 面長 一八・一

面幅 一三・二 耳張 一八・四

面奥 一九・八 肘張 四五・五

胸厚(左) 一八・〇 腹厚(衣を含む) 二一・五

膝張 六七・〇 座奥 四三・七

膝高(左) 一六・九 (右) 一八・五

伝来 城南宮御旅所旧蔵。

参考文献 『城南』369頁。『京都府寺院重宝調査台帳』(下京七) 3頁。

③ 大日如来坐像 一軀

形状 髻を結び、宝冠を被り、条帛・裳を着し、両手は智拳印を結び、右足を前に結跏趺坐する。(図3)

品質 木造(ヒノキ)。寄木造。彩色。彫眼。

保存 〔後補〕宝冠、冠帯、胸飾、光背、台座。

法量 像高 六八・八 髮際高 五四・六

頂―額 二六・八 面長 一二・九

面幅 一一・一 耳張 一五・五

面奥 一五・二 肘張 三八・七

胸厚(左) 一六・〇 腹厚 二〇・三

膝張 五〇・二 座奥 四七・五

膝高(左) 九・六 (右) 九・二

伝来 もと宗安寺の仏像という。

参考文献 『城南』368頁。『京都府寺院重宝調査台帳』(下京七) 5頁。

④ 菩薩形坐像 一軀

形状 髻を結び、五仏宝冠を被り、条帛・裳を着し、臂釧・腕釧をつける。両手は阿弥陀の定印と同じ印を結び、左足を前に結跏趺坐する。(図4)

品質 木造(カヤカ)。全身を一材から彫出し、裳先の一部を別材で補う。薄く彩色しているようである。

保存 〔後補〕宝冠の五仏、冠帯、胸飾、裳先の一部、光背、台座。

法量 像高 五一・二 髮際高 三九・八

頂―額 一九・四 面長 七・九

面幅 九・一 耳張 一二・二

面奥 一二・四 肘張 二八・八

膝張 三七・七 座奥 二二・一

膝高(左) 九・二 (右) 九・二

伝来 もと宗安寺の仏像という。

参考文献 『城南』368頁。『京都府寺院重宝調査台帳』(下京七) 4頁。

一念寺 浄土寺 京都市伏見区下鳥羽三町

(紀伊郡下鳥羽字下鳥羽)

宝物仏具之部

一、本尊阿弥陀仏 木座像台座後光共 毡鉢

文巻尺二寸八

一、善導大師 同四尺四寸 同 鎌倉時代

一、円光大師 同四尺七寸五歩 同 江戸時代

一、地藏菩薩 石立像丈四尺七寸 二鉢 江戸時代

木立像後光共三尺一寸

①*

一、誕生仏 唐金立像	丈二寸八歩	壹軀
一、真阿上人 木座像台共	丈三尺二寸	同
一、唐金花立 豎老尺	横五寸 量六百四拾目	壹個
一、唐金燈籠	豎二尺七寸 横八寸	三個
	量四〇三百八拾目	
一、鉄鈞燈籠	同一尺一寸 同七十五分	壹対
	同一〇二百八拾目	
一、唐金香炉	同五寸二分 横六寸	壹個
	同六百六拾目	
一、同 花立	同六寸三分 同一寸一分	三個
	同四百八拾目	
一、涅槃画像	紙表具 箱入	壹幅
一、円光大師 真筆名号 蒔絵箱入		同
一、弥陀三尊来迎画	紙表具 箱入	同

江戸時代

① 阿弥陀如来坐像 一軀

形状 螺髮（彫出）、肉髻珠（木製）、白毫（水晶製）をあらわし、大衣を左肩より着し、右肩に少し懸け、両手は腹前に定印を結び、右足を前に結跏趺坐する。（図5）

品質 木造（ヒノキ）。漆箔。彫眼。

頭部は耳の前後の位置で前後三材を寄せ、正面材は正中で左右二材矧ぎとする。体部は前後および左右の計四材を寄せ、肩に体の厚みを増すためのマチ材を入れ、頭部材とは頸部で接合する。両上膊は各肩下りで矧ぎ、両前膊は各一材（左方は袖先を含む）、定印を結ぶ両手先は一材を各矧ぐ。両足部は前後に材を寄せ、前方材は上下二段からなり、後方は材の高さを増すために地付から約二十榎の厚の材を補う。両腰脇は各一材。漆箔を施す。

保存 〔後補〕肉髻珠、白毫、右耳朶、漆箔、光背、台座。
〔欠失〕髪先。

法量 像高 二二四・〇 頂上顎 七三・六

面長 四〇・五 面幅 四二・九
耳張 五七・〇 面奥 五二・二
肘張 一四二・〇 腹厚（衣を含む） 七二・五
膝張 一八一・一 座奥 一二九・五
膝高（左） 三一〇・〇（右） 三〇・四

伝来 もと東大寺浄土堂に安置されていた仏像で、一念寺が真阿上人により永享九年（一四三七）頃に中興されたとき移されたと伝えるが、もとより確証はない。この浄土堂とは、重源の『南無阿弥陀仏作善集』によると、

浄土堂 奉安置丈六十軀、之内一軀六条殿尼御前、自余九軀相具御堂自阿波国奉渡之

とあり、六条殿尼御前（二位局高階榮子）の発願になる一軀と、御堂とともに阿波国から移された九軀が安置されていた。なおこの九軀阿弥陀如来像の本願は、『東大寺造立供養記』によれば平清盛の郎従、阿波民部大夫重能であった。

参考文献 『城南』389・391頁。『京都府寺院重宝調査台帳』（伏見）3頁。小林剛『俊乘房重源の研究』（有隣堂 昭和四十六年）116・117頁。

惠光院

浄土宗 京都市伏見区下鳥羽城の越町一一五

（紀伊郡下鳥羽村字下鳥羽）

宝物仏具之部

一、本尊阿弥陀如来	木立像後光台共丈四尺	壹軀	鎌倉時代
一、観音菩薩	同一尺三寸	同	室町時代
一、勢至菩薩	同一尺三寸	同	室町時代
一、善導大師	同一尺五寸	同	
一、円光大師	同一尺五寸	同	
一、唐金花立	豎七寸五分 横四寸二分	壹対	
	量一〇四百四拾目		
一、同台燈籠	同二尺四寸 同五寸六分		

①*

同四ノ二百目
一、唐金蠟燭立 豎壹尺四寸五分
量壹ノ二百目

一、浄土三部經 壹帙
一、遺教經 同

一、唐金蠟燭立 豎壹尺 量三百五拾目 壹対
一、同 香炉 豎五寸 横三寸六步 量五百目 壹個

一、同 花立 豎四寸 横三寸 量三百六十目 壹対
一、真鍮花瓶 豎六寸五步 量二百八十目 壹個

一、弁財天 木立像 丈一尺 壹軀
一、銅誕生仏 立像 二寸五步 量八拾目 同

一、釈尊涅槃画像 紙表具 壹幅 同
一、弁財天画像 同 同

江戸時代

① 阿弥陀如来および両脇侍像 三軀

形状〔中尊〕螺髮(植付)、白毫(水晶製)をあらわし、下着(僧祇支)の上に大衣・偏衫を着し、両手は第一・二指を捻じ(来迎印)、蓮華座の上に立つ。
〔両脇侍〕髻を結び、宝冠を被り、天衣・条帛・裳を着し、少し腰をかかめて蓮華座の上に立つ。観音は蓮台を捧げ、勢至は合掌する。(図6)

品質〔三尊とも〕木造。寄木造。漆箔。
〔後補〕(阿弥陀)右袖垂下部、右第三指先、右肩に懸る大衣の先、光背、台座。
〔観音〕宝冠、冠帯、胸飾、両肘先、天衣、持物、両足先、光背、台座。
〔勢至〕宝冠、冠帯、胸飾、両肘先、天衣、両足先、光背、台座。

法量
像 高 七八・四 五四・二 五四・一
髮際高 七三・八 四七・二 四七・二
頂一顎 一三・八
面長 九・三

参考文獻 『城南』37・378頁。『京都府寺院重宝調査台帳』(伏見区)2頁。
面幅 八・三
耳張 一〇・四
面奥 一一・八
肘張 二四・六
胸厚(左) 一二・六
腹厚(衣を含む) 一三・八
裾張 一八・〇

世音菴(寺)

浄土宗 八幡市八幡
(綴喜郡八幡町大字八幡庄)

宝物之部

一、本尊阿弥陀如来 木仏座像 丈一尺八寸 壹体 江戸時代
一、観世音菩薩 同 同九寸 同 江戸時代

一、元祖円光大師 同 同八寸 同 江戸時代
一、三部經 同 同 壹部

什物之部
一、唐金台燈籠 高一尺五寸 量四貫五百目 壹対
一、真鍮蠟燭立 同九寸五分 同百四十目 壹
一、唐金香炉 同径四寸五分 同三百目 壹

【記録外】
本堂
一、地藏菩薩坐像 室町時代
一、阿弥陀如来坐像 江戸時代
二尺像
二尺像

地藏堂

一、地藏菩薩立像

一、阿弥陀如来立像

平安時代 (十一— 二世紀か)	①*
江戸時代	九八纏

本堂

一、歡喜天像

一、天部像

一、自在天像

一、菩薩形坐像

一 纏	室町時代	秘仏
一 纏	江戸時代	二尺像
一 纏	平安時代 (九— 十世紀か)	一尺像
一 纏	①*	

① 地藏菩薩立像 一 軀

形状 剃頭、白毫をあらわし、大衣・偏衫を着し、左掌に宝珠を載せ、右手に錫杖を執り、蓮華座上に立つ。(図7)

品質 木造(ヒノキ)。彩色。彫眼。

構造 頭部は耳後の位置で前後に矧ぎ、三道下で体部に接合する。体部は前後左右の四材矧ぎとする。体両側部は袖先を含んで各一材を寄せ、両手先を矧ぐ。両足先および両足指部を各別材で矧ぐ。

保存 〔後補〕白毫、鼻のすべて、左耳朶、両手先、持物、両足の指部、彩色、台座。

法量 像高 一五九・二 髮際高 一五一・八
頂一額 二六・七 面長 一七・七
面幅 一七・六 耳張 二三・一
面奥 二〇・六 肘張 五二・二
胸厚(左) 一九・二 腹厚(衣を含む) 二三・〇
裙張 三四・四

宝寿寺 天台宗 宇治市木幡御蔵山三九の三

【記録外・この項寺院什器簿に記載なし】

地藏堂

一、地藏菩薩立像

一、不動明王立像

一、毘沙門天立像

一、大黒天立像

庫裏

一、十一面観音立像

① 菩薩形坐像 一 軀

形状 髻を結び、条帛・裳を着し、左手屈臂して蓮華を執り、右手も屈臂して胸前で掌を前へ向け、右足を前に結跏趺坐する。(図8)

品質 木造(ヒノキ)。漆箔。彫眼。

構造 頭体および両手上膊部を一材から彫成する。髻頂は別材を矧ぎ、両手は肘、手首でそれぞれ矧ぐ。金属製臂釧をはめる。両足部は横一材を寄せ、腰部に小材を挿む。内割りは背面の肩下りあたりから地付まで行い、背板をはる。像底両足部には板がはられる。

保存 〔後補〕宝冠、白毫、胸飾、両手前膊部、両手先、持物、両足部、漆箔、光背、台座。

法量 像高 九五・六 髮際高 七三・六

一 纏	現代	石造
一 纏	室町時代	二尺像
一 纏	清時代か	三尺像
一 纏	江戸時代	二尺像
一 纏	室町時代	三尺像
一 纏	江戸時代	半像
一 纏	江戸時代	一 擦手
一 纏	江戸時代	半像
一 纏	江戸時代	一 擦手
一 纏	江戸時代	半像

頂一額 三九・三 面長 一七・〇
 面幅 一七・四 耳張 二一・八
 面奥 二二・〇 肘張 五五・九
 胸厚(右) 二五・三 腹厚 二六・三

伝来 大正九年、宝寿寺が開創されたとき、滋賀・金勝寺の塔頭金龍寺から移された。
 参考文献 京都府文化財保護基金編『京都の美術工芸・南山城編』(昭和五十四年)97頁。『京都府寺院重宝調査台帳』(宇治郡)19頁。

三縁寺 浄土宗 城陽市寺田字中大小

(久世郡寺田村大字寺田)

宝物仏具之部

一、本尊阿弥陀如来	木仏立像 御長二尺七寸	壹躰	鎌倉時代
	後光台座付		
一、観世音菩薩	同一尺五寸	同	江戸時代
一、大勢至菩薩	同一尺五寸	同	江戸時代
一、脇壇善導大師	木仏座像 御長ケ一尺五寸	同	江戸時代
	蓮台付		
一、同 円光大師	同	同	江戸時代
一、同 地藏菩薩	木仏立像 御長二尺	同	江戸時代
一、同 観世音菩薩	同五尺	同	室町時代
一、同 地藏菩薩	木仏座像 御長五尺 蓮座付	同	江戸時代
一、同 釈迦銅仏	銅仏立像 御長三寸 厨子入	同	江戸時代
一、地藏菩薩	石仏立像 御長三尺 堂安置	同	江戸時代
一、大日如来	石仏座像 御長二尺	同	江戸時代
一、阿弥陀如来	木仏立像 御長三尺	同	江戸時代

半跏像
 誕生釈
 迦仏

仏具三部

一、真鍮蠟燭立	丈一尺四寸	目方八百四十目	老対
一、同 花立	同七寸五分	同七百目	同
一、同 同	同六寸	同四百六拾目	同
一、唐銅台燈籠	同三尺	同六〇八拾目	同
一、同 蠟燭立	同二尺二寸	同三〇三百目	同
一、同 花立	同一尺二寸	同三〇〇目	老器
一、真鍮香炉	径五寸五分	同四百目	同
一、同 蠟燭立	丈一尺一寸	同二百三十目	同
一、同 花立	同五寸七分	同二百目	同
一、唐銅香炉	丈一尺 径六寸	同六百八十目	同
一、同 蠟燭立	丈一尺四寸	同四百目	同
一、同 花立	同七寸七分	同三百五十目	同
一、同 香炉	径四寸	同二百三十目	同
一、真鍮花立	丈五寸四分	同五百五十目	同
一、同 蠟燭立	同一尺	同二百目	同
一、同 香炉	径四寸九分	同百目	同
一、同 同	同三寸五分	同五十目	老対
一、同 花立	丈七寸八分	同四百目	老器
一、唐銅香炉	径三寸九分	目方二百十文目	同
一、同 同	同四寸	同三百目	同
一、同 同	同三寸九分	同二百十文目	同
一、同 花立	丈七寸七分	同三百五十目	同
一、同 香炉	径五寸八分	同五百目	同
一、唐銅花立	丈八寸八分	同六百六十目	同
一、同 香炉	径五寸	同五百目	老対
一、同 蠟燭立	丈二尺一寸	同一〇百目	老器

- 一、鉄燈明台 同一尺三寸 同一百目 三器
- 一、二十五菩薩画 丈五尺 幅三尺 壹幅
- 一、涅槃会画 丈七尺 幅五尺 同
- 一、三部経 朱塗箱入 壹部

【記録外】

- 一、菩薩形立像

一 軀 奈良時代

①*

① 菩薩形立像 一軀

形状 髻を結び、条帛・裳を着し、天衣を懸け、左手屈臂、右手垂下し、蓮華座上に立つ。構造 脱活乾漆造。漆箔・彩色。(図9)

像内は空洞であり、台座に立つ太い支柱により固定される。像内に灰色の塑土の痕跡があり、また体の両側に縦に乾漆を截った跡が認められる。塑土で像の概形をつくったあと、麻布と木屎漆を重ね合わせて造型し、体側を截つて塑土をかき出したものと推測される。両手肘先部は木製であるが、この部分は後補と考えられる。肉身部漆箔、着衣部彩色のようである。

保存 〔後補〕裾先、両手前膊部、両手先、光背、台座。〔欠失〕持物。

- 法量 像高 七三・九 髮際高 六六・一
 頂―額 一六・三 面長 七・九
 面幅 七・五 耳張 九・四
 面奥 一一・〇 肘張 二〇・六
 胸厚(右) 八・三 腹厚 一一・一
 裾張 一三・二

伝来 正面山観音寺旧蔵と伝える。三縁寺にのこる記録によると、治承の兵火に焼け残り、のち観音寺の本尊として伝えられたものらしい。次に関係史料を載せる。

- (1) 夜叉観音寺畧縁起 一冊
- 夜叉観音寺畧縁起
- 抑当寺夜叉塚と申八治承兵乱の砌
- 此所の伽藍を焼失ふ人々是を

歎き夜叉明王の鎮守の残りあるを

扉を開けハ不思議や正面寺の観世音

在す諸人奇異の思ひをなし

仮堂を立此本尊を安置し奉る

又其後難産の女あり頻に此観世

音を祈り奉るに夜半の頃靈験の御

告に云く我夜叉に恩あり汝か願

望成就の為に夜叉塚を建立せば

忽ち平産あるへしと誠にあり

かたき靈徳なるかゆへに子安塚とも

申また本尊ハ子安の観世音とも

申奉る

(2) 観音寺什物帳 一冊

嘉永三年

「正面山が正 院号は無し」(追筆)

夜叉山観音寺什物帳

戊六月

覚

- 一△本尊御厨子秘仏観世音 壹躰
- 并前机 壹脚
- 一△同前仏観世音 壹躰
- 并金仏器壹ツ 此壹ツ紛失と相見江無之候
- 一△阿弥陀如来 壹躰
- 一△地藏尊 壹躰
- 一△観音講中位牌 壹ツ
- 一〇かね花立 壹対
- 一〇幡 △六連
- 一〇打敷 壹枚
- 一ハ過去帳 壹冊

一〇木魚	壹ツ
一〇きん	同
一〇すへ鉦	同
一〇机	壹ツ
一〇木の燈籠	壹対
一〇観音寺額	壹ツ
一〇罽口	壹ツ
一〇かね十式燈台	同
一〇同蠟燭立	同
一〇桃灯	貳張
一〇三拾三所観世音御影	壹軸
一〇浅草寺本尊同断	同
一〇涅槃像 同断	同
一〇本尊様御膳	壹組
一〇御器茶碗 △勺金式ツ	拾壹
一〇内仏檀木魚	壹ツ
一〇神棚	同
一〇本尊様御影刷木	同
一〇茶釜	貳ツ
一〇錫	壹ツ
一 襖	六枚
一 戸	貳枚
一〇打敷 右ハ光源法子寄附	壹枚
一〇燈 ぬし屋寄附	壹ツ
是ゞ	
一〇地藏会行燈 新調 大小	貳ツ
一〇八尊大師御影	貳幅
一〇経つくへ	壹ツ
一〇金茶湯器	同

一〇高足盛物台	三ツ
一〇三重盛物台	貳ツ
一△誕生釈迦	壹鉢
一〇小三宝	壹
一 台上上り口障子	貳枚
一 庭表身切障子	三枚
元什物	
一 盃 一式	
授持所分	□祥瑞代
一〇本尊阿弥陀如来	壹鉢
順教寄附	
一〇かね輪燈	壹ツ
一〇焼物花立	同
一〇同 香炉	同
一〇歌銭箱	同
一〇桃燈	五張
一〇せつたい桃灯	貳張
一〇墓手桶	三
一〇床机	貳脚
一〇唐金茶釜	壹
一〇唐金竈	同
一 水ため	同
一△行者様 御膳壹組 印弥兵衛寄附	壹鉢
御内々	
一△石仏弘法大師	壹鉢
一△夜叉塚	壹
一〇はしご 一ツ 施主ぬしや 伊左衛門	
一〇庭のあがりしよぎ 当時ハ留主屋	一ツ

此度観音寺留主居入替り候付什物改
 記置留主居交代之節者村役人立会
 改請取渡候可致者也
 嘉永三年
 戊六月 村役人

参考
 城陽町教育委員会編『城陽町史』1 (昭和四十四年) 60・61頁。

西念寺 浄土宗 綴喜郡田辺町宮津字白山五
 (綴喜郡三山木村字宮津)

宝物之部	一、本尊不動明王	木立像	老躰	江戸時代
什物之部	一、金訶羅童子	木立像	老躰	江戸時代
	一、世多訶童子	同	同	江戸時代
	一、正観世音菩薩	同 厨子入	同	江戸時代
	一、弘法大師	木坐像 厨子入	老躰	江戸時代
	一、阿弥陀如来	木立像	同	江戸時代
	一、地藏菩薩	同	同	江戸時代
	一、釈迦誕生仏	銅金仏	同	江戸時代
	一、弁財天	木坐像 厨子入	同	江戸時代
	一、涅槃像	但小幅	一幅	江戸時代
	一、種子金胎両部曼荼羅	同	二幅	江戸時代
	一、荒神像	同	一幅	江戸時代
	一、八祖師像	同	同	江戸時代
	一、薬師如来	木坐像 厨子入	一躰	江戸時代
	一、十一面観世音菩薩	木立像 厨子入	同	江戸時代

- 一、地藏菩薩 木立像
- 一、毘沙門天 同
- 一、円鏡 直径五寸 老面

【記録外】

観音堂	一、十一面観音立像	一軀	平安時代 (十一世紀か)	①*
	一、地藏菩薩立像	一軀	平安時代 (十二世紀か)	②
	一、毘沙門天立像	一軀	平安時代 (十二世紀か)	③
	一、鉄釣燈籠	一基	江戸時代 (嘉永二年)	

① 十二面観音立像 一軀

形状 髻を結び、宝冠を被り、条帛・裳を着し、天衣を懸け、左手は垂下し第一・三指を捻じ、右手は胸前に水瓶を執り、蓮華座上に立つ。

品質 木造(カヤ)。彩色。彫眼。
 構造 頂上仏面を含んで頭・体を一材から彫成し、耳後の位置で前後に割り放ち、さらに三道下で割り、内割りを施して短く。頭上菩薩(十面)はすべて頭部に挿し込み式とする。両手は各肩下りと手首で短く。天衣の足前に垂下する部分は、上方三材、下方四材からなり、両脇に垂下する部分は各一材。両足先は各一材を短く。全面に漆下地を施し、白土を塗り、彩色する。裳の折り返し部には花による丸文が認められる。

蓮肉は前後二材を寄せ、蓮弁は各一材製で、六方四段に葺き寄せる。蓮弁の先端部は白緑彩。うち五枚に六種の戯画がある(有髯神将頭部五、人物頭部一、植物文一)。
 保存 〔後補〕宝冠、冠帯、胸飾(以上金属製)、花瓶、錫杖、天衣の両脇に垂下する部分、天衣の足前に垂下する部分のうち上方一材、下方二材、台座蛤座、台座三重框。
 法量 像高 一七八・二 髮際高 一四九・六

頂一顎(頂上面から) 四六・一

面長 一六・三 面幅 一七・七

耳張 二二・四 面奥 二三・三

肘張 五四・八 胸厚(左) 二三・三

腹厚(衣を含む) 二七・二 裾張 三九・〇

足開(外) 三一・三 (内) 一七・五

蓮肉径(左右) 五〇・六 (前後) 五〇・九

蓮肉高 一三・三

反花径 四九・六 反花高 九・六

伝来

もと白山神社(田辺町宮津字宮ノ口)の神宮寺法雲寺にあったが、明治初年の神仏分離の際、地藏菩薩像、毘沙門天像(ともに平安時代後期)とともに西念寺に移された。この付近には西念寺と白山神社以外に社寺はなく、この二カ所は古くから村民の生活の上で要となる存在であったらしい。同社の裏山には横穴式石室を有する宮ノ口古墳がある。

本像は最近まで錫杖が持たされ、長谷寺式の観音として信仰されていた。観音堂には、錫杖を持つ本像が描かれる絵馬が懸けられ、次の銘記がある。

寛永五年戊子天

霜月吉祥日

施主 当村

由川瀬右衛門

なお本像像内には下図の木札が納入されており、正保三年(一六四六)に、南都椿井町の仏師治部卿が修理と彩色を加えたことがわかる。

台座蓮弁の墨書戯画についての所見は次のとおりである。(図11)

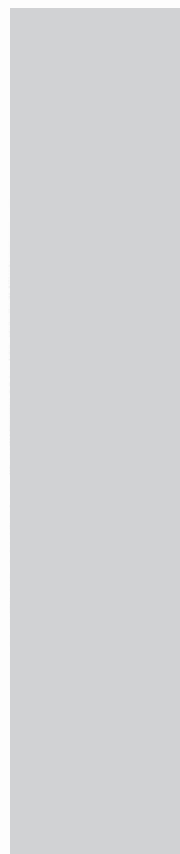
(a) 縦一八・〇、横一二・七

蓮弁の内側に有髻神将頭部が描かれる。中央に「一」の墨書があるが、これは蓮弁を葺くときの心おぼえと思われる。

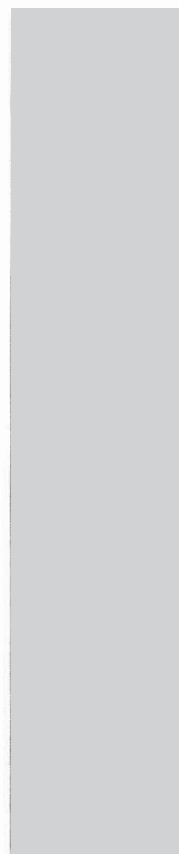
(b) 縦一八・七、横一三・三

戯画は(a)に順ずる。中央に「一」の墨書がある。

(c) 縦一七・八、横一三・二



(裏)



(表)

戯画は(a)に順ずる。中央に「一」の墨書がある。

(d) 縦一八・七、横一三・三

戯画は(a)に順ずる。中央に「一」の墨書があり、下方に上を向く掌が描かれる。

(e) 縦一七・四(現状)、横一二・七

蓮弁内側に人物の輪郭が描かれ、その中に文字の散らし書とも見えるものがあり、中央に「一」の墨書がある。

(f) 法量は(e)に同じ

(e)の蓮弁の外側下方に植物文および意味不明の墨書がある。

参考文献 『京都府寺院重宝調査台帳(綴喜郡)』217頁。

② 地藏菩薩立像 一軀

形状 大衣・偏衫を着し、腹部に下着をあらわす。(図12)

品質 木造(ヒノキ)。寄木造。彩色。彫眼。

法量 像高 一〇一・三

③ 毘沙門天立像 一軀

形状 左手を腰に当て、右手は戟をとり、岩座上に立つ。(図13)

品質 木造(ヒノキ)。彩色。彫眼。

頭・体は別材製で、各左右正中で割り廻き、三道下で接合する。体部背面は別材を廻ぐ。〔後補〕両手先、体部背面材、持物、彩色、光背、台座。

保存状況

法量 像高 九三・四 髮際高 八六・三

補遺

大蓮寺 浄土宗 京都市左京区新高倉通仁王門上ル正往寺町四五七の一

(京都市下京区毘沙門町)

【記録外】

一、毘沙門天立像

一、觀慶寺勸進帳

一 軀	平安時代 (十世紀か)	①*
一 卷	江戸時代 (寛永九年)	②

① 毘沙門天立像

形状 髻を結び、甲を着し、左手を腰に当て、右手は上へ振り上げ立つ。(図14)
品質 木造(カヤか)。彫眼。

頭体および台座を一材から彫成。両手は肩下りで短く。

保存 〔後補〕宝冠、両手。
状況 〔欠失〕右手肘より先。

法量 像高 一〇三・三 髮際高 八九・七

台座高 六・六

伝来 旧祇園觀慶寺のもので、明治初年の神仏分離の際、大蓮寺に移された仏像の一と思われる。

② 觀慶寺勸進帳 一卷

勸進沙門敬白

請特蒙十方檀越芳助

修宮洛陽河東祇園社牛頭

天王之本地堂觀慶寺子細之化疏

原臣藥師如來者淨瑠璃界

教主乎。發衆病悉除盟誓

像法轉能化号利劫濁乱漫

有情矣傳聞西天釈迦如來建立

療病院崇三四願主護念東

城傳教大師安置比叡山拜四八

妙相容顏焉然則當寺本尊

者根本中堂靈像一躰之御

衣木也云々。余來男女合掌信

伏靡心中悉地□不成之縮素

繼踵敬奉羅宿世願望□不遂

之雖然世臻洗季渴仰之輩稍

少^(時之)及末法皈依之者又怖苦

恨鳳臺破損而月桃夕昏閑

燈鷲瓦靈落霧催曉天香

煙無視者不流淚無聽人不

懷憂與元緣大^(徳)等同心再

欲起立之有志願無与力^(鼻)

者都鄙之道俗不憚一紙

半鷲遠近之貴賤不□寸

絹尺布飄颻廣沙弥加舊杖

磨三十三天之靈舍衛左婢

掃法進饒四十九院之臺矣寔

是小因感大果之指南此謂者

欵若爾者翻隨力抛財之懇

丹吹瑠璃兼普納色香味美

之良藥阿伽陀力能治煩惱

業苦之重病(病)加旃日光月光

左右侍從加晝夜不退之護

持十二神將四邊(邊)圍繞致二

六時中之灌衛剩七千夜叉

念、守而除九種之橫死四大

天王貶、降而撥三災厄難

重尤積善家長昌等須達

十德功德門久富袖阿育七

寶(寶)仍所唱(唱)早詞如件

寬永九年六月五日 勸進沙門敬白

特定社寺および遺跡調査

興聖寺 曹洞宗 宇治市宇治山田二七の一
(久世郡宇治町大字宇治郷)

宝物之部

一、当寺再興縁由	一軸	江戸時代
中院通村公之筆烏丸大納言 資愛公奥書		
寛文元年八月中旬		
一、紀貫之繡像	一軸	江戸時代
国母仙院御宸筆同御自製		
一、渡宋天神繡像	一軸	江戸時代
東福門院御自製		
讚新女院勅筆		
一、喜撰法師詠歌	一軸	
後光明院様御宸筆		
一、寂蓮法師宇治川歌	一軸	
後水尾帝御宸翰		
一、八幡宮神号	一軸	
靈元院様御宸筆		
一、檀祓	一片	江戸時代
東福門院御服		
一、藕絲九条衣	一肩	江戸時代
一、徳川家綱公羽織	一領	江戸時代
一、白羽鷹図	一軸	明時代
宋徽宗帝筆		
讚宣和大学士之筆		

一、後花園帝御宸翰	一軸		
一、観音令旨	一軸		
聖護院御門主御筆			
一、当寺開山道元国師遺墨	四軸		
一、孫手 薬帯	二品		
従法皇様拝領			
一、隠元禅師遺墨	二軸		
一、木庵禅師遺墨	一軸		
一、紙織寿老人図 高麗国製	一幅		
一、唐心越禅師書	一軸		
一、親王家五色詠歌	一軸		
一、維摩詰之図 高麗国製	一軸		
江戸時代			
絹本着色			
四八・五×七七・五			
一、永覚大師遺墨	一軸		
兼応四年六月当山住職瀬禅和 上大明国鼓山く住寄附			
一、十六羅漢之図 兆殿司之筆	一軸		
南北朝時代			
一、天満宮真像 古法眼之筆	一軸		
室町時代			
一、達磨大師像 雪舟之筆	一幅		
江戸時代			
一、渡江達磨 五祖 六祖	三幅		
江戸時代			
守信法眼探幽之筆			
一、観音大士 枯木鴉 荒草鴉	三幅		
江戸時代			
探幽之筆			
一、福祿寿 五祖 六祖	三幅		
江戸時代			
一、鷹 三光鳥 探幽之筆	三幅		
江戸時代			
一、棗橙香合	一箱		
江戸時代			
従女院御所拝領			
漆①*			
一、十六羅漢之図 兆殿司之筆	一軸		
南北朝時代			
一、天満宮真像 古法眼之筆	一軸		
室町時代			
一、達磨大師像 雪舟之筆	一幅		
江戸時代			
一、渡江達磨 五祖 六祖	三幅		
江戸時代			
守信法眼探幽之筆			
一、観音大士 枯木鴉 荒草鴉	三幅		
江戸時代			
探幽之筆			
一、福祿寿 五祖 六祖	三幅		
江戸時代			
一、鷹 三光鳥 探幽之筆	三幅		
江戸時代			
一、棗橙香合	一箱		
江戸時代			
従女院御所拝領			
漆①*			

一、觀音送子陶像	一体	明時代
一、藥天目茗碗	銀側金入 二個	南宋時代
桐箱二箱		
一、南京燒蓋鉢	一個	清時代
一、胡京燒水指	黑塗之蓋共 一個	高麗時代
一、雲形青地水指	一個	
高麗國之製	黑塗之蓋共	
一、杵目水指	一個	江戸時代
古朝日燒	黑塗之蓋共	
一、白羽団扇	一握	
外之二品	從法皇樣拜領	
一、推朱大香合	一個	明時代
鍋島大守信州夫人光源院殿		
一、木曾義仲所持太刀	一筋	
身二尺五寸五分	惣丈二尺	
九寸三分	波平家次ノ作	
一、巴御前所持長刀	一筋	
身二尺二寸三分	惣四尺二寸三分	
吉次之作		
一、蜀江錦檀被	一片	江戸時代
以上四拾三点		
本堂之部		
一、真鍮花瓶	衡三百五十目 一對	
一、同 燭台	同二百二十目 一個	
一、唐銅香炉	同一ノ五百目 同	
一、同 燭台	高二尺一寸 一對	
一、燈籠	同三尺四寸 同	

陶①*	一、花瓶 同一尺一寸 同	
陶②*	一、唐金香炉 衡二百五十目 三個	
	一、同 燭台 同三百四十目 同	
陶③*	一、同 花瓶 同二百八十目 三個	
	一、同 燭台 同百目 一個	
陶④*	一、同 香炉 同二百四十目 一個	
	一、同 花瓶 同二百目 同	
陶⑤*	一、同 同 同一ノ目 同	
	一、同 香炉 同二百六十目 同	
	一、同 燈籠 高一尺九寸七分 一對	
	一、寺号勅額	一面
漆②*	八十七代四条帝勅筆	
	一、唐金水瓶 合九百目 一對	江戸時代
	一、釈尊涅槃像 箱入 一軸	
	一、三千仏図 同 三軸	
	一、同称名本 同 三卷	
	一、法華經 同 十部	
	一、大般若經 箱入 六百卷	
	一、金剛般若經 同 十卷	
染⑥	一、懺法本 同 卅卷	江戸時代
	一、法華転 同 百卷	
	一、寿量品 同 百卷	
	一、安樂品 同 百卷	
	一、普門品 同 卅卷	
	一、張拔準提觀音像 蓮觀院殿御自製 一体	江戸時代
	一、真鍮燭台 衡百目 一對	

紙製か 二三・六

金②

一、同 花瓶 同百四十目	一個
一、同 花瓶 同百目	同
一、同 花瓶 同八十目	同
一、同 香炉 同三百目	二個
一、唐銅香炉 同二百五十目	一個
一、真銅香炉 同一ノ四百目	同
一、同 輪燈 同四百目	同
開山堂並位牌堂之部	
一、真鍮燭台 衡二百目	一個
一、鉄香炉 同一ノ二百目	一個
一、真鍮花瓶 同三百二十目	一對
一、唐金花瓶 高一尺一寸	一對
一、同 燈籠 同一尺七寸	一個
一、同 燭台 同八寸八分	一個
一、同 香炉 衡四百二十目	一個
一、真鍮花瓶 同百目	二對
一、唐金水瓶 同三百五十目	一個
一、同 花瓶 同四百五十目	一個
一、同 燈籠 高一尺七寸	一個
一、真鍮釣燈籠	一對
衡一ツ一ノ百十文目	
一、同 華鬘 衡三百七十目	三面
一、唐金出山釈尊立像	一体
身丈一尺四寸 台三寸五分	
天竺国製	
一、張拔聖觀音坐像	一体
後光明帝御宸翰ヲ以テ	

室町時代	金③
江戸一	四三・四
明治時代	
江戸時代	二七・八

国母仙院御自製	
一、唐金香炉 衡百目	一個
一、同 花瓶 同百卅目	一個
一、磬子 径八寸五分	一個
僧堂并衆寮之部	
一、唐金香炉 衡百卅目	一個
一、同 花瓶 同百六十目	一個
一、鉄釣燈籠 同二ノ目	一個
一、達磨画像	一軸
庫院之部	
一、唐金花瓶 衡百五十目	一個
一、同 燭台 同百五十目	一個
一、同 香炉 同三百十文目	一個
方丈并書院之部	
一、当寺境内画図	一軸
一、唐金香炉	一個
一、六枚折金屏風	一双
一、大乘妙典	一部
一、理趣分	一部
一、梵網經	一部
一、高祖広録	一部
一、梅山禪師語録	一部
一、正法眼蔵	一部
一、剃度儀軌	一部
一、山門由緒寺縁雜記	二冊
一、唐金花瓶	二個
一、紺紙金泥理趣分	一部

江戸時代	繪⑥*
------	-----

一、大智度論	全五十拾冊
一、大藏經	全百五十拾冊
一、大集經	全二十五冊
一、四分律	全四十冊
一、統燈錄	全拾五卷
一、普燈錄	全拾七卷
一、隱元語錄	全五卷
一、広燈錄	全拾卷
一、聯燈錄	全拾五卷
一、門祖御繪伝	二冊
一、同 御状記	三冊
一、十住毘婆娑論	三卷
一、古記録	拾五筐
一、諸證文	三筐
一、出山釈迦尊図像	一軸
一、諸軸額	三拾幅
一、佐川田喜六昌俊書	一軸
一、釈迦文殊普賢像	一軸
一、仙人形唐墨	一捉
一、大海茶入	二個
一、青地焼中香炉	一個
一、南京焼瑠璃色鉢	一個
一、推朱大盆	一個

江戶時代
江戶時代
江戶時代
室町—
桃山時代
明時代
(十七世紀)

*
陶⑥*
陶⑦*

【記録外】

—— 絵画 ——

一、括華釈迦図 伝雪舟筆	一幅	江戸時代
一、釈迦十六羅漢図 香積風外筆	一幅	江戸時代
一、釈迦三尊像 雲谷等益筆	三幅	江戸時代
一、涅槃図 森一鳳筆	一幅	江戸時代
一、出山釈迦図 森一鳳筆	一幅	江戸時代
一、金色釈迦図 永井宗元筆	一幅	江戸時代
一、文殊菩薩図	一幅	室町時代

紙本墨画*
七七・一×三一・六
落款「雪舟筆」
紙本淡彩
一二四・〇×五六・八
落款「香積風外拜写」
白文連印「好」「幽」
紙本墨画
一一三・一×四八・五
白文瓢印「雲谷」、
朱文方印「等益」
絹本着色
一八九・〇×二二・二
紙本墨画*
九三・四×二九・四
落款「於仏徳山興聖宝林
禅寺 一鳳拜写」
白文方印「森敬之印」
朱文方印「不知火口国男」
絹本着色
一四〇・三×五四・三
箱表墨書「永井権右衛門
入道宗元自図一幅」
絹本着色*
一二九・三×五四・三

一、文殊菩薩図 狩野探幽筆	一幅	江戸時代	絹本淡彩* (図17) 九九・二×三九・三 落款「探幽斎筆」 朱文瓢印「守信」 絹本淡彩* 八四・二×四一・九 落款「雪舟六十七歳筆 (花押)」 紙本墨画 一六九・七×六二・〇 白文方印「等顔」 紙本墨画
一、観音図 伝雲舟筆	一幅	江戸時代	一、開山絵伝 森一鳳筆 二幅 江戸時代 絹本著色 一七八・五×九九・五 箱表墨書「施主大阪住 鋸尾六兵衛 鴻池市兵衛 道具屋勝兵衛 中西宗真 山西宗五郎 森一鳳」 絹本著色 一〇七・〇×五一・七 贊「元文己未之夏 宝七 十五翁円山杜多自題」 落款「雪溪八十五歳筆」 山口雪溪とは別人
一、達磨図 伝雲谷等顔筆	一幅	江戸時代	一、南泉斬猫図 伝海北友松筆 一幅 江戸時代 紙本墨画* 一〇二・一×五一・四 紙本墨画* 一〇二・五×五一・三 朱文重廓方印「自明」 白文方印不明印一顆
一、達磨図 靈潭魯龍筆	一幅	江戸時代	一、智門観蓮図 伝海北友松筆 一幅 江戸時代 紙本墨画* 一〇二・五×五一・三 朱文重廓方印「自明」 白文方印不明印一顆
一、達磨図 狩野探幽筆	一幅	江戸時代	一、山水図 雪溪筆 一幅 江戸時代 絹本淡彩 一〇三・一×四一・五 落款「雪溪七十七歳筆」 朱文方印「白隠」、白文 方印「雪溪」 箱蓋裏墨書「円山和尚寄 附」 山口雪溪とは別人 紙本淡彩
一、二祖断臂像 森一鳳筆	一幅	江戸時代	一、鶏図 伝狩野探幽筆 一幅 江戸時代 紙本墨画* 一一五・〇×五二・〇
一、道元禅師像	一幅	江戸時代	

一、燕・翡翠図 狩野探幽筆 二幅	江戸時代
一、虎図 香積風外筆 一幅	江戸時代
一、竹図 伝松花堂昭乗筆 一幅	江戸時代
一、業平東下り図 狩野洞学筆 一幅	江戸時代
一、竹林七賢図 伝狩野元信筆 一幅	室町時代
一、永井直勝像 一幅	江戸時代
一、永井尚庸像 狩野常信筆 一幅	江戸時代 (延宝六年)

一〇九・七×三八・三
朱文円印「采女」
紙本墨画*
三九・八×一七・六
朱文長方印「探幽斎」
紙本淡彩
一二九・七×六二・〇
落款「辛丑秋八月 風外
老衲写」
白文連印「好幽」
朱文方印「没□白界」
紙本墨画
二九・三×五二・八
落款「惺翁」
不明白文方印一顆
絹本着色
白文方印「洞学之印」
紙本墨画
五〇・二×七四・八*
朱文壺印「元信」
箱書「元誓願寺通堀川東
入平尾孫七」
絹本着色
一四一・七×八一・五
卷留墨書「月丹居士」
絹本着色
一一七・六×六八・一

一、山水・人物・花鳥図 六曲一隻 狩野探幽筆 二曲一双	江戸時代
一、十界図 六曲一双	江戸時代
一、十六善神像 伝土佐光信筆 一幅	室町時代
一、十六羅漢図 十六幅	室町時代

表装裏墨書により、延宝六年常信画と知られる
紙本墨画、押絵貼*
各一二五・〇×五二・〇
印章(各)「狩野」「探幽斎」
「守信」「采女」
紙本着色
各一四一・九×三〇四・二
絹本着色*
一〇三・八×六〇・二
鑑査状に「土佐将監筆」
絹本着色*(図16)
各六七・三・三八・〇
箱書「寄附山城国宇治興
聖大禅刹 宝曆二壬申年
五月 洛陽木下道正庵二
十三世法眼順」

① 白鷹図 伝徽宗筆 一幅
品質 絹本着色
法量 縦 一四四・五 横 六二・一
② 釈迦三尊十六羅漢図 一幅 (図15)
品質 絹本着色
法量 縦 一四八・七 横 八八・三
絹幅 四六・〇
備考 箱表墨書
「十六羅漢 戒壇図入 兆殿子之筆」
古様で、樹木・岩石などの描写は南北朝時代の託磨派画人の手を想像させる。

③ 天神像 伝狩野元信筆 一幅 品質 紙本着色 法量 縦 九〇・〇 横 四九・〇 備考 朱文壺印「元信」 近衛龍山の色紙賛文あり。	一、文殊菩薩坐像 一、普賢菩薩坐像 一、達磨坐像 一、螢山禪師坐像	一、文殊菩薩坐像 一、普賢菩薩坐像 一、達磨坐像 一、螢山禪師坐像	江戸時代 木造、漆箔、玉眼嵌入 像高三四・六	江戸時代 木造、彩色、玉眼嵌入 像高二六・八 木造、彩色、玉眼嵌入 像高二六・五 木造、彩色、玉眼嵌入 像高五三・七 木造、彩色、玉眼嵌入 像高三五・四
④ 達磨図 伝雪舟筆 一幅 品質 紙本墨画 法量 縦 二四・九 横 二二・六 備考 落款「雪舟筆」 朱文重廓方印「雪舟」 江戸時代の写し。	経蔵 一、釈迦如来坐像 開山堂 一、道元禪師倚像 一、懷奘禪師坐像 一、万安和尚坐像	一、釈迦如来坐像 一、道元禪師倚像 一、懷奘禪師坐像 一、万安和尚坐像	江戸時代 紙製、彩色。像高二五・九 彫①＊ 木造、彩色、玉眼嵌入 像高九五・〇 木造、彩色、玉眼嵌入 像高一〇九・五	江戸時代 紙製、彩色。像高二五・九 彫①＊ 木造、彩色、玉眼嵌入 像高九五・〇 木造、彩色、玉眼嵌入 像高一〇九・五
⑤ 達磨・五祖・六祖像 探幽筆 三幅 品質 紙本着色 法量 縦 九四・五 横 三八・二 備考 落款「探幽斎筆」 円廓内朱文方印「法眼探幽」 箱蓋表墨書「松平和泉守乗寿公寄附焉」	天竺二殿 一、如来形坐像 一、地藏菩薩立像	一、如来形坐像 一、地藏菩薩立像	江戸時代 室町時代 平安時代後 期(十二世 紀か) 木造、彩色。像高三三・九 木造、彩色、彫眼 像高五二・三 京都東九条地藏堂旧蔵と 伝える	江戸時代 室町時代 平安時代後 期(十二世 紀か) 木造、彩色。像高三三・九 木造、彩色、彫眼 像高五二・三 京都東九条地藏堂旧蔵と 伝える
⑥ 興聖寺全図 森一鳳筆 一幅 品質 紙本着色 法量 縦 九三・八 横 一五九・一 備考 落款「一鳳」 白文方印「森敬之印」 朱文方印「不知火□国男」	山門 一、永井直勝坐像 一、永井尚政坐像 一、永井尚征坐像 一、永井尚長坐像	一、永井直勝坐像 一、永井尚政坐像 一、永井尚征坐像 一、永井尚長坐像	江戸時代 像高七八・九 江戸時代 像高七九・一 江戸時代 像高六七・二 江戸時代 像高四六・七	江戸時代 像高七八・九 江戸時代 像高七九・一 江戸時代 像高六七・二 江戸時代 像高四六・七
法堂 一、釈迦如来坐像	彫刻 一、釈迦如来坐像	江戸時代 一、釈迦如来坐像	江戸時代 一、釈迦如来坐像	江戸時代 一、釈迦如来坐像

一、釈迦如来坐像	一 軀	江戸時代	像高四五・二
知祠堂			
一、聖観音立像	一 軀	平安時代後期 (十世紀か)	彫②
準提堂			
一、準提観音坐像	一 軀	江戸時代	紙製か、彩色。 像高三・六
一、聖観音立像	一 軀	平安時代後期 (十二世紀か)	木造、彩色。頭部のみ 横島海蔵院旧蔵と伝える
衆寮			
一、観音菩薩坐像 厨子入	一 軀	江戸時代 (安永三年)	彫③
僧堂			
一、文殊菩薩坐像	一 軀	江戸時代 (天保十四年)	彫④
一、三面大黒天立像	一 軀	江戸時代	像高八四・八
庫裡			
一、韋駄天立像	一 軀	江戸時代	像高四〇・六

① 道元禅師倚像 一 軀

形状 円頂、法衣を着し、袈裟を懸け、両手は腹前に禅定印を結び、杵をはき、椅子に坐す。

(図19)

品質 木造(ヒノキ)。寄木造。玉眼嵌入。漆下地彩色。構造

頭部前後二材。体部は前後二材の間に両脇材をはさみ、中央部に中空にした箱状の木寄せを行う。両手前膊部各横木一材、両手先は共木一材、両足垂下部は横木教材を寄せる。体部像内背面に納入品のための箱型が設けられる。舍利を納入したか。

椅子は木造竹型。墨漆塗。竹型部は竹色に塗る。

保存 〔後補〕裾先前方、納入品用装置、椅子。
状態 像高(頂―杵先)一三七・九

坐高 八二・五 頂―頸 二四・二

面幅 一四・六 耳張 一九・九

面奥 二一・三 腹厚 三二・〇

膝張 九二・五 座奥 五六・五

裾張 八八・五

② 聖観音立像 一 軀

形状 白毫(水晶)をあらわし、左手に蓮花を持ち、右手垂下して立つ。

品質 木造(ヒノキ)。漆箔。彫眼。構造

頭体の幹部は耳後の位置で前後二材矧ぎとし、内割りは全身におよぶ。両手は別材を矧ぐ。

保存 〔後補〕白毫、両手部、両足先、漆箔、光背、台座。

法量 像高 一六八・五 髮際高 一四五・九

備考 台座(後補)墨書銘。

〔慈恩寺 本尊〕

③ 観音菩薩坐像 厨子入 一 軀

備考 厨子朱漆銘

(左方扉)

〔量〕□□頓菴主

大悲院□□□尼 品位

(右方扉)

〔吾□□以肉桂自彫刻此

専修老毗之冥(冥)複者也

(背面)

〔本寮古来安置者大悲院之

本尊也十九世和尚再建之時奉

移大悲院之仏教依之和尚自

刻此一葉尊補体寮之欽典永

修亡父母之冥福也住本寮之人
 一偈一咒回向兩靈矣
 安永三年甲午二月記〔花押〕

④ 文珠菩薩坐像 一軀

備考 須弥座側面刻銘

(右方)

「大士尊像一躰依

永福大夢和尚遺

囑其老母皇都新

町通三条上寺田

智春等寄附焉

皆

天保十四歲癸卯

春二月僧堂円成日

洛巽仏徳山廿八世代」

(左方)

「大夢比丘敬誌之

釈道教

釈道善

釈了榮

松巖居士

釈智春

釈道喜

釈貞寿

釈道円

為 各靈菩提

釈了慶

釈辛信

釈是正

釈惠正

釈惠玄

釈智明

釈妙信

釈智勝

比若永福十四世」

——金工——

一、銅千鳥香炉

一口

江戸時代

高二四・〇 口径九・六

一、桐紋散鏡

一面

江戸時代

直径三〇・八

銘天下一人見出雲守藤原吉秀

一、銅花瓶

一口

明時代

高二五・八

一、銅花瓶

一口

明時代

口径一五・六

一、鐵錫杖

一柄

鎌倉時代

底徑七・〇

一、鐵錫杖

一柄

鎌倉時代

高二九・五

一、塔之島十三重石塔納置品

二口

鎌倉時代

口径二一・〇

小鈴

一口

鎌倉時代

底徑一一・九

鐵劍

一柄

江戸時代

蓋表に「羅漢供用錫杖」の墨書

一、團扇

一柄

江戸時代

柄長二四・三

一、手拭掛

一棹

江戸時代

長三六・〇

一、獅子香炉

一口

江戸時代

高一四・一

(寛文十年)

口径二一・三

一、龍香炉 一口

江戸時代

底裏に寛文十年の刻銘

高三・〇

口径三二・〇

底裏に「越後守」の刻銘

高七四・〇

口径三六・一

高五六・〇 幅五六・〇

高一六・三

高一四・五

口径一八・七

蓋表に「中興和尚鉄鉢」の墨書

一、団扇 一柄

江戸時代

柄長四九・五

蓋表に「法皇様より御拝領之御団」の墨書

長五〇・〇

長五七・〇

長四五・〇

蓋裏に元禄十二年の墨書銘

一、鉄如意 一柄

江戸時代

(元禄十二年)

① 玳瑁如意 一柄

品質 玳瑁製、麻姑手形

法量 長 五七・八

備考 蓋表墨書銘

「従法皇様御拝領之口孫之手藥帶」

私子

品質 獸毛製

② 銅水瓶 一对

品質 銅、鍛造、信貴形

法量 高 二六・八 口径 八・八 底徑 九・二

備考 蓋表墨書銘「たふびん」

③ 鉄蛸足香炉 一口(図27)

品質 鉄、鑄造、蛸足形

法量 高 四〇・〇 口径 一〇・五 足高 二七・五

④ 塔之島十三重石塔納置品 小鈴 二口 鉄剣 一口

品質 (小鈴) 銅、鍛造、槽円形

(鉄剣) 鉄、鍛造、両刃形

法量 (小鈴) 高 二・三

(鉄剣) 刃長 二五・〇

備考 蓋表墨書銘

「塔之島 十三重石塔 慶安三庚寅年九月 奉納出土品

小古鈴式点 鉄鋒刀身一振」

——陶器——

一、青花算木牡丹唐草文三足香炉

(呉須手) 一口

一、青磁観音坐像 龍泉窯 一軀

一、青花牡丹鳳凰文皿(呉須手) 一口

一、五彩蓬萊文大皿 一口

(呉須赤絵印判手)

一、瀬戸「祖母懷」刻銘褐釉四耳壺 一口

清時代

(十八世紀)

元時代

(十三世紀)

明時代

(十七世紀)

明時代

(十七世紀)

江戸時代

陶⑧*

陶⑨*(図20)

口径三三・三 高七・四

底徑一四・五

口径三五・〇 高九・〇

底徑一四・六

陶⑩*

桐製蓋添	一口	(十七世紀)	
一、古瀬戸芋ノ子茶入	一口	室町時代	
牙蓋・黄緑紗綾形地丸紋襷覆添		(十五世紀)	
一、白高麗(半司)茶碗	一口	李朝時代	
		(十七世紀)	
一、御本手撫四方茶碗	一口	李朝時代	
唐子遊文段織縞珍襷覆添		(十八世紀)	
一、伊万里瑠璃釉金彩獅子香炉	一口	江戸時代	
		(十九世紀)	
一、古九谷色絵飛鳥文輪花平鉢	一口	江戸時代	
福 二重角福銘	一口	(十七世紀)	
一、青手古九谷菊花文台鉢	一口	江戸時代	
		(十七世紀)	
一、青手古九谷常夏花文台鉢	一口	江戸時代	
		(十七世紀)	

陶⑪		
口徑一四・四×一三・三		
高八・三 高台徑六・五		
口徑一五・〇×一四・八		
高七・七 高台徑五・二		
陶⑫		
総高二七・八		
口徑二三・五 高四・六		
底徑一一・二		
口徑三二・二 高一〇・三		
底徑一八・〇		
口徑二一・六 高五・一		
底一二・五		

- ① 交趾釉子安観音坐像 一軀(図21)
 法量 高 一五・六 底徑 六・〇×三・五
 備考 箱書「観音送子像」
 陶製、形物成形、黒・褐・緑・紫の低火度釉で着色。岩坐に童子を抱く。背面岩坐には蓮池文を浮彫で表わす。
- ② 禾目天目茶碗 二口(図22)
 法量 A口徑 一一・五 高 六・九 高台徑 四・〇
 B口徑 一一・二 高 七・〇 高台徑 四・一
 備考 箱書A「葉天目茶碗 銀縁」
 B「葉天目茶碗 金粉續」
 Aは河北窯。Bは建窯の作品、Bは大破漆繕い、覆輪を失う。
- ③ 青花獅子鈕花卉魚貝宝文散高脚合子 一口

- 法量 総高 二九・六 口徑 二〇・一 底徑 一一・二
 備考 箱書「なんきん 洗米キ 老ッ」
- ④ 高麗象嵌青磁靈芝雲鶴丸紋散水指 一口(図23)
 法量 高 一九・八 口徑 一八・六×一七・〇 底徑 一四・六
 備考 箱書「雲鶴手切溜水指」
 磁製。朝鮮高麗象嵌青磁の梅瓶を腰で切り水指に仕立なおしたもの。口縁部には黒漆に金箔を貼る。白黒象嵌。黒漆塗蓋添。
- ⑤ 朝日鏤切株形水指「朝日」印 一口(図24)
 法量 高 一三・〇 口徑 一四・四×一四・〇 底長徑 一六・〇
 備考 箱書「宇治朝日焼古水指(中略)文化十癸酉七月二十四世寄贈」
- ⑥ A古瀬戸大海茶入 一口(図25)
 牙蓋、緑地唐草文縞珍襷覆添
 法量 口徑 五・九 高 五・五 底徑 五・六
 備考 箱貼紙「大海茶入二ツノ内」
 B上野流釉大海茶入 一口(図26)
 牙蓋 薄茶地唐花唐草文縞珍襷覆添
 法量 口徑 五・二 高 五・八 底 四・五
 備考 箱貼紙「大海茶入二ツノ内」
- ⑦ 瑠璃地花卉文盤(呉須餅花手) 一口
 法量 口徑 三六・八 高 八・八 底徑 一七・二
- ⑧ 青花算木牡丹唐草文三足香炉(呉須手) 一口
 法量 口徑 二一・二 高 一五・四 底徑 一八・八
 備考 箱書「ゴス焼 大香炉箱 文化七改之」
- ⑨ 青磁観音坐像 龍泉窯 一軀
 法量 総高 二七・四 底徑 一三・〇×七・〇
 備考 箱書「仏徳山 奉容緑磁観音大士之尊像常住物」
 頭部を欠失、陶製の頭を後補しているが、首以下は元時代龍泉窯の典型的な作品。箱蓋表墨書によれば隠元禪師より当山中興老和尚に贈られた品と伝える。なお同種の作品が韓国新安沖の沈船より採集されている。

⑩ 瀬戸「祖母懷」刻銘褐釉四耳壺 一口

桐製蓋添

法量 高 二五・二 口径 一〇・一 底徑 九・五

備考 底に「祖母懷 上」の刻銘

桐蓋裏墨書「鋒寮御用」

箱貼紙「茶室 上林峯順寄附」

⑪ 古瀬戸芋ノ子茶入 一口

牙蓋、黄緑紗綾形地丸紋襷覆添

法量 高 七・四 口径 三・二 底徑 四・二

備考 箱貼紙「瀬戸芋子焼茶容」

⑫ 伊万里瑠璃釉金彩獅子香炉

法量 総高 二七・八

備考 箱書「獅子大香炉 瑠璃大阪焼 七世代」頭部蓋大破

—— 漆工 ——

一、楼閣山水堆紅大香合	一合	清時代
一、山水人物堆紅香合	一合	清時代
一、三聖人堆朱如意	一柄	清時代
一、牡丹文彫朱漆塗扨子	一柄	江戸時代
一、雲龍文彫朱漆塗扨子	一柄	江戸時代
一、蓮彫扨子	一柄	江戸時代
一、楼閣山水吉祥文螺鈿曲象	一基	江戸時代
一、七賢人螺鈿卓	一基	江戸時代
一、宝尽螺鈿香合	一合	江戸時代
一、黒漆塗重硯箱	一合	江戸時代

徑二四・六 高六・九*	徑一四・八 高五・〇*	長四一・〇 幅一一・三*	長二〇・五*	長三〇・三*	長二四・五*	高一〇二・〇*	幅七七・三	縱三六・〇 横五九・五	高二三・〇*	徑七・九 高二・一*	縱二八・三 横一七・八	高七・二*
-------------	-------------	--------------	--------	--------	--------	---------	-------	-------------	--------	------------	-------------	-------

一、麻袈裟（九条）	一肩	江戸時代
附座具 香色平織		
一、金襴袈裟（九条）	一肩	江戸時代
各種金襴を用いる		
一、衣鉢袋 藍木綿地	一肩	江戸時代
一、帽子 黒地	一頭	江戸時代
一、座氈	四枚	江戸時代
田相 黒縹子地唐獅子文様繡		
縁 蒔葱地牡丹唐草文様金襴		

丈一一六・六	幅二二五・五	頼禅和尚遺愛
丈一二〇・七	幅一九六・〇	万安和尚遺愛
丈一三七・〇	幅三四四・八	万安和尚遺愛
丈一〇三・〇		万安和尚遺愛
丈四三・二		万安和尚遺愛
縱四一・三 横三三・三*		伝後水尾天皇所持

蓋裏に道復陳淳の詩文と沈金で菊枝の図あり

① 三ツ輪紅葉蒔絵聚 一合

法量 高 六・〇 徑 五・三

尾長鳥蒔絵香合 一合

法量 高 三・六 徑 六・九

② 屈輪堆朱大香合 一合

法量 高 八・四 徑 三〇・七

—— 染織 ——

一、麻袈裟（九条） 一肩 江戸時代

附座具 香色平織

一、麻袈裟（九条） 一肩 江戸時代

附座具 香色平織

一、金襴袈裟（九条） 一肩 江戸時代

各種金襴を用いる

一、衣鉢袋 藍木綿地 一肩 江戸時代

一、帽子 黒地 一頭 江戸時代

一、座氈 四枚 江戸時代

田相 黒縹子地唐獅子文様繡

縁 蒔葱地牡丹唐草文様金襴

一、麻袈裟(二十五条)	一肩	江戸時代 (嘉永元年)	丈一〇七・五 幅二二〇・〇	一、錦座具 一枚 紺地唐花卍字散し文様錦	江戸時代	縦一一六・八 幅七五・五
香色平織			箱蓋裏に嘉永元年識語	一、打敷 一枚	江戸時代 (天保十三年)	縦四四・二 横四五・四 裏地に天保十三年九月寄 進銘
一、麻袈裟(二十五条)	一肩	江戸時代	丈一一八・五 幅二二五・〇	白綸子地鯛・海老・独楽・ 桜文様繡小袖裂		
香色平織			丈一〇六・四*	① 押絵紀貫之像 東福門院作 一幅 法量 縦 三三・三 横 四五・〇		
一、麻袈裟(九条) 附座具	一肩	江戸時代 (弘化三年)	幅一九四・〇	② 押絵渡唐天神像 東福門院作 一幅 法量 縦 八三・六 横 三二・五		
鼠麻地梅花折枝文様緋			箱蓋裏に弘化三年寄進銘	③ 打敷 白紬地破藤丸散文様小袖裂 一枚 法量 縦 一五四・五 横 一五四・五		
一、麻袈裟(二十五条)	一肩	江戸時代	丈一一七・八	④ 平絹袈裟(九条) 禪色細絹糸平織 一肩 法量 縦 一一〇・〇 幅 一六三・三		
香色平織			丈一二三・〇	⑤ 羽織 萌葱地菱り斜格子文様繡珍 一領*(図28) 法量 丈 七四・六 桁 六〇・五 徳川家綱所用		
一、麻袈裟(六十条)	一肩	江戸時代	幅三三四・〇	⑥ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
香色平織			眉柏祖禪所用	⑦ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
一、平絹袈裟(九条)	一肩	江戸時代	丈一三六・七	⑧ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
田相 黄平絹			幅三三九・〇	⑨ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
条葉 赤黄玉虫織			丈一三七・〇*	⑩ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
一、緋珍袈裟(九条)	一肩	江戸時代	幅三〇四・五	⑪ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
田相・条葉・縁			伝万安和尚遺愛	⑫ 打敷(大) 金地夕顔に扇散し文様唐織 一枚* 法量 縦 一四八・三 横 二一五・〇		
黒地笹蔓に団扇散し文様繡珍			丈一三〇・〇	⑬ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
四天 白地小牡丹唐草文様金 襦			幅二一五・二	⑭ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
一、モール袈裟(九条)	一領	江戸時代	丈一〇一・〇	⑮ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
附座具			伝環溪和尚遺愛	⑯ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
一、掛絡 黒天鷲絨	一領	江戸時代 (安永五年)	丈一〇一・〇	⑰ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		
一、法衣 萌葱地戻紹	一領	江戸時代	丈一一三・四	⑱ 打敷(小) 金地夕顔に扇散し文様唐織 法量 縦 六六・四 横 六五・四		

安祥寺上寺跡

京都市山科区安祥寺

安祥寺の建立とその後の歴史的な展開については、『日本三代実録』や『安祥寺資財帳』及び現存する五智如来像などの仏像群によって、おおかたの概要を知ることができ、美術史学を中心として多くの論考が加えられてきている。九世紀中葉に創建をもつこの寺は、奈良時代の寺院の伽藍の在り方と異なり、仏教の教義に則した所を如実に示すもので、伽藍の立地とその後の展開を知る好例であると云える。とくに資財帳に明記される「上寺」と「下寺」との関係は、平安初期に於ける寺院の成立とその立地について具体的に示したもので、寺院跡の研究の上で極めて重要な問題を提起する。

本年は安祥寺「上寺」跡と考えられている通称「観音平」と云われる山岳の寺跡をとりあげ、これについて地形測量と航空写真撮影を行ったので、ここにその概要を報告し、安祥寺の考察の一部としたい。

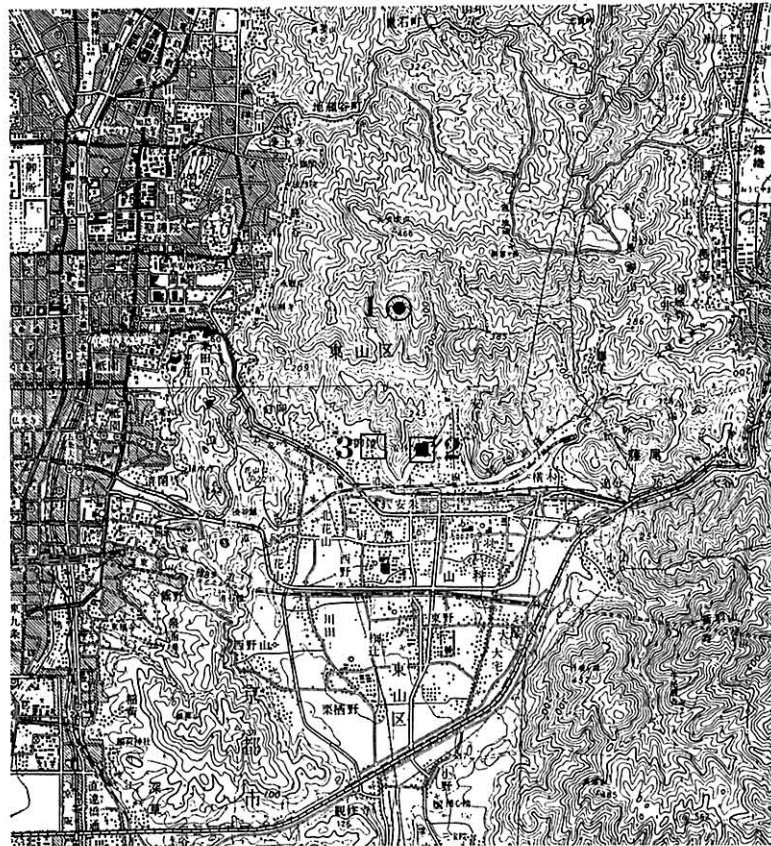
一、調査の経緯と概要

安祥寺上寺は、現在、京都市山科区安祥寺国有林にある(図版第29図)。この地点は江戸時代には「如意山壇谷」と称されていたことが『山城名勝志』等で知れる。寺跡は、現在の安祥寺より更に北に位置する毘沙門堂から北北西に向う谷合約六〇メートルの所より、道を北方向にとり、溪流に沿って約七〇メートルの所にある。安祥寺下寺より約一キロメートルをへだてている。寺跡は北から南にのびる丘陵の先端頂部にあり、標高は三二七メートルを測る。丘陵の裾からの比高は約一〇〇メートルで、山麓から頂部までは約七〇度の急斜面である。寺跡のある丘陵は北側が一段低く鞍状となり、独立丘陵のような地形状態である(図版第30・31図)。

山頂は寺院造営のため修景され、東西約四〇メートル、南北約六〇メートルの

範囲がほぼ平坦となる。建物基壇等の顕在の遺構は次のようである(第2図)。

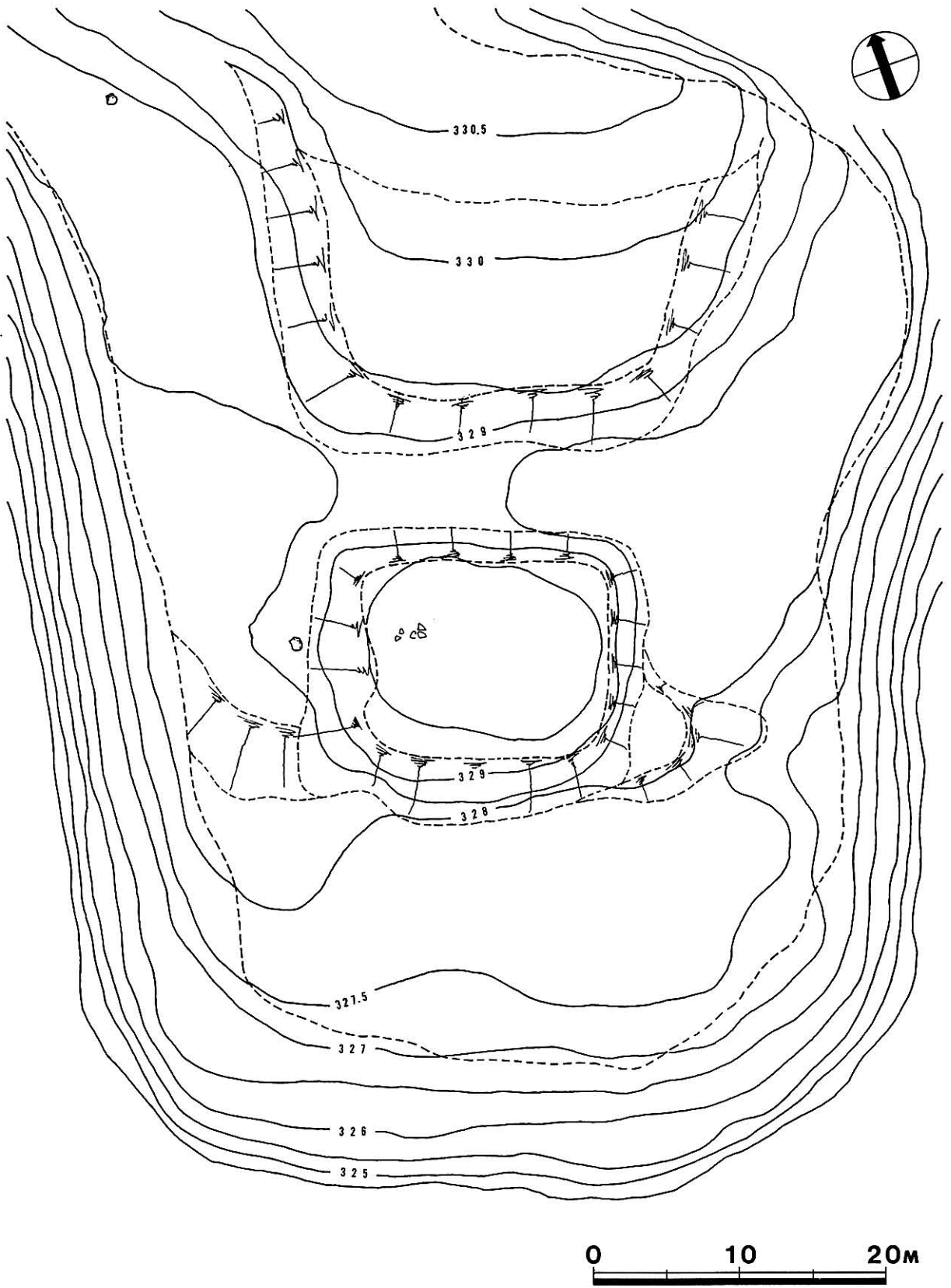
頂部のほぼ中央には建物基壇が存在する。基壇は南側の端部が若干形状を損うが、ほぼ長方形のプランを示す。規模は基底部で東西二二メートル、基壇上面で東西一六・六メートル、南北一四・二メートル。基壇高は南側で一・三メートル



第1図 安祥寺周辺地形図(1上寺、2下寺、3天智天皇陵)

ル、北側で約一メートルを測る。基壇の前面寄りの面翼は基壇前面の平坦部と比すと一段高く、高さ約〇・四メートルの段状となる。

この建物基壇の後方には、基壇端から五メートルはなれ、土壇が構築されている。土壇は南・東・西側が台状に修景され、北側は一段高く築地状になり北側の谷との境を劃している。土壇の前面幅は基底部で約二六メートル、上面の平坦部



第2图 安祥寺上寺地形实测图

で二〇メートルを測る、上面は約一三メートルがやや北側に向って傾斜を強めるがほぼ平坦となる。従って現状では土壇上面は東西二〇メートル、南北一三メートル、面積約二八〇平方メートルほどである。土壇の高さは約〇・七メートルである。北側の築地状の遺構の状況から、周辺の地形は後世いくぶん形状をかえていることが考えられ、この土壇も旧来は平坦面をなしており、その高さも南側の基壇と同じ程度であったと考えられる。

二つの顕著な遺構のほかの部分は平坦部となっており、三つの地区に分られる。一つは中央建物基壇前面に広がる平坦部で、広さは東西四〇メートル、南北一六メートルで台形状のプランである。他の二つは、基壇から後方土壇の両翼に広がる平坦部で、それぞれ東西幅一〇メートルから一三メートル、南北四〇メートルを測り、面積も五〇〇平方メートル以上の広さを有する。このうち東側の平坦部は土砂等の二次堆積によると思われる起伏が多い。西側の平坦部は平面をよく残し、原位置を保つ礎石も認められる。礎石は現状で確認出来るものでも、基壇の西端中央部よりやや離れ一個、平坦部の北端部に一個存する。ともに自然石を用い、一辺〇・五メートルほどの楕円形を示す。また、基壇上面をはじめ、平坦部の各所に礎石の根石と考えられる石組があるほか、同種の石材が各所に散布する。

中央の建物基壇の周辺には平瓦が散布しており、この建物が瓦葺建物であったことを想定させる。後方建物及び東西の平坦部には瓦類の散布は現状では明らかでない。

なお、上寺跡の建物の主軸の方向は、ほぼ北北東である。寺跡のある丘陵頂部は、周辺の山々のうち比較的高位であり、後方北側に位置する標高三五〇―四〇〇メートルの山並のほかは低位な丘陵で、とくに南側に広がる丘陵は標高二五〇―三〇〇メートルほどである。従って、寺跡よりの眺望はきわめて秀れている。

二、建物の位置と規模

安祥寺建立の時期とその経緯については、『安祥寺伽藍縁起資財帳』及び『日

本三代実録』の二つの史料によって概略が知れる。資財帳に記される「上寺」「下寺」が、先の史料による寺建立の記事とどのように関連するか、とくに創建時の問題に関して幾つかの説が提唱されている。

今回測定をおこなった寺跡が、これ迄云われてきたように安祥寺上寺と考えた場合、資財帳に記された次の堂宇が建っていた可能性を示す。

上寺

堂院

禮仏堂一間 長五丈

五大堂一間 長四丈

仏頂尊勝陀羅尼石塔一基 唐

惠壽大法師所建

宝幢二基 各高四丈一尺 金銅惹台獸頭

太皇太后宮御願

僧房

東房二間 一椽皮葺 一板葺
各長一丈 二面有庇

西房二間 一椽皮葺 一板葺
各長七丈 二面有庇

東西軒廊 各長二丈 並椽皮葺

庫頭

椽皮葺屋一間 長□□

椽皮葺井屋一間 長□□

椽皮葺客亭十一間 長一丈

椽葺大宣所一間 長二丈

浴室一院

椽皮葺屋二間 各長三丈二尺
床代二所

釜一口 受二石五斗

湯槽一口

資財帳に記される上寺及び下寺の各堂宇の棟数と規模を対比すると第一表の如

第1表 上寺・下寺堂宇対照表

垣築	堂浴	頭庫	房僧	院	堂
	檜皮葺屋二間 各長三丈二尺 床代三所	檜皮葺井屋一間 長□□ 檜皮葺客亭十一間 長一丈 檜皮葺大宜所一間 長二丈	東房二間 一檜皮葺 各長一丈 西房二間 一檜皮葺 各長七丈 東西軒廊 各長二丈 並檜皮葺	五大堂一間 長四丈	仏頂尊勝陀羅尼石塔一基 唐 宝幢二基 各高四丈一尺 金銅葱台獸頭 礼仏堂一間 長五丈 五大堂一間 長四丈
築垣内 縦七十二丈五尺 広三十二丈		檜皮葺倉一間 長三丈二尺 板葺屋四間 二長八丈八尺 二面有庇 一長五丈六尺 檜皮葺門屋三間 各長一丈五尺	檜皮葺僧房二間 各長五丈六尺 二面有庇	檜皮葺軒廊二間 各長三丈五尺 檜皮葺門楼一間 □□丈四尺	毗盧舍那五輪卒都婆一基 金翅鳥王宝幢二基 各高四丈一尺 金銅葱台同鳥形 檜皮葺仏堂一間 長五丈六尺 四面有庇

くである。ここで云う禮仏堂長五尺などの堂宇の記載の方式は、例えば延暦二〇年の「多度神宮伽藍縁起資財帳」に表示される板葺堂等間などの表示と同じく、建物一棟を示すものであり、長さ五丈は堂の正面幅を具体的に表示していることは明らかである。

こうしてみると、伽藍の中心的な建物である堂院に関しても、上寺の礼仏堂と五大堂の二棟に対し、下寺は仏堂一棟であり、全体の建物棟数に於いても、上寺が堂宇二十二棟に対し下寺が十一棟と大きな差が認められる。ただ、下寺に関しては、築垣や門楼が明記され、寺域を明確にしていることが知れる。

資財帳記載の各堂宇の規模のうち、例えば東房や庫頭のうちの檜皮葺客亭十一間など、各棟の長さが一丈(約三メートル)と小規模である。記載の数値に検討

の余地も残すが、東僧房二間など地形的な制約や、客亭など小規模な建物が山岳寺院では重要な付設建物として機能したことを示すものと云えよう。

両寺を比した場合、少なくとも上寺が堂院・僧房・庫頭とも下寺より伽藍の形態を充実させていたことは明らかである。これらの建物が、寺跡の空間にどのように配置していたか、発掘調査を待たねばならぬことは云うまでもないが、資財帳にみえる各堂宇と寺跡との関係について若干記しておく。

上寺堂宇のうち、最初に記されている堂院中の「礼仏堂」及び「五大堂」が寺跡のうち最も主要な建物である。この二堂は、他の建物群が檜皮葺もしくは板葺であることを明示しているのと対照的である。おそらく瓦葺であったことは基壇等の周辺に瓦が散布することで明らかであろう。瓦葺き建物は上下両寺を通じてこの二堂であった可能性が高い。

礼仏堂は中心建物と思われるが、礼仏堂と称されるように、仏堂と礼堂とが一体となった建物であろう。寺跡の中央基壇に位置し、その南側に礼堂があると考えてよい。五大堂は後方土壇に位置づけできる。長さ各五丈・四丈も基壇及び土壇の大きさに充分である。僧房四棟と東西軒廊は、寺跡の両基壇の両翼にある地域に存在したと考えられるが、東房二棟の長さが各一間と小規模であるのに対し、西房が七丈と著しい差をみせる。桁行が不明であるか、庇をもつ点からすると大形の建物である。両者の差は、長さの記載に誤りの可能性も示す。西房は現状の寺跡の空間では二棟がきわめて接近していた状況でなければ建立が困難であろう。庫頭・浴室には記載された棟数として一六棟がある。基壇前面の敷地にこれ等の建物が建立されたとしても、なお全建物を充足させるには狭少であるといえる。おそらく、寺跡の北に一段低い鞍部の地域にかけて、これらの建物群の幾つかが分散していたと考えられよう。

なお、下寺の伽藍は、先述した如くすべて檜皮葺建物で、寺地二〇〇〇平方メートルを越す境内に、仏堂を中心に一一棟の建物と門屋、それに門楼と軒廊から成っているが、僧房二棟は上寺と比しても規模の点でも小さい。上寺が下寺より主きを置かれていたことが明らかである。しかし、下寺に明確に築垣が設けら

第2表 安祥寺関係記事一覧

	資財帳	文徳実録 三代実録	三代実録 (願文)
嘉祥元 (八四八)	八月。得前撰津園少掾上毛野朝臣松雄之松山一箇峰、謚奉為、太皇太后并四恩、始建立安祥寺。		
仁寿元 (八五一)	三月。太皇太后官始置七僧、以持念薰修。		仁寿年中(八五四) (願子)、初建此伽藍。 (貞觀元年四・十八條)
仁寿二 (八五二)	閏八月。願稻一千斤、以為常灯分、即下官符付之山城國、		
齋衡二 (八五五)	言上編官額	六・一。以安祥寺預於定額。施稻一千束。以充灯油。 (『文徳実録』同日條)	
齋衡三 (八五六)	十月。施入寺之四辺山、山五十町、(中略)安祥寺上寺在其裏、(中略)太皇太后官買上件山、施入於安祥寺、	十・二十一。以山城國宇治郡粟田山施入安祥寺。 (『文徳実録』同日條)	
貞觀元 (八五九)	上啓請毎年度僧、以令恒転諸宗法輪、殿下允許、遂発勝願、建立堂宇、図画尊像、繕写大乘、始度年分、昼夜無間転法輪、		四・十八。縁皇太后御願。置安祥寺年分度者三人。願文日(以下略)
貞觀七 (八六五)		七・十九。縁太皇太后御願。於安祥寺。永代相承。 持念尊勝真言。転読孔雀王經及諸宗經論其願文日。(中略)爰從去貞觀元年。在建立安祥寺。(以下略)	
貞觀九 (八六七)	六・十一。惠運、『資財帳』を勘録す。		

れ、寺域を限っていることは寺院建立の上で極めて重要な意味をもつ。上寺に築地の記載がないことを考え合せると、下寺の寺域が縦・広さとも築地を必要とした場所に占地していたことを示すものであろう。

三、上寺、下寺創建時期の検討

安祥寺の建立時期、とくに上寺と下寺の関係については、『資財帳』及び『日本三代実録』に記載される建立記事の解釈によって大きく二つの考えがある。両資料から建立の経過をみると次のようである(別表二)。

この史料のほかに建立者である慧運の伝を記した『入唐五家伝』にも、寺造営について安祥寺資財帳を基にその経緯を述べたものがある。延文年間の古本にもとずいて文政二年に書したものであるが、この史料中には、資財帳の記録とほぼ同様であるが、『始建立安祥上下両寺』と、上下両寺が付加されている。延文年間(一三五六—一三六一)には上下両寺が隆盛していたことを物語る。

安祥寺建立は、史料的には嘉祥元年(八四八)始建立安祥寺(『資財帳』)、仁寿年中(八五一—八五四)初建此伽藍(『三代実録』貞觀元・四・一八条願文)、貞觀元年(八五九)爰從去貞觀元年在建立安祥寺(『三代実録』貞觀七・七・一九条)がある。寺としての機能が充実してゆく様は仁寿元年(八五一)の太皇太后による僧七僧をはじめ置いた史料を始め、常灯分の願稻の付加・齋衡二年(八五五)の定額寺。同三年の四辺山の施入など多々である。

上寺と下寺の建立期については、嘉祥元年創建が上寺の説と下寺であるとする二説がある。前者は紺野氏⁽¹⁾、後者は毛利氏、副島氏⁽²⁾がその代表である。紺野氏は上寺嘉祥元年創建、下寺の建立が貞觀元年。毛利氏は下寺嘉祥元年創建、上寺貞觀元年建立。副島氏は下寺嘉祥元年創建、上寺齋衡三年開始で貞觀元年完成としている。上下寺建立の記事は先述の關係史料がその基になっているが、資財帳にみえる齋衡三年、願子によって山五十町が安祥寺に施入せられ、その山中に『安祥寺上寺在其裏』の史料が重要な意味をもっていることは云われる如くである。まさに、上寺・下寺の建立の先後は、史料の判読の如何によってその状況が

大きく異なることは自明である。

古代に於ける寺院建立、とくに奈良時代後半に於ける寺院の在り方のうち、上寺・下寺の成立過程を示唆する史料がある。例えば、光明皇后の建立になる新薬師寺の場合でも、天平勝宝八歳（七五六）東大寺四至園中にみられる香山薬師が、新薬師寺造営に先だつ前身寺院であるし、現在、山中に礎石群・瓦類の存在も明らかである。また、京都・醍醐寺の場合に於いても、その創建が、貞観一六年（八七四）、聖宝が香取山に准胝・如意輪の二観音を奉安した草庵を営んだことに始まる。同七年勅願寺となり飛躍的に発展し、延喜十九年（九一九）には下寺宿院造営が開始され、醍醐天皇御願寺としてその偉容を整えてきている。奈良時代後半から平安時代にかけての仏教の在り方と、その教義からくる寺院建立、さらに勅願寺へと発展する経緯のなかで、山中の草庵的な仏殿から、地の利を定める山麓に寺地を再度拡大して行くのが一般的にみられる寺院建立の様相であった。

いずれにしても、安祥寺の造営とその展開について『資財帳』『文徳実録・三代実録』さらに『三代実録』中の「願文」は、御願の寺としての偉容を拡大してゆく様を示すものである。とくに『資財帳』と『文徳・三代実録』の関連記事は、寺造営とその発展の経緯を具体的に示すもので、『三代実録』貞観元年四月一日条の願文は、文徳天皇の崩御の後の順子によるまさに仏法に対する願文であるし、先の三つの史料とはややおもむきを異にしたものと考えられる。

安祥寺は、嘉祥元年に松山一箇峰を開いて、始めて慧運によって建立されたもので、これが現在のの上寺跡と考えられる。その後、太皇太后宮の庇護のもとに僧の常置、常灯分の付加、定額寺となった。斉衡三年の四辺の山五十町の施入を受けるが、この地域に「安祥寺上寺」が「其裏」に在ったことは、紺野氏の云われる如く、寺域の狭少を助くべく施入されたものであり、すでに上寺が存在していたことを示すに充分であろう。願文中にみられる仁寿年中の初建此伽藍の史料は、この段階で上寺が伽藍としての様相を整えたことを示すものであろう。その地域は願文にみられる如く、天智天皇の山陵に近く、山岳的な色彩を強くおびる

霊峯であり、未だ寺号が定まらぬ「道場」が寺の基礎となった寺であることも示すものである。斉衡二年に定額寺となったことは、本寺の上で極めて大きい比重を示そう。

上寺が順次整備されていった様相は史料的に明確でないが、資財帳中の堂院に存在した礼仏堂が注意されよう。先述の如く礼仏堂は本堂と礼堂が一体化されて表現されたもので、現在の寺跡のなかで中央にある基壇がそれに合致する。この基壇は礼堂と本堂を同時に置いた場合、きわめて狭少で、もともと、基壇の上に本堂があり、後にこの前面に礼堂を設け、両屋を接合した形となった事は充分予想される。僧房等の付属の堂宇が現状の山頂のみでは建立不能であつてみれば、創建以来伽藍の拡大が順次されてきていることが明らかである。

貞観七年七月一九日条の次の文が注意される。「(前略)爰従去貞観元年、在建立安祥寺(以下略)」。この史料によって上下両寺のいずれかが建立されたとすることは、一般に云われることである。

天安二年八月二七日、文徳天皇が崩御されている。母順子は御歳四九である。貞観七年の願文中にみえる、先の貞観元年安祥寺建立の記事は、文徳天皇の崩御に際して、さらに御願寺としての安祥寺に対する対処の表れの一つと考えられるし、この時点で山麓に下寺が成立したと考える。順子は貞観一三年九月二八日に崩じている。もちろん、先述の如く上寺の規模からしても、下寺とともに上寺は主要な安祥寺の伽藍であり、下寺は規模からみても、やや従の伽藍であったことはいなめない。延文年間、大唐五家伝に記された如く、一四世紀中葉頃には上寺・下寺が存在していたことは勿論である。

上下両寺の仏像群に於いても、すでに指摘されている如く、資財帳中の各像が上下寺のどちらに安置されていたか知れるものもある。資財帳の各仏像群中、御願が明確な像群とそれでない像群が存在することが知れる。とくに五智如来については御願者の名が記していない点に注意される。上寺の創建時の仏像として位置づけできると考える。各仏像群と両寺への安置の過程まで言及できないが、記された各仏像群は、下寺が完成した後、主堂である上寺へ多く安置されたのである

うことは明らかであろう。

安祥寺も順子の死後、御願寺としての権勢は次第に衰微していったことは、上寺が廃寺としてその跡もわずかに留める点でもうなづける。奈良時代、国分寺の成立とその後の衰微の経過と同様である。安祥寺下寺が当時の威容をわずかに残す背景のなかに、密教における山岳寺院とそれを取りまく中央貴族のかかわり合いを如実に示すといえよう。

註1 紺野敏文「創造期の安祥寺と五智如来像」『美術史』一〇一号 一九七六。

2 毛利久「安祥寺五智如来像考」『仏教芸術』二四号 一九五五。

3 副島弘道「安祥寺五智如来像の造立年代と承和以後の作風展開」『仏教芸術』一三三号 一九八〇。

4 註3に同じ。

(付記) 安祥寺上寺跡の地形測量調査は昭和五十六年二月十三日より同月二十日まで行った。調査は当博物館八賀晋、難波田徹、服部忠男の他、大谷大学院学生斉藤望氏が加わった。

第1図は国土地理院の許可を得て、五万分の一地図「京都東北部」「京都東南部」から転載した。

(八賀 晋)

訂 正

本報告1の次の記事を訂正します。

(正)

12頁22行目 廃大樹院旧蔵

(誤)

廃宝樹院旧蔵